
手をつないで

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手をつないで

【Nコード】
N9321I

【作者名】
翔

【あらすじ】

幼稚舎から大学院まであるマンモス校、聖徳学園せいとくに理事長の孫として通う宿世虎狼しゆくせこ。

何不自由なく暮らす彼は、心に傷を追っていた。

そこに、幼い頃から好きだった女の子が転校してきて…？

某携帯サイトでの連載を掲載したものです。

そちらと同時進行くらいで更新して行きます。

序章

物語の始まりは

差し出された手は

とても温かくて

俺の冷え切った手で握ったら

凍ってしまう……って思っていた

でも……そんなことなんて関係ないくらい

君は強くて

優しかったんだね……。

幼い頃は、母と二人だった。

今にも崩れそうなほどボロいアパートで、俺たちは暮っていた。

俺の母のイメージは、

優しい笑顔とか

暖かい腕の中とか

美味しいご飯とか

……そんな普通の子供が感じられる様な

心地良い物は一つもなく、

酒を飲んで幼い俺を殴り、
口汚く罵る記憶しかない。

そしてたくさんの血、薬、傷。

俺を傷つけるためだけの言葉。

『あんたさえいなければ』

『お前さえ出来なければ』

毎日の様にヒステリックに泣き叫んでは、あまりの様子に隣人が止めに入る。

母の苦しみなんて理解出来なかったあの頃の俺には、母は畏怖の対象でしかなかった。

怖かった

痛かった

大嫌いだった

……淋しかった

『母子家庭』という事でほぼ費用が掛からないことから、母にとって邪魔な俺は保育園に預けられた。

実際には離婚などしていなかったのだから、どんな手続きを取っ

たのかは、社会の仕組みが少しだけ分かっている今になって考えてみればおかしな話なのだけれど。

それでも、殴られることのない、ひと時だけは手に入れられた。

安穩に見えた生活は俺の寂しさを浮き彫りにさせた。

周りは…みんな優しい笑顔と暖かい手にその小さな手を包まれ帰っていく。

まともに迎えに来てもらった事なんてなかった。

早く家に帰る事さえ、男がいる時には拒絶された。

俺に暴言を吐いた直後に、甘い声で男に擦り寄っていく母に愕然とした。

ただ涙をこらえ、ボロいアパートの階段の下で

夜に仕事に出て行く母と男がいなくなるのを待っていた。

日常を闇に覆われた生活を送っていた俺に差し伸べられたのは、
小さな手。

『虎狼ちゃん』

笑って差し出されるその暖かい手は、俺を暗闇から救い出してくれた。

『一緒に帰ろうよ』

『月華…ちゃん』

同じ組で優しい月華ちゃんは、笑って言った。

教室の片隅で顔を伏せて座り込む俺の手をギュッと握る。

『今日から、晩ご飯月華のお家で一緒に食べよう。パパとママとお兄ちゃんと虎狼ちゃんまで』

照れくさそうに彼女は笑う。

『一緒に帰ろうね』

真つ暗で、星も見えない様な暗黒の世界から俺をひっぱりだして
くれたその小さな手は

いつも俺を安堵させた。

母には呼ばれない俺の名前を呼んで、

暖かなぬくもりで俺を包み、

明るい笑顔で俺を引き付けて離さなかった。

拒絶される事が怖くて、自分から手を伸ばす事は出来なかったけ
ど。

差し出されたその手は、彼女から離される事はなかった。

生まれて初めて「好き」をくれた彼女は、

こんなに汚れた今の俺の中にさえ、

綺麗な気持ちと一緒に残っている。

お別れの日

幼い俺は

ただの独占欲から

彼女にキスをした。

そして、夢を語る様な口約束。

彼女は笑って頷いてくれた。

『約束だよ』

って彼女が小指を出し、自分の指を絡ませる。

本当になりますように…

そう祈りながら。

人の間に触れる度に、自分を失った。

一瞬の快樂に溺れ、人を傷つけた。

今の親友に殴られ、

問い詰められた時

「お前を愛してくれる奴がいるから」

そう泣いた親友を見て、

閉じ込めていたぬくもりを思い出した。

唯一…綺麗な思い出の

…君を想う。

可愛い君は、

きっと今頃は愛しい男の腕にいるかもしれない。

でもいつか会った時は、

ちょっとはカッコ良くなったね

そう言っただけ俺を好きでいてくれた昔を誇って欲しい。

そう願ったんだ

序章（後書き）

某携帯小説で、1ページであまり文字が打てないため、途切れ途切れ感が強いです（・口・）

わざとページの合間で、行間を空けてあります。

次の章からは、もう少し小説らしくなる予定です。（・・・）

第1話

「なあ。虎狼」

静かなはずなのに、今日は騒がしい騒音の中、酷く不貞腐れた声をした親友の道也が俺を呼んだ。

「なに？」

睨むようにして見入っていた手元の教科書から、視線を目の前に座っている道也に移す。

学校内で一番歴史のある古い建物、微かに騒つく図書館の中で俺達は今、テスト勉強をしていた。

「お前が勉強する必要性なくね？」

「それ…本気で言ってるの？」

まったく…。

真顔で頷く道也に呆れて、息を吐いた。

何を言いだすかと思えば。 あほか、こいつは。

教科書が散乱するテーブルの上に、持っていたシャーペンを置き、道也の高め鼻を掴む。

すると痛いからか、道也の顔がますますしかめっ面へと変貌を遂げた。

「…俺がきちんと理解してなくて、誰がお前の赤点を回避してやるんだ？」

お前のザル頭にも分かるように教えるために、深く理解しようとしてるんだぞ」

言うだけ言って、強く掴んでいた鼻から手を離した。

「…いつてー…」と鼻を押さえ、ぶつぶつと不満を零す道也の顔を見れば、ただ勉強する事から逃げたいと言っている事は明白。

ただ、さすがに『（今回もヤバいから）教えてくれ』と泣き付いてきた手前、自分から放棄は出来ないとわかつてはいるらしい。

大体、俺は…勉強している…という感覚より、

どうやったらこいつに理解させてやれるか を考えている。

…家庭教師みたいな気分なんだっつーの。

俺は宿世虎狼。
シュクセコロウ

4月で早々と誕生日を迎えて、17になった。

目の前で化学の元素記号の暗記にすら頭を抱えているのは、愛すべき(?)俺の親友林道也。ハヤシミチヤ因みにBL要素は何もないから、安心して頂きたい。

陸上部の特待生で、基本的に勉強が大嫌い。

何の自慢にもならないが、基本的に学力レベルの高いうちの学校。

道也は、絶対『特待生』以外じゃ入学は不可能だっただろう。

しかし、いくら一芸に秀でた『特待生』とは言っても、一般生徒と同じ内容の試験はパスしなければならない。

『文武両道』という旗を掲げる聖徳学園。臨機応変、時や場所を違えば、文も部もどちらも必要な時があるのだから、出来て不都合なことはない。

年間、数百万と高額な学費と寮費が無料になる『特待生』制度。

だが、運動だけで渡っていけるほど、世の中、そんなに甘いはずはない。

道也の場合、全国トップレベルの一流選手(?)だけあって、こ

こぞと言つ時の集中力は凄まじいので、まだ何とか落第は免れてはいる。

が。

毎回の試験の度に、

「何がわからないか分からん」

という科白に頭が痛くなる。

中等部の頃から年に数回も同じ光景が繰り返されている。

つまり、同じことは繰り返さないっていう、本当の意味での学習が全くできていないってこと。

恐ろしい。

言っても無駄だと悟った俺は、高等部に入ってからは何も言わず毎回試験勉強に付き合っている。

去年の夏休みは…、この馬鹿の補習に付き合っただけで散々だったからな。

俺も本当に人がいいよ。

「もぉ…限界…」

夕陽のさし始める放課後の図書館で、とうとう道也は音を上げた。

いや、さつきからずっと音らしい音はあげていたんだが、限界点を突破したらしい。

力なく教科書を広げた机に伏せた姿をちらりと見てから、腕時計で時間を確認。

勉強を始めて2時間半…か。

勉強が何より嫌いな道也にしてみたら…頑張った方だろう。

このまま続けても吸収は出来なさそうだし。

…今日は解放してやるか。

「お疲れ」

俺はぱたんと音を立てて教科書を閉じ、足元に置いていた鞆に片付けながら労を労う。

「もう…終わり?」

伏せていた顔を力なく上げた道也に頷いた。

「このまま続けてもお前の頭にはもう入らないだろ？」

「ご名答！流石虎狼だ」

一気にさつきまで死人のようだった顔が明るくなる。

…元気じゃねーか。

数ページ追加と行きたいとこだが。　まあ。終わりとってしまつたからには仕方がない。

機嫌よく道也が教科書を片付けながらも話してきた軽口に答えていると

「宿世君が笑ってるよ」

「可愛い」

「道也君といるときだけ、何だか雰囲気違うよね」

先程までの集中を欠いたせいかわ、小さな声が耳に入ってくる。

…俺だって普通に笑う事位ある。いつもいつも愛想笑いしてるわけではない。

しかも男に対して可愛いって…。

いつもの事だけど、いい気はしないよな。

放課後の図書館は、静かで好きだけれど、どうも道也といると女子の視線を強く感じる。

特に今はテスト期間。勉強のために生徒が多いのは道理だろうか（例に漏れず俺たちもいるわけだし）仕方ないのだけれど。

あー…、面倒くさ…。

天井を仰いで凝って重くなった身体を椅子の背もたれに預けた。そのまま上に腕を伸ばすと、血液が流れていく感覚が気持ちいい。

「オレの虎狼は相変わらず人気者だなあ…。」

その科白を聞く度に、毎回思うんだけど『オレの』って何だよ。

鞆のように弾んだ声に道也の方に顔を戻すと、整った顔を崩しさわやかに笑っていた。

180センチを越す身長に男らしい精悍な顔立ち。

そのくせ笑うと少し幼くなり、とても明るい印象になる。

「そんなんじゃないよ」

ぶっきらぼうに俺は答える。

大体にして俺なんかより…お前のが人気者じゃねえか。

そう突っ込みたかったが口には出さなかった。

道也がもてるのはもう本人の知る所だし、嫉妬している訳でもないが、こいつが調子に乗ると少しイラツとするからだ。

…俺もなかなか心が狭いよな。

内心苦笑しながら思った。

「なあ、ちょっと小耳に挟んだんだけどな」

机に両肘を乗せて身をのりだした道也が、ウキウキした様子で顔を近づけ耳打ちをしてきた。

「何？」

誘われるまま顔を近づけるとまた図書館中に黄色い声が沸き起こ

る。

お陰で必要以上に道也に顔を寄せないと声が聞こえない。

「転校生が来るらしいぞ」

「今頃？」

「何かめちゃくちゃ強いつて話だった」

微妙な時期だなーと思っていると、道也の楽しそうな声が耳に響いた。

「めちゃくちゃ強い？」

「なのに、すげえ可愛いらしい」

強くて可愛い？

…なんだそりゃ。

相容れない言葉に首を捻る。

「フータタイプじゃね？」

道也の言葉にクラスでよくつるんでいる風太を思い浮かべる。

色白で眼鏡。典型的な華奢な文系秀才の物静かなタイプで、俺とも道也とも系統が違う。

道也は典型的なスポーツマン。

俺は…形だけは優等生。

風太はどう考えても（俺から見たら）守ってあげたいタイプで、『強い』とはかけ離れていた。

「…何か違うと思う」

眉を寄せて訝しく呟いた俺を無視して、道也は続ける。

「とにかく楽しみだな」

ニカッと笑った道也の顔を見ると、ふと、俺はその情報元が気になった。

何で学校関係者の『俺』が知らない事をこいつが知ってるんだ？

陸上関係者ならまだしも、会話の内容から考えるに、どうやらそ

うでは無さそうだし。

・
陸上で強いという表現ではなかった。

俺が知らない情報を先に道也が仕入れているのは、どういこと
だろう。

俺は抱いた疑問を道也にぶつけてみる事にした。

「…それ何情報？」

眉を潜め、ニコニコが地顔なんじゃないかと思うほどの笑みを浮かべる道也を軽く睨むようにして見た。

「こないだ、やたら美形な外人みたいな人がきていてさ、英田と話しているのみちゃった。多分手続き。」

…転校生って原田と英田も言ってたし」

…話しているのを聞いたって…

それはなんていうか、俗に言う

「…盗み聞き？」

眉間に数本は皺が入っているだろう俺にも、道也はコーラの後味のような爽やかな笑顔を崩さない。

その変わらない笑顔を肯定と取る事にした。

盗み聞きかよ…。

はぁ、と息を吐いた。

「てか、何で可愛いとか分かるんだよ」

もう一度、疑問点を突っ込んでみる。

「写真見たから」

…どんだけだ。

思わず額に片手を添えて、呆れて曇る表情を隠した。

…それは…、もう既に聞き耳を立てただけじゃないじゃないよな？

「…写真みたら、どんなタイプかわかるんじゃないの？」

「んー、とりあえずオレらの中ではフータが一番近い容姿だったから、わかりやすいかなって」

なあ、お前の中には俺達3人しか比較対象がないのか？この学校にどんだけの生徒が在籍してると思ってたんだ？

ますます強く突っ込みたくなるのを唇を噛んで我慢する。

大人になれ、堪えろ。俺！

唇に歯を立てながらぐつと堪えきつた俺は偉い。

いつもながら、道也は適当な男だ…と。

ただ、趣味が美形鑑賞と豪語する道也のことだから、可愛いということだけは本当なのだろう。

少なくとも美的感覚だけは、信頼は出来るからな。

「まあ、みんなにお披露目の前に、お前に声がかかるんじゃない？生徒会長」

「…面倒臭い」

俺は机に頬杖をつきながら、本心から呟いた。

見知らぬ他人の世話を焼ける程、人間が好きではない。

それにお守りは道也だけで沢山だ。

生徒会だって、成績と理事長の孫っただけで入れられただけで、好きで入った訳ではない。

生徒会長職だって、何故か勝手に推薦され、いつの間にか決まっていただけだった。

馬鹿でかいうちの学校の生徒会は案外大変で、毎日山の様に仕事がある。

「そういうなよ、忙しいのはわかるけど」

道也はそこで一回言葉を切り、腕を頭の後ろで組みながら呟いた。

「でも珍しいよなあ、双子が同じクラスなんて」

「双子？」

引っ掛かった言葉を頭の中で反芻してから、少し間をあけて俺は聞き返す。

「写真見れたのは兄貴だけだったけど、あの顔が女の子だったらマ

「じゃばいって」

似ている…『双子』…か。

『もしかして』と浮かび上がった淡い期待を、再び唇を噛んで飲み込む。

もう…期待して、浮かんだ想いを地面に叩き落とされるのはこりこりだ。

「お堅い虎狼でも惚れちゃうかも」

道也は俺を覗き込んで、相変わらずの明るい声で言った。

『俺はそんなんじゃない。お前も良く知ってるだろ?』

…言おうとしたが、道也の太陽のような笑顔が曇るのを見たくなく、口にするのを止めた。

無言の俺を、切れ長の瞳でしばらく見つめてから呟いた。

窓際に座る道也の顔は、茜色に鮮やかに染められた太陽光のせいでよく見えなくなっている。

「早くお前が大事に出来る女が現れますように」

道也の顔を見なくてもわかった。

きっといつものおちゃらけた瞳でなく、真剣に俺を見ている。

俺の上辺の感情を見透かし、尚包み込む様な暖かさは道也の魅力でもあったが、今の俺には正視出来なかった。

静かに呟かれた言葉。

それはきっと……

道也の祈りにも似た

……願い。

「なあに言ってるんだよ」

そう返した……こんな弱い俺には

道也の祈りが叶う事はないと

…思っていた。

何度も願い、叶わなかった願い。

自分で動くことは諦めても、待ちわびてしまう愚かな自分。

どうしようもなく女々しくて、情けなくとも、

諦めきれず、追い求めてしまう幻影。

また…触れたいと思う

浅ましさを。

渦のようにぐるぐるすると果てなく周り続ける自身の間に、否応なしに打ちのめされながら、瞑っていた瞳を開いて道世を見ると。

…酷く穏やかな、全てを許容してくれているかのような眼差しで俺を見つめていた。

大丈夫…。

小さく息を吐いて、無理に笑ってみせた。

道也にまた助けられた、と感じた。

試験最終日、7月1日。数日間に渡るテストが終わり、残すは今日1日だけとなる。

クラスの連中は疲れきった顔をしながらも、今日頑張ればやっと終わるといふ、妙な安堵感に包まれていた。

「おはよう、虎狼」

にっこり笑う道也が気持ち悪い。

笑っているのはいつものことなのだが、試験日なのに笑っているのはおかしい。昨日は瀕死みたいな顔をしていたくせに。

なんでこんな朝から明るいんだよ。いつもなら最終日の今日も死にそうになってるよな？（テストが終わった瞬間に蘇生するけど）

明日は嵐でもくるのか？

いつもテストの時は、別人の様に暗いはず…と訝しく思って眉根を寄せた。

しかも今日は微妙に低血圧気味な俺は、無駄に爽やかな道也の顔を不機嫌に眺める。

「滅多に使わない脳ミソ使って、どっかおかしくなったのか？」

そう言うと、はぁ…、と大袈裟なため息をつかれた。「やれやれ、虎狼は忘れっぽいな」などと呟きながら、力なく頭まで振っている。

忘れっぽい？

元素記号すら暗記できないお前にだけは言われたくない。

道也はわざとらしく俯かせた顔をあげ、俺を見た。

「んな訳ねーだろ？お前今日はお楽しみがある日じゃないか」

試験勉強一色のクラス中に無駄に元気な声が響く。

テスト前でピリピリしている神経が逆撫でされたのか、一斉に視線が道也に集まった。

が、声の主が道也だと認識されると皆一様に教科書や参考書に意識を戻す。

こいつが騒がしいのは、何も今日に始まった事ではないから、ク

ラスの連中も仕方ないと半ば諦めているんだろう。

「今日、転校生来るんだろ？」

太陽の匂いすらするのではないかと思うほどよく陽に焼けた顔を寄せてきて、小さく道也は囁いた。

ああ、こいつの上機嫌はそれのせいか。

すっかり忘れていた。

「…英田にテスト終わったあと、呼ばれてたんだ」

俺は思い出して、額に掛かる前髪を掻き上げた。

そう言えば昨日、担任の英田先生に「転校生に学校の案内をするように」と頼まれていたのだ。

確か「テスト終了後に、職員室にある面会室にこい」と言われていたはず…。

テスト勉強を必死でやるほど困ってはいないが、昨日の試験範囲までのラストパートを掛けた道也に勉強を教える事に必死で、すっかり頭から抜けていた。

俺も道也のこととやかく言えないな。

小さく苦笑して、道也を見遣った。

「助かった。すっぱかすところだったよ」

素直に礼を言つと、道也はふふん、と鼻を鳴らした。

「いいって。今日は、案内終わるまで待っててやるよ。一緒にメシ食おう」

そう言つと道也は自分の席に座つて、ニヤリと笑った。

あわよくば、他のクラスメイトより先にお目当ての可愛い転校生を見てやるつという魂胆が見え見え。

ま、こいつらしいな。

「後、2時間頑張ろうぜ」

まったく、毎回泣くほど嫌がつてるくせに。頑張ろうなんてどの口が言っただか……。

隣の自分の席につき、俺は一応頷いてみせた。

*

第1話(後書き)

第2話

道也に振り回されたテストも無事に終わり、英田に呼ばれていた俺は職員室の中にある面会室のドアを叩いた。

叩いた後、何となく周りを見渡すと、テストが終わり1週間振りに生徒の入室が許された職員室は、漸くいつもの活気を取り戻している。

「あ、宿世君だ」

「今日もカツコいいね」

…そりゃどーも。

と、振り向いた瞬間に俺を見ていたらしい女子と目があい、黄色い声が上がった。

きもい、とか言われるよりはいいか。悪口より耳障りな歓声の方が、ずっとマシだ。

理事長の孫という肩書きが、まとわりつくこの学校という、酷く狭い社会で注目されてしまうのはある意味仕方ない。

宿世って名字自体も珍しいし。俺とじいちゃんの繋がりが分からない方がどうかしてるってもんだ。

歓声の方を向いて軽く微笑む。そして再び上がった声は無視して、身体を正面戻して扉に手を掛けた。

別名、貴賓室とも（教師の間で）呼ばれているこの部屋に、転入生がいる事は珍しい。

どっかの大会社のVIP…御曹司でも転校してきたか？

思いながらノブを下に下げると、かちやりと音がした。

うちの学校は普通の私立より学費が高い。

古い校舎と伝統の維持、そして木々などの環境維持にそれなりの費用がかかっているからだ。

どこかの御曹司とは思ったが、金持ちなら特待生扱いはしないだろう。

余程のことでも無いかぎり、時期的にもきっかり新学期に合わせてるだろうし、それはないだろうな…。

道也の話で『特待生』ってことは確実な情報だった（みたいだし）。

そんなどうでもいいことをつらつらと考えながら

「失礼します」

ほんの少し待っても返事のなかった部屋の、やたら重厚な扉を押し開く。

無駄に広い面会室の皮張りのソファーには、4人の家族と担任の英田が座っていて、入室した俺を一斉に見た。

ここにいる事が信じられない人達に

…正直驚いた。

「虎狼…」

1人の整った顔立ちの男性が親しげな感情を乗せて俺の下の名前を呼んだ。

天然と分かる茶色い髪に、同じ色の透き通った瞳が懐かしそうに俺を見つめる。

「虎狼ちゃん」

少しウェーブのかかった黒髪の綺麗な女性も俺の名前を口にする。

その2人の真ん中には、うちの真新しい制服を着た男女が座っていて、やっぱり俺を目を見開くようにして凝視していた。

髪色は2人の色を足して2で割った、焦げ茶色っぽい色をしている。大きな瞳は揃って男性譲りの褐色。

…この転校生を道也が「可愛い」と言った意味がやっとわかった。会った事のないのはわかっているけど。

…やっぱりバカだな…道也は。

全然変わってないと言えば嘘になる。でも見間違える事なんて出
来ないほど、あの頃の面影が色濃く残っている

…月華が可愛くない訳ないじゃねえか…。

話に上がっていたと予測出来る…月之丞は別としてな。

俺の初恋の四聖^{シセイツキカ}月華が、そこにはいた。

月華に見惚れていた俺が、男性が近づいてきたと視界の端で捉えた時には、たくましい腕に抱きしめられていた。

…俺はこの腕を憶えている。

最初はあまりにあたたかなここに戸惑って、動けなくなった。

親に満足に『抱き締められた』経験がなかった当時の俺は、彼に何をされているかよく分からなくて、『心地いい』って事に気がつけなかった。

でも、この腕の中から出た時、この温もりは当たり前でなかった事を思い知った。

俺の背中に優しく添えられる女性の手。

この手に何度、甘えただろう。

頭を優しく撫でられた記憶と、無条件に与えられた優しい笑顔が俺の心に蘇る。

掛け替えのないぬくもり与えてくれた柔らかな眼差しを湛える2人の顔を見る。

胸の奥底から込み上げてくる感情に逆らう方法を見いだせない俺は、再会の喜びに胸を震わせた。

「…おじさん。…おばさん」

絞りだした震える声。

… 目頭が熱い。

頬を熱い水が伝い、地面や制服に水滴が滴ったとき、漸く自分が泣いている事に気がついた。

ぼたりと、重力に逆らうことなく流れ落ちる涙を拭う事も出来ないまま、涙でますますつまり、擦れた声を絞りだした。

「…ご無沙汰しています」

… 1年間、他人の俺を区別することなく、自分たちの子供に与えると同じ愛情で育ててくれた。

ろくに『ありがとう』という感謝の気持ちも伝え切れずに別れた、優しい人達。

ある程度大人になったと思っていた今も、沢山言いたい事があるはずなのに、こんな安易な言葉しか出て来なかった。

悔しい…。

嗚咽をしゃくりあげながら、やりきれない想いを噛み締める。

… 結局俺は… ガキのままだ…。

言葉のかわりに優しい微笑みを浮かべる2人を抱きしめる。

あの頃と変わらないぬくもりと匂いが、俺を包み込んだ。

…ふと気が付いて、顔を上げると。

英田がさも驚いたという顔で俺を見ている。

普段…素直に感情を出さない俺が甘えている事が先生にとっては珍しい光景らしい。

「宿世、知り合いか？」

英田の声で思い出から現実世界に引き戻され、泣いてしまった事が急に恥ずかしくなった。

17にもなつて、何でこんなに人前で泣いてんだろ…。

名残惜しい温もりから身体を離し、慌てて目を擦りながら返事をした。

「あ、はい」

…多分顔は羞恥で真っ赤だったと思う。

そんな照れる俺を眺めながら、英田は口角を上げ、微かな笑みを湛えながら、どこか納得した様に頷いていた。

「虎狼」

男にしては少しだけ高い声。

道也が『可愛い』と騒いでいただろうと思われる月華の双子の兄、シセイツキンジョウ四聖月之丞が、俺を抱き締めた。

本当の兄弟の様に一緒に過ごした、文字どおり兄の様な弟の様な、かけがえのない存在だった。

「久し振りだな…月之丞」

華奢なのに、案外がっちりしている月之丞を抱き締める。

「こんなにイヤミにでかくなっちゃって」

俺より10センチ位背の低い月之丞が、拗ねた様に呟いた。

そんな幼い表情は、昔と変わっていないかった。そんな小さなことに喜びさえ感じる。

「そんなことないって。お前だってまだ伸びるよ」

「…そおかなあ」

「……保証は出来ないけど」

そう言つと、茶色い瞳が細められ、数秒後に軽く睨まれた。

少し尖った口元が不機嫌になったことを表していた。

素直な感情表現も変わらないな。癪癪持ちめ。

それでも軽口を叩きあってから身体を離して笑う。

「…久しぶりだな、兄弟」

ぶつきらぼうだけど、照れ臭そうな月之丞の言葉が素直に嬉しかった。

「虎狼ちゃん」

初めて聞く鈴の様な声に心臓が高鳴った。

…鮮明に思い出せる記憶よりも…少しだけ低くなった声。

その声の先に視線を移すと、月華が俺を大きな瞳で見つめている。

無意識の内に、思い出の真ん中にいる幼い月華に、今の月華を重ねていた。

見た目も綺麗になつたけど、純粋な本質が変わっていない事に、深い安堵と微かな嫉妬を覚える。

「浮かんでくる自虐的な想い。」

『…まだ綺麗な君に比べて、俺は随分汚れてしまったね』

『俺は昔みたいに…月華に見つめて貰える様な男じゃないんだ』

長年蓄積されてきたそんな屈折した擦れた想いは、月華と視線を交わした数秒間でいとも簡単に打ち砕かれた。

パラパラと壊れた感情の破片が、彼女という光を浴びてキラキラと消えていく。

……………。

ああ、そうか。

いろいろな言い訳を重ねて、環境だけで壁を作って。嘘で自分を閉じ込めるように塗り固めても

彼女の月の様な地球の形すら変形させてしまうような…強くて優しい引力に、差し込む光に、

逆らえないと感じた。

ただ名前を呼ばれただけで、

目が合ったただけなのに…

こんなにも惹かれていく。

「月…華」

何度となく、呼び続けた愛しい名前を言葉にする。

いくら声が枯れるくらいに呼び続けても、決して届くことのない
った俺の声。

俺の言葉は、声は、そして心は、君の耳には、瞳には、心にはど
う響いているだろうか。

勝手に動く脚で歩きだして、無意識に広げた両の腕で、潤んだ瞳
で俺を見つめる月華を抱き締める。

腕に閉じ込めた彼女からは相変わらず変わらない…月華の匂いが
する。

人間の嗅覚は、人の身体が一番奥の記憶を刺激する。

記憶と寸分も変わらないその匂いにとっても…安心した。

ねえ、月華？

あの頃のまま…全く匂いが変わってないって事は…他の男を知らないの？

『…良かった』

まだ…俺のものに出来る可能性は残ってる…？俺の匂いを月華に付けられる？

…そんな権利もないくせに。

俺は…何を考えてるんだろうな。

勇気もないくせに。受け止められる権利もないくせに。

月華に愛されるかも、許されるかも、分からないくせに…。

欲しい。という1人よがりな独占欲。

拒絶されることが、怖い。脆い、弱い自身。

限りなく脆弱な天秤の上で、硝子よりも脆い気持ちで左右に大きく揺れ動く。

崩れそうな理性と感情を月華の変わらぬ匂いで繋ぎ止めた。

関係を持った女の匂いが、肌を限りなくよせた女の匂いが、

温もりだけ

快樂だけを求めた俺にまわりついた。

その度に身体を病的なまでに洗い尽くした。

染み付くような行為の匂い。吐き気を催すような、動物の匂い。

それでも、快樂と享樂に狂うことに歯止めを掛けられず、後に何もかもを失うことすら本能では感じながらも、貪ることをやめられなかった。

他人の体臭、行為の匂い。酒、タバコ、血。

離れることなどない、染み付いた匂いをごまかすために、洗っても取れないものを相殺するように。

あんなに嫌いだった香水を付け始めた。

墮落仕切った生活から、足を洗った今でさえ、その匂いからは解放されていないようで。

俺は毎日香水を付け続けていた。

苦い記憶を遡り、記憶は幼児期まで辿り着く。

四聖家に、おじさんの家にお世話になっていた頃は、いつも隣に月華がいて、俺の淋しさを知ってか知らずか…ずっと一緒にいてくれた。

月華と月之丞と3人で布団を3つ敷いて寝ていても。

月華は気がつく俺の手を繋いでくれていて、いつの間にか俺の布団に入ってきていた。

繋がれた温かい手と、鼻腔をくすぐる様な気持ちいい月華の匂いは、

酒、タバコ、物が腐った匂い、母の嫌らしい香水、父ではない男の体臭、そして母の流す血液の

全ての匂いを忘れさせてくれるかの様で

どんな暑い日も拒む事はなく、

寒さに震えるしか出来なかったあの寒い冬の日々は、

確かなぬくもりの心地よい物に塗り替えられていった。

とても大切だったものを放棄した末は、また、大嫌いな匂いに取り囲まれた墮落した生活だった。

俺にはこれが似合っている。俺の名前のように、定められた宿命は簡単には変えられない。

そう決め付けて、出口のない迷路を彷徨っていた。

強く抱き締めた月華が、腕の中で少し身動き

おじさん譲りの茶色い大きな瞳を俺に向ける。

少し潤んで揺れている瞳を食い入る様に見つめていた。

俺は、ただ。

瞳に焼き付けるように。

断片的になった過去と現在を融合させるために。

…可愛い…。

愛しい、月華。

『ずっとずっと…会いたかった…』

柔らかな月華の感触を感じながら心から思った。

離したくない。

ずっと腕の中に居てほしい。

その柔らかな唇に…触れたい。

「月華」

存在を確かめる様に、もう一度、名前を声に出した。

呼びかけに反応したように、大きな瞳が瞬く。

交差する視線、優しい眼差し。

どうしようもなく愛しさが溢れだして、気が付くとおでこにキスをしていた。

キスをする時、月華が慌てたように俺から身体を離れた。

その瞬間、正気に戻る。

…やべえ！

我にかえって口元を片手で覆ってから、自分から女にキスをした事に驚いた。

今迄、行為の時も自分から望んで誰かにキスをした記憶はない。

俺が自分からキスするのは、したいと願うのは、…やっぱり月華だけみたいだ。

「うん…うん」

俺のいきなりのキスに真っ赤になっておでこを押さえている月華は、蚊の鳴くような小さな声で、

「…うん」

とだけ言った。

くそっ…、俺の馬鹿！！

何やってんだよ！

でも…こんな軽いキスでも真っ赤になる初々しい月華がたまらなく可愛い。

緩みそうになる口元を手を離さないまま、必死で力をいれてこらえた。

おじさん達に別れの挨拶をして、学校の中を歩き始める。

俺を先頭にして、よく似た双子に、この嫌味な位に広い校舎を一つ一つ案内していく。

テストが終わり、解放となったこの時間に学校内にいる生徒はほとんどいなかった。

「本当に広いだね」

月華が楽しそうな声をあげた。その顔は、何か新しい物を発見した様な驚きに満ちていて、あまりの愛らしさに俺の頬は緩みそうになる。

…もうノックアウト前。

鞆を持ちなおす仕草を目の端に捉えた。鞆を持つ小さな手に目が留まる。

触れたい。

柔らかく温かい、その手のひらに指を絡ませたい。

沸き上がる欲望を抑えながら、階下の移動教室用の科目別の教室を案内していく。

音楽室。

化学実習室。

付属の図書館。

体育館。

視聴覚室 などなど。

とりあえず2年が使用する階の物を案内する。それぞれの学年で

使う階が異なる為、各々の専門的な教科の教室は、学校全体で3つはあった。

「月華は絶対に迷子になるぞ？」

大体案内し終わった頃、月之丞はニヤニヤ笑って月華に話し掛けた。

「…そ、そこは否定できないかも」

意地の悪い兄の言葉に、自信がなさそうに月華はしょんぼりと俯く。

そんな表情すら愛らしく、頬が緩む。

「大丈夫、慣れるまで一緒にいよう」

つい 出来もしない事を口走ってしまっ。

そんな俺の言葉に月華は、微笑む。

「うん。ありがとう」

可愛い笑顔。

笑う月華に笑顔を返した。

どうせなら楽しみにしていた道也に紹介しようと思い、一番最後に教室を案内した。

「ここが教室ね」

引き扉をあけ、俺が入ると物珍しそうな顔をして2人が続く。

「「おおお」」

2人の高さの違う声が重なった。

双子の息のあつた歓声（奇声？）に弾かれた様に机に伏せていた道也が顔を上げる。

「あれ？虎狼」

立ち上がって俺たちの方を向いた。

月之丞と月華が同じ色の大きな瞳で道也を見つめている。

「道也」

こいこいと手を動かして道也に手招きをした。

「ちゃんと待っててくれたんだ？」

「まあな」

眠そうな顔を軽く叩いて目を覚ましながら、歩いてきた。横に立つ道也の方が俺より5センチは背が高い。

健康そうな道也の笑顔を双子は見上げていた。

2人をまじまじと見てから、俺に確認を取る。

「そのこが転校生？…ってうわぁ、君マジ可愛いね！」

きょとんと瞳を瞬かせている月華を見て、道也は嬉しそうな声をあげ、白い手を両手で包み込んだ。

「オレ、ハヤシミチヤ林道也。虎狼の親友なんだ。宜しくね」

道也の行動に驚きながらも、月華は挨拶をする。

「初めまして、四聖月華です」

「声まで可愛い」

道也の顔が近付くと、月華の顔が真っ赤になる。

道也！お前…近付きすぎ！！

俺が2人を離そうと動く前に

「おれは四聖月之丞。宜しくな、道也」

あまり身長が変わらない月華を背中に隠して、月之丞が2人の間に割り込んだ。

「おお、双子？似てる似てる！」

ていうか、最初に騒いでいた兄貴の方に注目してくれよ…。

ようやく揃って実物を拝むことが出来た月華と月之丞の顔を見比べて楽しそうに道也は笑う。

「そうそう」

月之丞は月華を背に隠したまま頷いた。

差し詰め姫を護るナイトといったところか。

その身長差じゃ、上から丸見えだから意味ないんだけどな。

「すげえ。ここまで似てるんだ！お前も可愛いな。宜しく、月之丞」

可愛いものが好きな道也は嬉しそうに月之丞を覗き込む。

「あ、道也はかわいいもの好きだから二人とも気を付けてね」

俺は道也に釘擬もきを差し、2人に注意を喚起する。

「おい、虎狼？何言ってるんのお前」

俺の言葉にさも心外と言った調子で道也が睨んできた。

その視線に一瞥くれてから、視線を天井に逃がした。

本当のことを言ったままでだよ。

「ええ、僕カワイイからこまっちゃう」

月之丞が月華と同じ顔で、女みたいな声をあげた。

本当に月華みたいにみえるから、やめてくれ。普通にそこらの女より可愛いなんておかしな話だよな…。

「オレ普通に可愛いもの好きだから気をつけろよ？」

開き直った道也の言葉に俺達3人が呆れてしまったのは言うまでもないだろう。

*

第3話

試験が終ってから道也とメシを食う約束になっていた。

けど。

もう少しでいいから…月華と一緒にいたい…。

そう願う俺の気持ちを汲み取ったように

「どうせなら、虎狼の家でメシ食おうぜ。学食も閉まってそうだし
さ」

こちらを一瞥してから、道也が2人を誘った。

口元がいつもの笑顔より上がっているから 確信犯だな？

ほんの数分で、俺が彼女に興味があると感じ取ったらしい。

いつか話した初恋の相手が月華だったことまではわかってないだ
ろうけど。

それにしただって…どれだけ鋭いんだよ。これだから野生動物
は侮れない。

「虎狼ちゃんのうち？」

「月華ちゃん、虎狼のこと知ってるの？」

不思議そうな顔をする月華に道也は向き直った。

転校してきたばかりの月華は俺がどこに住んでるか知らないのは当然の話で。

寮に住んでないのは、この学校では何故か有名。

俺がどこに住もうが、学校の奴らには関係ないと思うんだけど。

「うん、幼馴染みのな」

可愛く笑う月華は、大きな瞳を揺らして俺を見た。

その視線に応じて小さく頷くと、ますます嬉しそうに満面に花が咲く。

まじ…可愛い……。

とくん、と心臓が鳴った。月華にしか反応しない鼓動。温かい刺^激。

「そっか、だから虎狼って呼ぶのか」

成る程とポンと手を打ち、道也は納得した。

「え？」

「虎狼つて名前を呼んでも許されるのは、親友の証なんだぜ、なあ？ 虎狼」

「道也…」

また…訳のわかんない事を月華に吹き込みやがって…。

俺とお前が…怪しい関係みたいに聞こえるじゃないか！

月華も返答しにくそうな困惑した顔をしている。月之丞はふむ、と口元に手を置いて、何かを考えているような格好だった。

「仲良しの証、な？」

「はいはい」

月之丞はともかくとして。単純な月華が万が一…本気にしたらどううすんだよ…。

道也の妙な対抗心に、内心ため息をつく。にんまりとご機嫌そう

に笑う道也に頷いて応えてやった。

「月華も月之丞も遠慮しないで一緒においでよ。ご飯まだ食べてないんでしょ？」

俺は自分の机に掛けておいた指定の鞆を持って、月之丞と月華を誘った。

時間的に食べているわけもないが、とりあえずの判断は双子に委ねる。

あまり家に人を呼ぶのは好きではないが、この2人を厭う理由はどこにもない。

道也くらいしか、家には呼ばないんだけど。

「行く行く」

月之丞は俺の席前の机に座っていて、片手を上げて同意と共にぴよんと飛び降りた。

兄の近くに座っていた月華もそれに釣られるように立ち上がる。

「じゃあ、いきますか」

提案者の道也が一番張り切っていて、月之丞の手を引いて（実際引きずっていた）歩き出す。

月之丞は道也のお目がねに適ったらしい。

出会った頃の道也の俺に対する態度を思い出した。

今ではすっかり慣れて当たり前になってしまったが、転校当初は、随分付きまとわれてかなり迷惑だったよな。

今は、それ以上に感謝もしてるけど。慣れるまでが苦痛なんだ。

月之丞：御愁傷様……。しばらく大変だぞ、多分。

道也の子供っぽい行動にため息をついてから、苦笑いを浮かべる
月華と顔を見合わせた。

「仕方ないよな」という意味で肩を軽く竦めて見せてから、並んで先に廊下に出た2人を追い掛けた。

「で…でかつ」

「おっきい」

2人は俺の家を見上げ、啞然とした表情で各々似た様な事を呟いていた。

「言ってること一緒だ」

それを聴いた道也がけたけたと音をたてて笑い出す。

そんな道也を見て、今更ながら本当によく笑うヤツだなと思った。

月之丞と月華は、飽きることなく感慨深そうに家を眺めている。

特に月之丞の瞳がキラキラと輝いているのは気のせいだろうか。

確かに俺はここに住んではいるけど、

…俺が建てた訳じゃないからそんなにマジマジ見られてもなあ。

それでも2人の反応は、一番最初に道也を招いた時と同じものだったので、少しだけおかしかった。

じいちゃんちに比べたら、この家は遥かに小さい。月之丞がじいちゃん家を見たらどんな反応をするんだろうな。

「どつぞっ」

まだ見上げたまま動こうとしない促し2人を家に入れる。

声を掛けなければいつまでも立っっていそうな雰囲気だった。

「おじゃまします」

俺達4人を飲み込んだ重い玄関のドアは静かに閉まった。

「月華、何食べたい？」

ダイニングテーブルの前で、キョロキョロと物珍しそうに室内を見渡していた月華に声を掛ける。

部屋中を移動していた視線が、キッチンに立つ俺を発見すると、不思議そうに首を傾げた。

「何でエプロンしてるの？」

新鮮な反応と質問。

道也は俺が料理することを知ってるからもうそんな驚いてくれないし。

「いや、俺が作るから」

腰までのエプロンの紐を直しながら答えた。

月華の大きな瞳が皿のように丸くなる。そんな表情も生まれたばかりの子猫のようで愛らしい。

「…虎狼ちゃんか？」

「俺の他に誰も作ってくれる人はいないよ。1人で住んでるから。な？道也」

ソファーに座る道也に話を振ると

「そそ、虎狼のメシはうまいよ。オレみたいに安心して座ってなよ」

おいでおいでと月華をソファーへと手で誘う。しかし月華は動かず、俺をじいっと見つめていた。

「なあ、オレはゲームしててい？月之丞もするよな？」

「おー、こんなでかいテレビでゲームなんかしたことない。やるやる！」

道也は月之丞の意見を聞くと、勝手にテレビの下の台からプレス
テを取り出し、電源を入れた。既にうちの物の所在は道也は熟知し
ている。

今はそうでもないけど、一時期泊り込んでたときもあつたからだ。

そんなことを思い出しながら、冷蔵庫の野菜室の扉を開ける。

「あ、野菜がない」

ここんとこテスト週間で、道也に勉強を教えることに忙しく、マ
トモに買い物行っていなかったことを思い出した。

…しくじつたな。こんなことになるうとは予想すらしてなかった。

冷蔵庫から顔を出し、かりかりと頭を搔いていると

「あたし、買ってこようか？」

月華はオープンキッチンのカウンターから身を乗り出して可愛い
顔を覗かせた。

「ありがとう。」

…でも月華この辺分らないよね？」

「…うん。でも地図とか目印とかあれば大丈夫だよ？」

「んー…。じゃあ一緒に行こうか？実はこんなにでかい学校あるけど、あんまり治安は良くないんだよね」

俺はキツチンから出て、エプロンをはずす。

「一緒に行ってくれる？荷物持ちにさせちゃうかもしれないけど」

「行きたい！」

「いい返事。じゃあお願いしようかな」

弾む月華に笑いかけてから飲み物と食器棚にあったドーナツを道也たちの前に並べた。もともと今日来ると言っていた道也の為に用意しておいたものだ。

作ってるときでも何か出して置かないと、勝手に作ったものをつまみにくる問題児だからな。コイツは。

「俺らちょっと買出しいってくるからこれつまんでてよ」

「おー、行って来い」

勝手知ったる道也はこちらも見ずに声だけで頷く。

「どうせだから、お前等もなんかいるものあるか？」

俺が尋ねると、

「おれ、コーラが飲みたい」

月之丞が手を上げた。

コーラか。

そういえば、最近コーラなんて飲んだことないな。

夏が近付くと必ず放映される炭酸一杯のCMを思い出す。

たまには悪くないかもしれない。

「月之丞、そんなん飲むから背が伸びないんだぞ？」

道也が月之丞に兄貴気取りで忠告をする。

俺の中ではすっかり「飲むつもり」になっていたので、少しだけ道也の言葉が不快だった。

「おれは、小さくても強いからいい」

「え？強いって？」

瞬きを繰り返して、道也が首を傾けた。月之丞とは違い、道也がそれをして全ても全然可愛くなかった。

「おれ、空手の有段者だから」

にししと月之丞は肩を揺すり楽しそうに笑う。

それは知らなかった。

一緒に暮らしていた頃は、空手なんてしていなかったはずだ。

しかも、有段者って。さらりと言ったのけるその余裕さが、実力を裏付けているような気がするぞ。

双子2人の雰囲気は変わらずとも、時間は確かに経過し、俺の知らない何かを残している。

どんなに暗い過去でも、それは俺も同じか。

「マジか？すっげえ」

気が付けば。

今日が初対面だというのに、人見知りという言葉を知らないこいつらは旧知の仲でした、と言わんばかりに仲良くなっている。

この分だったら一緒にいさせても大丈夫か。

エプロンを外し椅子にかけた俺は、月華に声を掛けた。

暑いのに首が締め付けられるのが苦しいのもあって、一緒にネクタイも外す。

「月華、行こう?」

「うん、行く」

月華を促して、リビングを出て玄関へ向かった。

「暑いから気をつけてねー」

道也のノー天気な声がリビングから響いていた。

「やっぱり外はあつついね」

月華は外に出るなり、日差しを手のひらで遮りながらそう言った。

自分が意識していたのより暑かったのだろうか。

一緒にいたいけど、月華を熱中症や日射病にさせたくなかったの
で、気を使って提案してみた。

「あ、きついなら家に残る？荷物持つの嫌とかなら…道也連れてく
し」

「…ヤダ。一緒に行く」

月華の顔を覗きこむと、不満そうに口を尖らせる。

そのすぼんだ桜色の唇にキスしたい衝動をぐっと飲み込んで、思
考を元に戻す。

暴走するなよ、自分。

呪文のように繰り返す。

暑いのが嫌なわけじゃなかったのだろうか。

まあ、月華が平気って言うのならそれを信じよう。

何より、2人きりでいれることが嬉しいし。

「きつくなったら言ってね？」

そう言うとき大きく笑顔で頷く。どうやら機嫌は直ったみたいだ。

釣られて笑うと、少し顔を赤くした月華は俺から視線を逸らし、言葉少なに歩道を歩く。

閑静と呼ばれるこの住宅街はとても静かだった。

この静寂を求めて大金をはたく人もいるんだろうが、どっちかというと…喧騒まではいらぬが、人の音がした方が俺には好ましい。

月華に歩調を合わせながら、綺麗に整えられている家々の木々を眺める。

視線を感じて振り向けば。

月華が俺を窺うように覗き込んでいて、目が合えばさっきとは違い、にっこりと顔を綻ばせる。

どんな心境の変化かはわからないけど……可愛い。

瞳があって笑う。

…たったそれだけなのに。月華が隣にいる幸せに包まれている。

「ねえ、虎狼ちゃん？」

「月華、虎狼でいいよ。ちゃん付けられるの恥ずかしいし」

流石に17にもなつてその尊称？はいただけない。

照れくさそうに、それでも1回頼んだだけで、月華は俺を呼び捨てで呼んだ。

「うん、…虎狼？」

語尾があがる。疑問系がまた可愛い。

どうして…月華はこう、全てが可愛いんだろうか。

重症だな。…俺。

「何？」

呼んだだけ、と分かっているけど、応じてみた。

すると、月華の左手がそっと差し出される。

「手、繋いでもいい？」

差し出された小さな手。

その手を下から辿ると、月華の照れたような、それでも少し不安そうな顔に行き着いた。

俺が再び手に視線を落とすと、しゅんとしたようすで下を向く。

…分かりやすい。

額面通りに受け取っても構わないんだよね？

月華の反応に思わず笑みが零れた。

漏れた声に彼女は少し動揺を見せる。

「え？」

「月華の顔、おかしい」

本当は、可愛くて仕方ないけど。

未だに不安を隠さない瞳を見つめながら

「いいよ」

小さな勇気を出して、ずっと触れたかった手を握る。

あの頃握っていた、月華の左手は、変わらず温かい。

随分小さくなった。

あの頃は、同じくらいの大ささだったはずの手のひら。大人に近付いた今では、呆気ないほどすっぽりと俺の中に納まった。

…懐かしい温度。

手のひらが触れるだけで込み上げる喜び。照れ隠しで呟いた。

「月華は甘えん坊だな」

そう、そんなところも。

「全然、変わってない」

1つ1つが、綺麗なままの思い出の月華と重なりすぎていて。そのままできてくれたことが何よりも嬉しい。

「虎狼ちゃん…じゃない…：虎狼が変わりすぎなんだよ」

頬を膨らませ、口を尖らせた彼女がそっぽを向いた。

変わりすぎ？

歪む口元、刹那に浮かんだ自嘲の笑み。今、月華がこっちを向いていなくて本当に良かった。

確かに。

沢山…いろいろと汚れてしまったけど。

月華を好きだったことだけは、あの頃から変わってはないよ？

まだ俺から顔を逸らしたまま、月華はぶつぶつと不満を漏らし口を窄^{すぼ}めている。

「どうせあたしはお子様ですよ」

「まあ、それは否定しないけど」

子供の頃そのままの仕草、口調。

「虎狼もいう様になったね…」

あっさりと肯定してみれば、視線だけでじとーっと睨みつけられる。

全然怖くないし。

斜めになった機嫌を直して貰おうと、

「嘘嘘、変わった変わった」

自然と溢れだす笑みを堪えながら、月華の左手を自分に寄せ引っ張る。

「きゃ」

近くなった耳元へそつと吐息混じりに囁いた。

「可愛くなった」

あの頃も可愛かったけど、ずっと今の方が可愛い。これは本心。

「な、何いってんのよ」

耳を右手で隠しながら、顔を真っ赤にして月華は叫んだ。

「…褒めたんだけど」

まっすぐに直そうと思った機嫌は、ますます傾いたらしい。

さつきは30度なら、今度は45度と言ったところか。

失敗したか？

…それでも、心なしか口元が嬉しそうに上がってるのは気のせいじゃないはず。

本当に何から何まで可愛いんだから…。

月華の手を引き、歩きだすと周りの景色も変化し始める。いつも見慣れた風景さえ、今日は特別に映る。

隣を見れば、月華がいる。

それが一番の望んだ風景。 夢にまでみた景色。

俺たちの真っ白だった10年という時間のキャンパスに鮮やかな色彩が加えられていく気がした。

「もうちょっと歩くけどいい？」

地元で一番大きなスーパーを横目で見ながら、隣を歩く月華に確認した。

もう歩くのが嫌だというのなら、ここで手を打たなければいけないし。

この店に入ると思っていたらしい彼女は、案の定酷く驚いた顔をしている。

んー、ここでもいいんだけどさ、涼しいし。でも、ここまで来たらあっちに行きたいんだよな。

…単車で来るべきだったか？

残念そうにスーパーを見ている月華に、帰りは寄る旨を伝えると（コーラのために）、月華は笑顔でうんと頷いた。

「おじさん、今日のオススメは何？」

馴染みの市場、常連の八百屋に顔を出す。

活気があるこの辺りの商店街は、この付近で一番俺が好きな場所だった。

月華は珍しいのか、おのぼりさんみたいにキョロキョロと周りを見渡している。

月華のおばさんはどなたとどこに買い物に行ってたのだろうか、と、主婦みたいなことが気になった。

…仕方ないよな、俺主夫みたいなもんだもん。…道也の。

「こんにちは！虎狼君。いらっしやい」

おじさんの明るい声に笑顔で挨拶をする。

「今日は何を作るんだい？」

俺が料理を知っているのを、何を作るかを毎回聞いてくれる。

まだ料理を一人で作り始めた頃から通っているので、癖になっているのだろう。今なら食材だけで何を作るうかと考えられるのだけれど、当時は無理だったから。

いろいろと助言を貰って助かったもんだ。

「うーん、今日は夜ロールキャベツにしようと思ってるんだよね。だからキャベツは今日新鮮なのはある？あと、サラダ用にトマトと」

並んだ色艶のよい野菜を、指差す通りに袋に詰めていっけてくれる。

夏ほどの野菜も生き生きして見えて、いい季節だと思った。

…完璧主夫だわ、俺。

俺の隣に不思議そうな顔で立つ月華をおじさんは物珍しそうな顔で眺めている。

その視線に気がついて、野菜からおじさんと月華に目を遣った。

月華もおじさんが見ていることが分かったらしい。じつと俺を見上げていたが、今はおじさんの方を向いていた。

「虎狼君が誰かと一緒に買い物なんて珍しいねえ。その可愛い子は彼女かい？」

…彼女かあ。

月華が彼女だったら…いいよなあ、マジで。

一瞬、いらぬ空想が脳内を巡った。

おっと、危ない人みたいになってるじゃんか、俺。

「あ…あの…」

月華は顔を真っ赤にしたまま俯いて口籠もる。

ちらりと俺に視線だけ寄越して、またすぐに下を向いて顔を隠した。

本当は。

「彼女です」って言いたい。

でも普通に考えて…彼氏なんて勝手に名乗ったら迷惑だよな。

「違いますよ、幼馴染みです」

変な雰囲気にならないように、笑顔を作った。

期待したところで、月華を彼女になんか出来る訳ないのに…。

期待して、期待されて、幻滅されるのが、月華に嫌われるのが何より怖い。

大体、月華自体がそれを望んでいるかも分からないのに。

幼馴染みとしての、俺との再会を喜んでくれていてるだけで、まだあの時みたいに『好き』でいてくれるかなんて。

女々しい俺でもあるまいし。

あるわけないのに、馬鹿な幻想を抱いてしまう。

月華の手のひらが、俺の手からするりと抜け出た。

つなぐときもあっさりだったけど、離れるのはもっと早く…残酷だった。

思わず彼女を凝視してしまう。

その大きな瞳は不安というか、苛立ちに溢れ。

離れたことへの、後悔みたいなものが見て取れた。

…ねえ、月華。

月華も俺と同じ気持ちだったって思っていていい？

まだ、俺を好きでいてくれるって…今だけでいいから勘違いしてもいいの？

勘違いでも…いいか。

もう一度、その手をつなぎたいよ。

月華の手をそっと握る。今度は、指と指を絡ませて、より密着するように。

…簡単に離れないように、離さないように。

「これから彼女になってくれる様に頑張ります」

痛くない程度に力を加減して、そっと握り締めた。

俺の願いを聞いたおじさんは嬉しそうに目を細めた。

多分、初めてここに一緒にきた女の子に『俺の特別』を感じただと思う。

「若いつてのはいいねえ」

きっと心ではそんなことは思っていないはずだけど。おじさん、毎日が奥さんと一緒に過ごせて幸せだって言ってたじゃないか。

俺には積み重ねたその幸せの歴史が羨ましく感じますよ。

あと30若ければ…みたいなことを口にしたけど、俺は軽く流した。

他にも友達が家に居るってことを伝えると、いつもよりオマケしてくれた。

お礼を言って、支払いを済ませ、また手をつないだままそこを後にした。

市場から商店街に入る。

少し古臭いイメージはあるものの、親しみやすいこの空気がなんともいえずに好きなのだ。

そして、アーケード街になっているため、日差しも雨も遮られて、多分、さっきよりも月華には負担は少ないはずだ。

顔見知りの店の人に会釈をしながら、目的地に足を伸ばす途中に。

「後は、どこ行くの？」

にこにここと機嫌良さそうに笑っている月華が訊いてきた。

ちらちらとつないだ手を見ながら微笑むから、手をつないでるところが嬉しいんじゃないか、って淡い期待が出てきてしまう。

買った大量の野菜の重さも気にならないほど、小さなことが俺の身体を軽く感じさせる。

月華効果は偉大だ。

隣で微笑む彼女を見ながら、自分の現金さに呆れる。

…昔から笑顔が地顔みたいなもの。俺も月華に関しては随分単純だな。

「うん、ケーキ屋に行こうと思って」

俺の顔を覗いてくる月華に次なる行き先を告げる。

「ケーキ屋さん？」

意外そうな顔をする。

俺にはその顔の方が予想外だったけれど。

「今日7月1日は何の日だったけ？」

そう、今日は。

これから変わるだろう、彼女の表情を想像すると、とてもくすぐったい気持ちになった。

月華の喜んだ顔は、凄く可愛い。

しかし。

本当に分からないらしく、うーんと俯き加減に考えている。

余程真剣に悩んでいるのか、歩く速度が遅くなった。

それに合わせて少しだけ、歩幅を縮める。

しばらく唸りながら思案していたが、思いついたあとも自信がないのか不安を滲ませて呟いた。

「…あたしとお兄ちゃんの誕生日」

何だ、わかってるんじゃない。

それが正解だと答えると

「憶えててくれたの？」

一気に不安顔が花開く。それは、桜の開花を思わせるような、鮮やかな笑顔。

俺にとっては極上の微笑み。

「忘れないよ」

ずっと一緒に祝いたかったから。毎年、あの喜んだ顔が見たかったんだ。

「嬉しい…」

「ケーキが一番大きいの買っていこう。あの二人は…食べるだろうから」

月華の顔を正視するのが照れくさくて、俺は少しだけ彼女から目を逸らした。

とても隠し切れない嬉しさをかみ締めながら。

「結構買ったね」

沢山の買い物袋を2人で抱えて、家路を急ぐ。

「月華、大丈夫？重くない？」

両手に荷物を持つ月華を心配して声を掛ければ

「虎狼の方が、重いの一杯持つてるじゃない」

少し頬を膨らませて、彼女は答える。

「でもね…」

つついっつい買い過ぎてしまったけど、本当はこんなに持たせるつもりは無かったのに。

「大丈夫！」

コーラの入った袋とケーキの箱を少し持ち上げながら、にっこりと笑う。

その優しさに感謝しながら、早く帰ろうと、帰りたいたいののは帰りたくないのか、微妙な気分になりながらも、早足で歩いていった。

家に帰ると、道也と月之丞は大きな声で罵りあいながら、ゲームに夢中になっていた。

…小学生か。

それでも盛り上がる気持ちが分かるんだよな。…確かにマリカは燃えるから。

自分の幼さに苦笑いしながら、俺は食材片手にキッチンに入る。

「うわっ、道也それずるくね？」

「勝負の世界に待ったはないんだ」

月華も叫ぶ兄を眺めて、呆れたように息を吐いていた。女の子にはイマイチ分からない感情らしい。

「月華、手伝って？」

テーブルにケーキとコーラを置いて立っている彼女を呼ぶ。

元気に返事をして、慣れないキッチンに手惑いながら手伝ってくれた。

ふと、まな板から目を上げると道也が心配そうに俺たちを見ている。

そんな親友に笑顔を向けると、小さく頷いてからまたゲームに熱中し始めた。

…よく喰うな。

大皿に持った料理たちが、本当にあつという間に道也と月之丞の胃の中に消えていく。

道也の食欲は承知していたが、月之丞の小柄な身体に似合わない食欲に圧倒された。

…もう少し量を作れば良かったか？

懸念しながらも、とりあえずは満足したようで小さく息をつく

「人間、腹八分目が身体にいいからな」

と、空っぽの皿を見ながら呟いていた。

…あんだけ喰ってまだ入るのかよ。

俺の心配は杞憂では無かったらしい。

まあ、道也も月之丞も満足したみたいだからいいか。

「ご馳走さまでした」

月華が行儀よく手を合わせて挨拶をした。

「お粗末さまでした」

そういえば、2人の食欲に呆気に取られてあまり月華は食べていなかった気がする。

一般の女の子の食事の量はよく分からないけど、果たして満足した量を食べたのだろうか。

何でこんなに美味しいんだろ？と、お世辞でも嬉しいことを言うてくれたが。

思い出に残るおばさんの料理の方が、俺にはずっと美味しかった。
でも。俺が月華のおばさんから幼心に学んだことと言えば、

「料理は愛情」

ということ。毎日楽しそうに台所に立つおばさんの後姿がとても
印象に残っている。

正直味よりも、その姿が何よりも嬉しかった。

「いやいや。愛情だけでこんなに美味しいなら、うちのお母さんは
天才だったはずよ?」

「おばさんのご飯も美味しかったよ」

温かくて、優しいあの味に俺は一生勝てない気がする。

勝たなくたって構わない。

もう一度食べたいって思うけど。

ケーキを切り分け、全員に配る。月之丞が恥ずかしがったので蠟

燭に火は点さなかったが、切った一番大きなケーキを選んでいたら、奴もきつと内心喜んではいただろう。

転校が急だったからという理由で誕生日は記憶の隅に追いやられていたと月之丞は笑っていた。

月華が好きだったことを思い出して、ケーキに乗っていたいちごを何となくあげると、驚いた顔しながらも、嬉しそうに食べていた。

簡単に洗い物を済ますと、道也コンビはまたゲームを再開させる。

…本当に好きだなあ、おい。

そんな様子をテーブルに着きながら月華と2人眺めていた。

「ねえ、月華」

大袈裟かもしれないけれど、意を決して、俺は隣で紅茶を飲む月華に話しかけた。

「ん？なあに？」

緊張しながら、言葉が続ける。

「明日、学校休みなんだけどさ」

「うん」

聖徳では、テストの翌日は休みになる。半端ない試験範囲のせいで徹夜をする生徒が大多数に上るためだ。

道也に教えるために復習をするくらいの俺には、あまり関係の無い休みだった。

体力の化け物の道也は寝なくても大丈夫なことが多いため、普段ならば奴と遊びに行ったりしていたのだが。

折角の休み、月華と一緒に居たいと思うのはわがままだろうか。

「明日デートしない？」

「するっ!!」

俺の誘いに月華はテーブルに身を乗り出した。

そこまでの反応は期待していなかったので、ちょっと吃驚した。

あまりの反応の良さに、一瞬戸惑ってしまったが、すぐに嬉しさがこみ上げてくる。

「どこ行きたい？」

「えっとね……」

言い難そうに口籠もる。

「あたしこの街よくわかんないから……」

「そっか、そっだなあ」

言われて見れば。すっかりずっと月華が傍にいた気分になっていた。

たった数時間で、勝手に全てが埋まったような感覚になっていたが、昨日今日ここに来た彼女に街に何があるかなんて分かるわけがない。

「あ……。水族館とかがあればそこいきたい」

水族館か。

ちょっとここからじゃ便が悪いけど……単車で行けばいいかな。

「わかった。じゃあ、水族館に行こう！12時に俺んち来れる？」

首肯した月華の手が俺の前に差し出される。

立っていた小指にそつと指を絡めた。

「やくそくだよ」

「わかった」

そんな幼い儀式がたまらなく嬉しかった。

先に帰る2人を玄関で道也と見送って、リビングに戻るうとする
と、道也が俺の肩に大きな手を置いた。その感覚に後ろに立つ親友
を振り向く。

運動をしているせいで、基礎代謝が高いためか道也の手はとても
温かい。

よく手の熱い奴は心が冷たいと言われるが、それは嘘だと思つ。

現に目の前にいる道也は優しい男だと知っている。

男らしい意思の強そうな瞳を少し細めて、

「月華ちゃん、めちゃくちゃ可愛いじゃん？」

がしつと肩を抱いて、顔を寄せてきた。

…熱い。

「あんだけ可愛ければ、虎狼が忘れられなくても仕方ないよな」

「……」

「まだ、好き、なんだろ？」

言葉を切りながら、真摯な眼差しで俺を見据える。

この瞳に嘘をつける勇気を持ち合わせてはいない。

しかし、その気持ちを言葉に出すことが出来ず、返事を返せない。

「素直になれよ。お前が女の子を誘ってるのも、あんなに嬉しそうに笑ってるのも…初めて見たぞ？」

どんな顔してるか分かってないのか？と頬をつねる。

分かってない？

そんなことあるわけないだろ。

自分でも嫌になるくらい分かっている。

月華といると、安心する。

それと同じくらい、緊張もする。

嬉しいし、楽しい。

何よりも、

『好き』

だって、思う。

そして、それ以上に

『怖い』

視線を足元に落とし、俯く俺の髪をぐしゃぐしゃと道也は乱した。

「そんな顔すんなよ。オレの惚れた綺麗な顔が台無しだろー？」

…もう少しましな慰め方ないのだろうか。

「お前に惚れられても迷惑なだけなんだけど…」

俺の言葉を見殺して、道也は続ける。

「なあ、月華ちゃん。お前のこと好きだったさ」

……。

「虎狼だって苦しんだんだから、そろそろ自分を許してやれば？」

首を振る。

否定をこめて、左右に。

何度も、何度も。

「お前ね、我慢するのはいいけどさ。…あんなだけ可愛ければすべて
つかの誰かに攫われるよ？」

それでもいいの？と付け足された科白にも。

首を左右に動かすことしか出来ない。

「ちよつとくらい、月華ちゃんを信じてみるよ。」

そりゃあ、月華ちゃんはめちゃくちゃ可愛いけどさ。今までの彼女とかセフレの中にもあれくらい可愛い子は何人かいたじゃん？
だけどさ。

お前は別に…顔だけで彼女を好きな訳じゃないだろ？」

とん、と拳を俺の胸元にぶつけた。

口元を歪めて、小さく笑ってから肩に道也の頭が乗る。

染められ、固められた茶色の髪が、俺の頬に刺さる。

その刺激より、何より当てられた拳の奥が痛い。

「付き合つのも、誰かに取られるのも嫌だなんて、なんつーわがままだよ。」

…オレじゃないんだからさ。可能性を捨てんじゃねーよ」

苦しさを含んだ悲痛なまでの道也の声に、拳の奥、心臓が驚つかみされたように苦しく熱を持つ。

「頼むから…もう幸せになつてくれ。」

大丈夫だから、な？」

俺を強く抱き締めながら、搾り出される声音に、道也の訴えに、
無言で頷くしか出来なかった。

*

第4話

天気は快晴だった。

雲ひとつない真夏の空は、酷く澄み渡り、それは俺の心とは真逆で。

リビングのガラス戸のカーテンを開け、朝の光を浴びながら昨日の道也の顔を思い出していた。

俺とは違い、破局というマイナスの未来が約束された道也。

それでも一緒にいる2人を凄いと思う。

どれだけそれが辛酸を舐めるように辛いことなのか…。

今の俺には漸くその痛みが分かる気がした。

「何を食おうかな…」

ポツリ呟いて、キッチンに入った。

いつも通り和食のメニューにしようとして冷蔵庫を開け、簡単な朝食を作る。

1人分の味噌汁を煮ながら、昼は何を作ろうか考えていた。

道也以外の人を呼ばなくせに、来訪者を持って成す癖がついて
る自分に苦笑する。

1人での味気ない食卓に座り、こちらに傾けたテレビからの音だ
けを拾う。

天気予報は今日も無遠慮なまで暑くなる気温を伝え、おざなりな
「熱中症に気を付けて！今日も元気に行つてらっしゃい」という挨拶
で締めくくられた。

…暑く…なるのか。

何を着ようか。

今日着ていく服に意識を巡らす。頭でいくつかのコーディネート
を作り上げた。

それから暫くただ頭に入らないニュースにぼーっと聞き入る。

…もう雑音はいらないな。

手元に置いたりモコンでテレビを消し、味噌汁に手を伸ばすと。

出ていたはずの湯気はすっかりと消え去り、口に含むと生ぬるか
った。

それが何故か自分と重なり、朝から鬱々たる気分は更に墜ちてい
く 気がした。

部屋に戻るとクローゼットを開ける。

黒を基調とした服が多い中、なるべく爽やかな色を…と意識して

堅苦しくなりそうな自分に苦笑いしながら、形が気に入って買った白いシャツとデニムで無難に纏めることにした。

水族館寒い…かな。

単車にも乗るし、と思い至り初夏になる前に奥にしまい込んだ薄手のライダーズへと手を伸ばす。

鏡に姿を映して、あまりに嬉しそうな自分の顔に苦笑した。

何が鬱々なんだよ。

意識とは裏腹に、こんなに笑ってるじゃねえか。

コツンと姿見に頭をつけ、くくつと笑う。

まったく。単純で愚かで…どうしようもないくせに。こんなにも可愛い奴だったか？俺は。

答えのない自問自答。

女と出掛けるのに、こんなに嬉しそうな顔をしてる俺は見たことがない。

傍にいらなくても、あの笑顔を思い出すだけでこんなになるとは。

月華の影響力には恐れ入る。

ふとした手違いで、蛇口をおもいつきり上げてしまい、鍋の蓋を洗っていた俺のシャツはびしょ濡れになった。

「不吉な」

何が不吉かも分からないけれど、さい先は気分的に宜しくない。

…昼飯作ってから着替えれば良かったのか？

悔やみつつも時計に目をやれば、11時半を過ぎている。

もう直ぐ月華が来る。

今から服を選び直すのも面倒だけど、濡れた服でデートには行けない。

そして数分で乾きそうにない。

鍋に水をはり火をかけると、脱衣場に濡れたシャツを投げ入れた。急いで部屋に戻り黒いシャツに着替える。

シャツを羽織り、ボタンを留めながら階段を降りた。夏っぱさの欠片もない色。まあ、これがいつもの俺か。

自業自得と1人ごちて、キッチンに戻り、簡単なサラダを作る。

沸騰を始めたお湯に、塩を入れ細いパスタを茹でながら、スライ
スした玉ねぎとベーコンを炒める。

茹であがったパスタを生クリームと牛乳、卵黄を混ぜたソースを
炒めたものと混ぜ合わせ、プロセスチーズを少し多めに投入。

調味料で味を整え、黒胡椒を振り掛ければ。

カルボナーラの完成。

皿に盛り付け終わった直後にタイミング良く携帯が鳴った。

携帯を取出し、着信を確認める。…勿論そこには愛しい名前。

「もしもし?」

耳に携帯を当てると、可愛い声が零れた。

『あたし。ついたよ』

「今出るよ」

料理を並べてから、ドアを開けに玄関に出た。

ドアを開けると、そこにはノースリーブの真っ白いワンピースを着た月華がいる。

女の子らしいワンピースもよく似合っているが、薄くピンクを基調としたメイクが施されていた。

かなり可愛い。

ほんの一瞬、2人の動きが止まった気がした。

自分の思っていることを伝えることが出来ないへたれな俺は、とりあえず

「月華、いらっしやい」

何とも当たり障りのない挨拶を口に出していた。

「お邪魔します」

機会を作って、絶対可愛い、似合つと思っっていることを言う。

小さな決意と共に月華を招き入れ、リビングへと通す。

「わあ、いいにおい！美味しそう…」

ダイニングテーブルにはパスタとサラダ。それを見た月華は嬉しそうに胸元で手を合わせた。

「座って？冷める前に召し上がれ」

席に着くことを促す。

月華が座るのを横目で確認しながら、冷蔵庫からお茶を出した。

「簡単なものしか作れなかったけど」

折角2人だけで食事だったのに。もう少し手の込んだ物を作れば良かった。

そんなことに今更気が付いた。小さな後悔を抱きながら月華を見るとブンブンと首を振る。

「頂きます」

行儀よく手を合わせてパスタを口に運ぶ。食べた瞬間にニコッと満面に笑みを浮かべた。

どうやらお気に召したらしい。

月華の笑顔に安心した俺はシルバーを手に取り、彼女に倣って食事 시작했다。

「月華は本当に美味しそうに食べるね」

いつもの味気ない食卓に花が咲いたような彩りが加わる。

他愛ない会話すら、1つ1つが楽しい。

「だって、本当に美味しいもん」

作り手にとって、最高に嬉しいことを言ってくれる。

俺はどんな顔をしていたのだろうか。

月華は顔をピンクに染めて、俯いた。

そして、無音のリビングに微かな声が響く。

それは　　こうして音がないリビングだから聞こえてきた声だった。

「好き」

今、何て言った？

続く言葉を待っても、それは無かった。

「え？」

言葉を待っていたはずなのに、気が付けば聞き返す言葉が出ていた。

好きって 何が？

訊ねたい俺にも続く言葉が紡げない。

え 淡い期待を拒絶されるのが、怖かった。そんな小さなことさえ 聞きたく無かった。

俺が呆然と彼女を見つめると、月華本人も目を見開いて、さも驚いた顔をしている。

もしかして 今自分が何を言ったか分かってないのか？

無意識の考えなしの言葉？

だとすれば聞きなおしたことは間違いだったのだろうか。

それとも、ただパスタが好きただけなのか？

後者の可能性も月華なら有り得そうだ。

しばらく、沈黙がその場を支配した。

それが数分なのか、数分も無かったのか。はたまた数秒の間のことだったのか。

その時の俺には判断が出来なかった。

永遠にも思えるような、時間の後。

じつと俺を見据えた月華の口から、確かな言葉が漏れた。

「好き」

それは、まるで甘露のような、甘い響きだった。

脳髓を通過せずに、素直な気持ちが音になって出る。

「うん、俺も月華の事が好きだよ」

まるで条件反射のような素早さで、俺は月華に応えていた。

人に面と向かって好意を伝えたのはどれくらい振りだろうか。

多分、肉親以外の女には月華以来こんな言葉は言ったことがない。

好意を具体的な言葉にされて、こんなに嬉しかったこともない。

俺の口元は、本当に自然に弧を作り気持ちを全面に現していた。

キョトンといった、イマイチ要領を掴めないといった顔で、月華は瞬きを繰り返す。

これで気持ちを通じた、と勝手な解釈をした俺は何も無かったかのように食事を再開させる。

この時、きちんと話をしておけば月華が悩むことは無かったのかもしれないが、浮かれた自分を隠すのに精一杯でそれ以上の追求はしなかった。

*

第5話

初めてだからか、バイクの後ろに乗ることを月華は少し躊躇した。

確かに単車で行くのが一番早い方法だったが、電車という選択肢がないわけではない。

後々になってよく考えてみれば、スカートの月華がバイクに乗るのを躊躇うことは当たり前の話なのだが、この時の俺には気付かなかった。

渋る彼女を乗せ、バイクは道路を走る。

平日の昼間のせいか、道は混雑という混雑はしておらず、予想していた時間内で水族館まで到達することが出来た。

水族館の駐輪場にバイクを停車させる。

メットを取って、押しつぶされた形になった髪を無造作に掻き上げた。密封されて蒸されたような状態になっていたので、顔を掠める風は生暖かくとも気持ちいい。

月華が被っていた大き目のメットを取ると

「あつーい」

満面の笑顔が現れる。その顔を見れば、ツーリングはお気に召したらしいと分かった。

彼女からメットを受け取り、椅子の下とハンドルに掛ける。

物珍しそうにバイクを観察している月華に声を掛けた。

「後ろ怖くなかった？」

「全然！気持ち良かった」

明るく輝く瞳。

俺自身がバイクが好きなので、これからもコイツと一緒に出掛けられると思うと嬉しくなった。

ヘルメットをしていたことで、少し乱れた彼女の髪を撫でて直す。

直してから、気が付いた。身体を屈めて、彼女を覗き込む。

「あ、月華化粧してたのにフルフェイスのメットなんか被らせてごめんね」

家に来た時から気が付いていたはずなのに、すっかり頭から抜けていた。

「…崩れるほど塗ってないよ？」

俯きながら月華は蚊の鳴くような声で呟いた。

厚化粧してないって言いたいのか？

誰もそんなこと言っていない。

俺が言いたかったことは、これだけ。

「可愛い」

いつもより、ずっと。

俺だけのために、してくれたことがとても嬉しかった。

カラーリングもされてない健康な髪を指を通して梳いた。絡まりを知らないその絹のような滑らかな髪のさわり心地は極上で。

そんなことにも笑みが込み上げる。

「あ、ありがとう」

「そのワンピースも月華によく似合ってるよ」

視線を下ろしたままの月華の顔が、真紅に染まる。

なのに、手はしっかり俺のシャツを握っていた。

「そんなに照れられるとこっちにも伝染しちゃうから」

こっちまで照れるような初々しい反応に苦笑した。

本当に可愛すぎる。

プレパラートのように脆い俺の理性は、このままこんなところに2人で居たら、抱き締めてキスでもしそうだった。

「伝染？」

そこを突っ込まないでくれ。

まだ桜色のままの紅潮させた頬の月華の手をつないで、俺は歩き始めた。

「大人2名様で4200円になります」

受付嬢にそう告げられ、切符売り場の窓口で財布を出して俺は、

ぎよつとした。

おい、月華。何お金を出そうとしてるんだよ。

「月華、ここは俺が出すからいいよ」

「え？どうして？だってここに来るときだって、虎狼が連れてきてくれたんだよ」

デートに慣れていないのはよく分かった。

しかし、こんなことをさせてしまう自分が格好悪い。

しばらく押し問答を続けた結果、

「今日は、月華の一日遅れの誕生日なんだから。俺に出させてよ」

「え、でも……」

変に粘る月華は、この一言で漸く財布を鞆に仕舞い込んだ。

「俺が誘ったのに、これで月華に出させたらマジカツ」悪いよ」

必死に訴えるとやっと頷いて財布を鞆に戻した。

お金を払っていると、受付嬢と目があつた。顔が赤いところを見ると、俺たちのやり取りが可笑しかったらしい。

「虎狼っ…行こう」

「え、あ。うん」

そんなに水族館に行きたいのか。

珍しく行動的な彼女に手を引かれ、建物の中に入った。

着ていた上着は入り口前で脱いだ。

水族館の中は、本当に水の中のようにキンキンと冷えている。

薄着の月華は、寒そうに肩を抱いていた。

上着持ってきて正解だったな。

持っていたジャケットは彼女にかける。

俺のジャケットは大きすぎて、ちよつと不恰好だけど、寒いよりはいいはず。

割とタイトめなデザインのはずなのに、月華にはぶかぶかだった。

「邪魔になったら返してくれればいいよ」

「…ありがとう」

月華の笑顔が俺に向いた。上着を着せるのに離れた手を取り、指を絡ませて、痛くない程度に強く握った。

「イルカショーは14時からだって。月華、観たい？」

「うん！観たい」

カラー刷りのパンフレットを見ながら、場所を確認する俺に月華は微笑んでいた。

夏期ということもあり、今日はイルカショーは15時から、とアナウンスが流れた。

腕時計で時間を確認すると、まだ14時にもならない。

「まだ時間があるな。」

「その間に俺はペンギンが見たい」

ペンギンコーナーは、と呟きながらパンフレットの案内と、頭上に矢印付きで示された案内板を見比べる。

今が遊泳魚のコーナーだから、ペンギンはこの道を出た先だな。

「ペンギンってなんか虎狼のイメージじゃないよ？」

ペンギンがイメージって言われたら、男はあんまりいい気はしないと思うけど。

月華にとっての俺のイメージはどんななのだろう。

勿論、彼女のイメージは、

「うん、ペンギンって月華ってイメージだよな」

「何それ」

月華は頬に思いっきり空気をためた。

可愛いっていう意味で言ったのに、その答えがお気に召さなかったらしい。

女の子にとってペンギンって褒め言葉じゃないのか？

どこまでも庇護欲をそそるといふか、少なくとも悪い印象はない

と思うのだが。

不服そうに膨らみ続ける月華の頬を見て、海に住む生き物を連想した。

そう、まるで。

「ふぐみたい」

眉根がぎゅっと寄って、不機嫌顔に磨きが掛かった。

「ひつどーい」

「ほら、そっくりじゃん」

ふーんだ、と月華は俺から顔を逸らす。

「ほら、いくよ」

思い切り斜めになった機嫌も、ペンギンの力を借りて直すとしてよ。
う。

俺は未だに風船顔のままの彼女を半ば引き摺るようにして、ペンギンたちの前に連れて行く。

「わあ！可愛い！ねえ、あの奥にいるこの動き見た？」

出てきたはいいが、日光が暑い。

外に設置されたペンギンの広場は、炎天下の中にあつた。

月華の歓声を隣に感じながら、南極に住んでるこの鳥を眺め、激しく同情をした。

命の危険は殆どないとはいえ、こんな暑いところで暮らさないといけないなんて大変だな。

見せ物か。

今の自分と水中を舞うように泳ぎ回る彼らとを比べてしまう。

今くらいはネガティブをやめよう。

強く瞳を閉じて思考を切り替えた。

嬉しそうにペンギンを指差す子供のような月華を見ながら、俺は
呟いた。

「機嫌直るの早いなあ」

「ペンギンに罪はないもん」

そう言っ てまた頬を軽く膨らます。

「はいはい」

それから、楽しそうにペンギンを眺める月華の可愛らしい笑顔を堪能した後、

「次は月華に似たふぐをみよう」

暑い外気に触れるのが苦痛になった俺は、えー、と顔をしかめる月華の手を再び引き、エアコンの冷気の元に戻ることにした。

様々な河豚が水槽を気持ちよさそうに泳ぐ。

地球の7割を支配する水の中に生きることと、僅か3割しかない地上で生きること。

どちらが幸せなのだろうか。

様々な汚染が懸念される昨今、どっちにもそんなに差異はないのかもしれない。

少なくとも捕食者のいない人間に生まれたことに感謝をすべきか。果たして 　　どうなのだろう。彼らには人間のような悩みは存在しないのだ。ただ1日1日を必死で文字どおり命懸けで生き抜く。

また変なことを考えてたな。

優雅とはいえない泳ぎですいすいを狭い水槽を泳ぐ河豚を横目に、水槽に映る彼女の笑顔を見ると、自然と頬が緩んだ。

水の中を模した館内であっても、地上を意識させる館外であっても月華が傍にいることは変わらない。

そつだ。どこでも一緒だ。

今、俺の隣に月華がいてくれる 　　夢のような一時ということは紛れもない事実なのだ。

室内は展示している水槽が映えるように暗く設定されている。

そんな中、うつすらと水槽に映った見覚えのある姿に眉根を潜めた。

何でこんなところにいんだよ。こっち来るなよ？

半ば祈るようにしてガラスに写った人物を睨み付ける。

舌打ちをしたい衝動に駆られたが、月華の耳に入れたくないので空気を飲む動作で堪えた。

しかし、俺の杞憂は虚しくならなかったようだ。

「」...

振り返り水槽と俺の間に挟んだ月華の呟きを背中で聞いた。

月華をこいつらなんか鉢合わせたく無かったな。

「宿世君」

「ああ、本当だ」

「こんなところで会えるなんて」

月華の甘えた声とは違う嫌らしいまでの鼻に掛かった声。

目は女豹のように絡みついて離れない。

面倒なことになったな。

身から出た錆とは言え、気に入らないことに代わりはない俺は小さく舌打ちをした。

月華の俺の手を握る力がほんの少し強くなった。

その僅かな力は大きな不安を隠しているかのようだった。

昔から基本的に争いごとを好まない月華が、怯えた瞳で俺を見て
いるだろうことは突き刺さるような視線でわかつてはいたが、それ
に振り向いて安心させてやる事が出来ない。

感情を凍らせた声音で口元に笑みを浮かべる。

強い多種の香水の匂いも顔をしかめたくなくなる程に強かったので、
引きつる顔を隠すにも効果的だった。

「先輩方、今日はお揃いで遊びにいらしたんですか？」

問いかけにええ、と彼女は頷く。

「奇遇ね！こんな場所で会うなんて」

そんな奇遇ならこちらから蹴飛ばしてしまいたい。

本来なら敬語なんて使わないし、使いたくもないのでぞんざいな
対応しかしていなかったが、今日は月華の手前もあり、慇懃な態度
を取る。

ひとりならどんな対応をして怒りを買っても構わないが、下手に
機嫌を損ねて彼女に当たられたら堪らない。

そう考えて、全ての思考が月華中心であることに、頭の片隅で苦

笑した。

「いえ、1人ではないですけど」

「そうよねえ、宿世君ほどの人が休日こんなところに一人だなんて、ありえないわよね」

例え俺で無かったとしても1人は少ないと思うのだが。

ん、そんなこと言ったら癒しを求めて水族館を訪れる人に失礼か。

発言の主、楓が整ったと言えるだろう瞳を半分以下に細め俺の背中に隠している月華を睨む。

「そのこ、うちの学園の子？」

「ええ、まあ」

隠してもいざればバレることなのだが、あまり言いたくは無かった。

それ以上の追求を覚悟しながら目の前に立ちふさがる楓を表情を変えずに眺める。

何を言われてもこれ以上の情報をくれてやるつもりはない。

そんな俺の意思を読み取ったのか、攻撃の矛先は月華へと移行し

た。

「ぶっ細工」

吐き捨てるように楓が鼻で笑った。

と同時に両方均等にあげていた俺の口角の角度が歪む。

「まだ楓の方が良かったんじゃない？宿世君」

取り巻きの1人が発した言葉に青筋がたった気がした。

彼女への罵倒にほんの数秒前まで下がっていたはずの眉毛は釣り上がった。

月華が不細工？

楓の方がマシ？

冗談は寝言だけにしろよ？

俺は、好きな女をボロクソに言われて笑っていられるような人間ではない。

「先輩方？」

すうっと怒りを込め瞳を細める。

睨^ねめつけた。険を含んだ声でさっきまでの作り笑いを破り捨てて、女3人を

「…虎狼？」

不安げに揺れた声で俺を呼んだ。

「しっ」と顔を崩さないまま月華に黙るようにと視線だけで合図を送る。

穏やかとは言えない表情に何かを感じたのか、桜色の唇をきゅつと結んだ。

それを視界の端で捉えてから、意識を目の前に立つ女たちに戻す。

名前を呼ぶことを嗜めたのには意味がある。

俺を名前で呼ぶのは、こいつらが知る限り、道也や肉親だけだった。

それは俺が他人に一線引いている証拠であり、確かに道也に対する親愛の証でもあるのだ。

あんな状態の俺に唯一、ありのままに接してくれたあいつへの俺なりの『信頼』の表れだった。

つまり、『下の名前で俺を呼ぶ』特別』という方程式は事実の上で成り立つということでもある。

昨日月華に向かって言っていた道也の発言はあながち嘘でもない。

まあ、面と向かって道也に『特別』だの『仲良し』だの騒がれるとうざいのだが。

大事なくせに直接は伝えられない。

俺も随分とあまのじゃくだと思う。

道也は器がでかいので、そんな俺すら笑って受け入れてくれる。

ある意味では感謝してもしきれない頭の上がない相手かもしれない。

「おい、楓ちゃんたち」

「置いてかないですよ」

蛇に睨まれた蛙のように俺の眼差しに息を飲んでた女たちの後方から、見知った顔がパタパタと足音を立てて駆け寄って来た。

来るのがおせえよ。しかし 助かった。

これで月華の前で切れなくて済む。

誰にも気付かれないように小さく安堵の息を吐いた。

怒ることは簡単だけど、不必要に月華を怖がらせたくはない。

俺の犯してきた下らない所業の皺寄せを彼女が被ることも極力避けたかった。

それが一緒にいることで必ず付き纏うものであったとしても、出来る限り嫌な思いはさせたくない。

眼力を緩めて顎で彼女たちに彼らを示す。

「呼んでますよ、先輩方」

とつとと消える。

それでも俺から目を外さないの、仕方なく再び笑顔を貼りつけて指で方向を差してやった。

偽りの笑顔が戻ったことに安心したのか、楓が再び甘ったるい声で話します。

「いいのよ、放っておいても。それよりも一緒に…」

一緒にってなんだよ。

楓はけばけばしく装飾された腕を伸ばして、俺の手を取ろうとした。

その瞬間。

「やめてください!」

ぎゅっと痛いくらいに強く手のひらが握られた。

と思つたら、隠していた隙間から月華が躍り出る。

楓たちが月華の乱入に目を見開いた。

「何なの、あなた。見ない顔ね」

「そんなコト関係ないじゃないですか! 虎狼に触らないで下さいっ」

居丈高に声を上げる楓に負けじと月華も応戦する。

まるで火花がチリチリと散るような剣幕で2人の視線がぶつかり合った。

強く強く握られた手のひらはじわじわと汗をかいている。

興奮しているからか　いや、緊張：してるんだ。

昔から争い事が嫌い、俺と月之丞が戦隊物ごっこで叩き合っていて嫌そうに顔を歪めていたもんな。

そんな彼女が　そんなに俺に他の女が触れるのが嫌だったのか？

もしそうだったら　。

嬉しい　反面、自分自身が汚らわしく感じた。

俺はこの手を握っていてもいいのだろうか。

でも、地獄に伸びてきた蜘蛛の糸のように、救いの象徴でもあるような月華の手を自ら離すことなど出来ない。

そして、もうつないでしまったからには、離されたとしても諦めることなど不可能なだろう。

「貴女、誰に向かって…」

楓の友達が月華に文句を言おうとすると、楓が目を極限まで見開いた。

学校とは違う目の大きさを強調したメイクでその顔をされると、妙に気持ち悪い。

「って、なんで手なんて繋いでるのよ」

悲痛を含んだ叫び声に周りの視線がこちらに集まる。

楓の後ろでは他の女が何か喚いていた。

当然か。

形だけとはいえ、付き合っていた頃にはどんだけねだられても手をつなぐことは無かった。

無理やり繋がれても無言のまま振り払って、彼女を置いてそのまま消えたこともある。

そんな男に未練がある楓もどうかしているけど、誰をどう思うかは今の俺には否定出来ない。

月華への想いを否定されたら、俺の人生の半分は無駄になると言えるからだ。

楓の発言に月華は噛み付いた。

それは子犬みたいに可愛いものだったけれど、爆弾のように効果は絶大だった。

「この手は虎狼から繋いでくれたんだから、あなたには関係ないでしょう?」

会話の間、少しだけ緩んだ手の力がまた強くなった。

月華の指が俺の甲に軽く爪をたてる。

繋いでいないもう片方の彼女の腕が俺のそれに絡み付いた。

昔流行ったとテレビで観ただっこちゃん人形のようなだった。

「何ですって!?!」

楓の形相が変貌を遂げる。

それはそうだろう、と俺のどこか客観的な部分がそれを首肯する。

激昂しているので名前で呼んでいることに気がついたかは不明だが、指はきつちりと組まれ、腕に絡み付いた彼女を振りほどかない俺の行動。

今まで女にされれば誰であろうと拒絶していた甘い恋人のようなことを、彼女になら許すのだ。

極めつけは『俺から手をつないだ』という彼女の発言だった。

般若のように嫉妬で顔が変わる様を他人事とは思えなかった。

俺も月華のこの手が俺でない誰かに繋がっていたら、楓程に強烈な感情を面に出すことはなくとも、心の中は嵐のように荒れ狂うだ

ろつ。

今までの自分の人の気持ちを知ろうともしなかった浅はかさに小さく胸が軋んだ音を立てた。

「…なんだ、というか。やっぱり宿世かよ」

そう言った男から嘆息が漏れる。

漸く辿り着いたらしい3人の男の中の見知った顔に軽い会釈をして見せた。

挨拶もそこそこに本題を告げる。

「橘先輩、楓先輩達どうにかしてください」

少なくとも今はお前等の連れだろ。

心の中だけで悪態をつく。

「どうにかってねえ…。こればっかはしょうがないでしょ？いい加減、諦めるよ。自業自得などこあんじゃんか」

自業自得だろうがなんだろうが。

「嫌です」

ぴしゃりと断る。

「へえ、最近のお前がそんなに露骨に顔に出すの珍しいな」

うるせえよ。

橘は眉を上げて不機嫌になる俺の感情を読み取ったのか、くつと片側の口角だけ上げて、皮肉った笑いを零す。

それから楓が睨みつけている月華に目をやった。驚いた顔をする。

「…ってその子何？彼女？すっげ可愛いじゃん」

今更かよ。別にお前に気が付いて欲しくは無かったけどな。

橘の言葉を寸分の間もなく否定する楓。

「可愛くなんかないわ、そんなチンチクリン」

月華から「むっ」と小さな声が漏れる。

ヤバイ。顔が怒りで真っ赤になってる。

そんな顔も可愛いなどと言ってる余裕はなさそうだ。

「貸し1つ…だからな？」

橘が俺の肩を軽く叩いて、顎で行けと促した。

こんな公衆の面前で恥を曝すつもりはさらさらないらしい。

助かった。

「分かりました」

借りなんて返すつもりはないけどな。

言葉にならない音で毒吐いてから首肯した。

折角月華が楽しんでいたのに。

先ほど迄の無邪気な笑顔を思い出し、今の不機嫌な彼女を見遣る。

「ごめんな、俺のせいで。」

とりあえず、心の中で謝ると息を吐いた。

「何、分かったって…」

「帰ろ、月華」

話が分からず俺を見上げる彼女の手を引き、楓たちに背を向けた。

月華の動揺が見なくても背中にも伝わる。

彼女なりの反抗なのか、繋いだ手を強く引かれる。

足を踏張っているのかなかなか前に進まない。

水族館にまだいたいのだろう。

月華が水族館に未練があるように、俺にだって月華を存分に楽しませてやれなかった後悔が残る。

それでも。

今の関係がきちんとしていない内から、あいつらに月華との関係を壊されることは我慢出来ないんだ。

また 連れてきてやるから。

連れてきてやれるかな ?

再び襲う恐怖を淡い泡のような不確かな期待で誤魔化した。

「ごめん!」

あれから直ぐに水族館を出ると、駐輪場に向かった。

周りを見渡し、橘が楓を抑えてくれていると思った俺は悔しそうに唇を噛む月華に頭を下げる。

顔を覗き込もうとすると地面に目を落とし、両手を震えるほど強く握りしめていた。

「…虎狼、何あれ？」

「うん…」

唸るような低い声に頷くしか出来ない。

「何で水族館出なきゃいけないの？あの人達何?!」

「うん…」

「『うん』じゃ分からないよお」

絞りだしたような怒りを孕んだ声と一緒に顔を上げたその茶色く澄んだ瞳には、透明な雫石が湛えられていた。

「そりゃあ…あの人達に比べれば、綺麗でもないし、子供体型で…見た目もお子様かもしれないけどさ…チンチクリン扱いされて…！我慢なんか出来ないよお…」

あたしにだって、なけなしのプライド位あ…」

言葉の途中で腕を引き月華を強く抱き寄せる。

すっぱりと俺の腕の中に収まる小さな身体を力一杯抱き締めた。

ごめん、ごめんな？

月華が罵倒される理由なんて、本当は1つもないよな。

胸元におでこを付けて漏らす嗚咽さえ飲み込んでしまいたい。

家にいたときにすっかりと話をしなかった自分の愚かしさを悔やんだ。

まだ話せていない『俺』を知ったら、この腕に感じる温かさ
は、朝露のように儂く消えていつてしまうのだろうか。

それでもこの笑顔を失わせるくらいなら、俺だけが我慢すればいい

い。

そう、ただそれだけのこと。

夢は結局夢のままなのだと、諦めればいいだけだ。

「…ごめん、ちゃんと話すから。

俺んち 帰ろう?」

涙を拭う月華に囁いた。

自分の耳にも入ってきた声は、意識して発したはずの声よりずっと痛々しい。

小さく頷く月華の髪をそっと撫でてから、そっとヘルメットを頭に被せた。

*

第6話

「月華？」

エアコンの効き始めたリビングで、向かい合って座る彼女に呼び掛けた。

「…何？」

分かってはいたことだが、ご機嫌はすこぶる悪い。

「怒った？」

この場に相応しい言葉が見つからず、口にしたところまでどうしようもないことを訊ねてしまう。

「…怒った」

「…ですよね」

「………」

沈黙が痛い。

いつものように絡み合わない視線に、この状況を打破する方法も見出だせずただ俯く。

テーブルの上に置いた両手を強く握った。

こんなときでもチクタクと規則的に時を刻む腕時計を眺めながら、頭では無数の言葉の羅列が巡る。

楓が言ったことは気にしないで。

違う。

月華は悪くないから。

それは当たり前だ。

何を考えても今必要な言葉が見つからない。

こんなときにまで、どうして自分を作らなければならないのだらう。

決心したはずなのに、いざこの瞬間を迎えると恐怖に心が怯える。

ただ自分を正当化するための理由を考え連ねている間に、椅子を引く音が聞こえた。

「虎狼…、あたし帰るね」

その声に弾かれたように顔を上げると、寂しげな眼差しで俺を見ていた。

「え？」

「…今日は楽しかった。バイバイ」

唇だけ緩やかに弧を描き、離別を告げる。

嫌だ！

ここで離れたら　これからはない、と感じた。

「…月華！」

リビングのドアを押し開けようとした月華の手を強く握る。

振り向いた彼女の瞳の奥に今にも泣きそうな俺の顔が伺いしれた。

すっげえ格好悪い。

それでも大切な物を失わないためには、プライドをかなぐり捨ててもやらなきゃいけないことがあるのかもしれない。

失いたくない。

僅かなプライドを守るためのケチな考えなんてもうやめだ。

惨めでも世界中で一番格好悪くても、隣に月華がいてくれるならそれでいい。

明らかかな動揺に揺れる瞳を見つめたまま、小さな手を引きリビングに戻る。

さっきまで座っていた椅子に再び座らせ、彼女の前で膝をつき、その温かい両手を握った。

「今日の事はごめん。…でもね、月華」

俯いて月華の手を握る力を強めた。それから、顔を彼女にきちんと向けて告げる。

「俺と付き合ったら、辛い思いしかなかったかもしれないんだよ」

「え？」

手を解いて、聞き返してきた月華の柔らかな身体を腕の中へ招き入れた。

「虎狼…？」

「俺は、月華の為に…月華を護るために頑張るから。
…だから」

だから、お願い。

「今日みたいに嫌な思い一杯させちゃうかもしれないんだけど。
…月華が、俺でいいって言うってくれるなら。絶対…絶対護るか
ら」

細い糸を寄り合わせるように懸命に紡いだ言葉を一度切って、抱き
締めた彼女の耳元で懇願していた。

「『俺がいい』…って言うって？」

俺だけを選んで。

ずっと傍にいて欲しいんだ。

「虎狼」

優しい声が俺を呼ぶ。

「……」

答えない俺に回された手、俺を抱き締めた力が強くなる。

「あたしの事、好き？」

月華を真つ正面から見つめた。

「…好き」

好き？

そんな単語じゃ足りないくらいに好きだよ。

ゆっくりと大きな瞳が姿を瞼の奥へと姿を隠した。

キスしていいんだよな？

キスなんて 何回もしているはずなのに心臓が暴れます。

どくんどくと脈打つ身体に、月華がどれだけ特別なのかを思い知らされた。

顔を近付けてその桜色の唇に自分の唇を付けた。

震えてなければいいけど。

月華との10年振りの口付けは、今までしてきたどんなそれよりも甘いものだった。

月華の瞳が姿を現した。

恥ずかしそうにはにかむ笑顔に顔中が綻ぶ。

ダイニングテーブルの椅子に座っている月華を抱き上げた。

小さく驚いた声を上げた彼女をソファアへと運ぶ。

姫抱きをしたまま俺の膝の上に乗せて、柔らかな身体を抱き締め
た。

月華の首筋に顔を埋め、変わらない彼女の匂いに酔う。

匂いで安心するってまるで俺は赤ん坊だな。

「虎狼？」

「うん。月華…」

呼ばれて視線を彼女に戻すと真っ赤に染まる顔に愛しさが湧きあがる。

「恥ずかしいから降ろして？」

それには応えられないな。

質問の答えをスルーして、再び気持ちを囁く。

「好きだよ」

ますます赤みを増す顔。

羞恥のために俯いてしまった月華の頬を包んで俺に向ける。

もっと近くで月華を見せて？

更に熱を帯びる彼女の素直さが俺をどうしようもないくらいに安心させてくれる。

「あたしも大好き……」

俺を見つめて開いた唇から溢れた言葉。

本当、どんだけ可愛いんだよ。

半分照れ隠しで囁く。

「キスしてもいい？」

「…うん」

頷く彼女に唇を寄せた。

顔中にキスの雨を降らす。

大きく澄んだ瞳を隠した瞼に、額に、赤く染まった頬に、口付ける。

最後に触れているだけで陶醉しそうなほど、甘い唇に自らを寄せた。

月華は嫌がる素振りなど微塵も見せず、俺のキスを受け取ってくれる。

肩に遠慮がちに添えられた彼女の手の温もりが、もっと、と催促しているような気がして、何度も何度も触れるだけのキスをした。

月華の耳にも届くように、僅かなリップ音をたてて、付いて離れてを繰り返す。

感覚だけでなく耳でも俺とのキスを感じて欲しい。

そう祈る俺はどれだけ月華を自分のものにしたいのだろうか。

触れる唇からいとおしさが伝わるように、キスを深いものにしようとして付ける時間を長くし始めたときに、邪魔が入った。

ピンポーン

「お客さんだ」

名残惜しさを噛みしめながら、彼女から顔を離す。

姿を消していた月華の瞳が、潤んで誘うように揺れる。

自覚はないのだろうか、さっきまでの赤いだけの頬とは違い、熱に浮かされたような色香が漂う。

ヤバイ。ここにいたら歯止めが効かなくなりそうだ

柔らかな身体をそっと包んでから、そっと隣に月華を下ろした。

当分冷めそうにない頬に軽く触れてから微笑むと、寂しそうな顔を
をする。

「ちょっと待っててね」

「うん」

すぐ戻ってくるから。と暗に伝えながらリビングから外に出た。

「はい？」

インターホンに話しかけると、

『オレオレ』

と聞きなれた声が機械から漏れてきた。

画面を表示させるとそこには道也と月之丞が並んで立っている。

「オレオレ詐欺なら間に合ってます」

『ちょっと待てっ。オレだ！道也だって』

そんなこと焦って言わなくても分かってるよ。

その反応に意地悪く口元を歪ませる。

『道也バカだな。あのカメラで虎狼は確認してるに決まってるだろ？
何回ここに来てるんだよ』

やれやれと言った様子で月之丞は道也に呆れた声を出していた。

『今頃、ドアの向こうで笑ってるぜ』

月之丞「名答。」

「今、開けるから」

しかし。いいところで煩いのが来たな、というあからさまに迷惑そうな顔をした自分の顔が、玄関前に置いた姿見に映っていた。

ヤバイ、顔戻さないと。

かちやりと音をたて、受話器を置いた。

鍵を開ける前にいつもの表情を作りながら、玄関へとスリッパのまま降りる。

2人を招きいれ、ドアを閉めた。

「真っ白いワンピース可愛いね。オレ白いのが似合う娘って好きだな」

リビングに先に入った道也の水素みたいに軽い声が聞こえてきた。
(水と比べればの話だけど)

またあいつは。

苦々しく思いながら、2人の脱いだ靴を揃えてリビングに戻ると

「道也、お前に月華はやらないからな」

月華の正面に座っていた月之丞は、隣で足を組む道也君を睨んでいた。

その姿は番犬のようで、少しだけ微笑ましい。

「それは月華ちゃんが決める事だろ？」

どこからくるのか、自信ありげに眉を上げ、にやりと笑う道也。

その顔と発言を彼女の前でしたらはず倒されるだろうな。

あいつ地味に怖いから。

月華は、と言えば道也のキャラクターが掴めていないらしく、2人を交互に見るだけで言葉を発しない。

そんな様子を横目で見ながら、冷蔵庫を開け、グラスに氷を投げ入れた。麦茶を流れこませると、からんと心地いい音を奏で、茶色い液体の中で踊る。

俺はそれらを持ってソファーに寄り、茶を並べると言った。

「月華は俺のだから、ダメ」

『俺の』。

独りよがりな独占欲。

それでも彼女は俺の言葉に眉を潜めるでもなく、ふわふわと空に浮かぶ雲のように柔らかく微笑んでくれた。

月華の肩に手を回すと、胸元にそつと頭を預けてくる。

「虎狼…それって大丈夫か？」

珍しく遠慮した響きを含んだ声の方向に目を向ける。

視線を送ると、どこか不安に覆われた表情の道也と目が合う。

お前がそんな顔すんなよ、嫉けたくせに。

取られるぞ、って脅したのはどこのどいつだ？

もし 俺がお前で、俺がお前の立場でも。

きつと俺は同じことを質問しただろうな。

そして同じことを答えただろう？

大丈夫。って。

口だけ動かして目の前に座る親友にそう伝えた。

全部、何とか乗り越えてやる。

月華の肩を抱く力を強くすると、上を向いて俺の顔を下から覗いてきた。

さっきまで俺を遠慮なく誘っていた唇にキスを落とした。

薄く目を開くと、映った瞳は驚きで大きく見開かれている。

キスの時は、さっきみたいに瞳を閉じて欲しい。

たとえ不意打ちだとしても。

どんどんキスに慣らしていかないとなあ。これくらいで驚かれると困る。

これからの苦難の中にも、僅かな、いや、大きな楽しみに胸が夏休みを待つ子供のように弾んだ。

「月華、瞳くらい閉じてよ」

唇を離して、視線を絡ませると、瞳が泳ぐ月華はしどろもどろになっっていた。

「だって…いきなりだし…人前だよ？」

うん、人前つてのはわかってる。

でも、俺はしたいときには人前とかあんまり気にならない。

って、今、初めて知った。

我慢したくない、我慢出来ないって方が近いかもしれない。
意味的に。

こんな衝動は味わったことがない。

まるでタガがはずれたように、堪えていた自分の素直な欲望が、容器から零れ落ちた水のように溢れだし、月華を求める。

こうなると留まることを知らない感情は、やたら正直で。

ずつとずつと我慢して溢れることのなかった感情を抑える方法なんて知らなくて。

他の女になんて聞かせたこともないような、蜂蜜のような甘い響きで囁いてしまう。

「もう一回。」

ほら、瞳閉じて」

それでもなかなかキスの準備をしない彼女の瞳を手で覆い隠すと、諦めたのか目を瞑った。

極上の果実を味わうような、瑞々しい唇を堪能して。

最後に、チュツと軽いリップ音を立て、唇を離れた。

だから、その潤んだ瞳が理性を狂わすんだって。

揺れるブラウンの瞳に誘われるままに、一度離れた唇を味わえば、キスですらこんなにも気持ちいい。

頬を紅潮させ、甘えた視線を俺に送る。

これで誘ってること、無自覚なんだもんな。

チュツとリップ音をわざとたて、唇を離すと温もりを失ったそれが寂しく感じた。

また重ねたい衝動を誤魔化すために、細い首筋に顔を埋めて、月華の匂いを犬みたいに嗅ぐ。

変わらない月華の匂い。

それだけで表現も出来ないような安堵感に包まれた俺の身体を、暖かな両手も包み込んでくれる。

どうして俺がして欲しいことが分かるんだろう。

月華は昔からそうだ。

俺だけを見てくれて、欲しいものをこつして惜しみなく与えてくれる。

好きだよ。

何度囁いても足りない言葉を胸の中で繰り返す。

ずっとこつして俺の傍にいて　。

切実な願いを、彼女を包む力に代えた。

道也はため息を床に落とした。

「やっぱこつになったか。…わかった。力になるよ」

なんだ、その満面の笑顔は。

科白と全く繋がらない笑顔で俺たちを見つめる道也を、呆れ半分で見返した。

「おれも可愛い妹と、未来の義弟のために一肌脱ごうか」

どこまで俺の事情を知っているのだろうか。

幼稚園児の女の子すら魅了しそうな可愛い笑顔を浮かべ、月之丞は俺を見据える。

反対されなかったのは嬉しいんだけど、どこか黒い笑顔に悪寒が走る。

「月華ちゃん」

兄を見ていたときと同じ引きつった顔を、そのまま呼んだ道也に向けた。

俺もそちらに目をやると、慈雨のような優しさを湛えた笑顔。

「虎狼を信じてあげてね？」

不思議そうにしながらも、頷いてくれた月華を見て、道也は心底安心したように肩の力を抜いた。

月華の身体を抱き締めて、

ありがとな、道也。

小さく呟いた言葉が、野生の奴には聞こえたかもしれない。

*

第7話

朝のHRが、待ち遠しくもあり、憂鬱の種でもあった。

「おっす、虎狼」

教室に行き、席に座ると、いつもと変わらない明るい笑顔が俺の隣で開花する。

「おはよ」

「今朝な、梓から電話があっただけだよ」

同じクラスで同じ部活だったのに、朝からモーニングコールか。

仲がいいのか悪いのか。

本当にお前らはわかんねえな。

「ふーん、それで？」

今朝も低血圧気味な俺は、さしたる興味も湧かなかつたため、軽

く流そうとした。

「なーんか、月華ちゃんのこと聞かれたんだよな」

「え？」

ぱかっと携帯を開き、着信履歴で掛かってきた時間を俺に示す。

時間は今から20分程前のことだった。

「何で梓が月華のこと知ってたんだ？」

「それはわかんねえ。

何でも電話が来たときは、彼女は梓の寮の部屋にいたらしいんだけどさ。

いつの間に、だよな。オレも驚いたよ」

知り合い　な訳ないよな。

さしたる接点もないはずだ。

「それで何だつて？」

「月華ちゃんは本当にお前の彼女かって訊かれた」

大きな声では言えない内容のため、顔を寄せた道也は声を潜めて教えてくれた。

「それで何て答えたんだ？」

「いや、普通に虎狼の彼女だって言っただけだ。」

「ここでのお前を何も知らない彼女に、変なこと吹き込まれても嫌だろ？」

道也の言う『変なこと』とは、過去の俺についてのことだろう。

隠し通せることでもないのだが、まだ月華には知られなくなかった。

「どうせ梓やみちるには早いうちにバレることだから、変な隠し事はしないほうがいいと思ったんだ」

勿論、いつもつるんでる道也と風太、そして各々の彼女の梓とみちるに隠すつもりもなかったけど。

でも、みちる　　は大丈夫だろうか。

もう戻せない過去を悔やむ、もやもやと黒い雲が心に影を差す。

「今更、だけど。
みちるはもう大丈夫だから」

後ろから低く、落ち着いた声が俺の疑問に答えてくれた。

道也と同時にそちらを向けば、眼鏡をあげる風太の顔がある。

「風太、お早う」

「おっす、フータ」

「お早う」

俺と道也の挨拶に風太は軽く微笑む。

「みちるの心配はもう、しなくてもいいよ。宿世」

「ああ、サンキユ」

呟くような、それでも強い意志が込められた言霊に頷く。

「それより、彼女出来たの？
どっついう風の吹き回し？」

「今回は大本命！」

虎狼が5歳のときから好きだった子が転校してくるんだよ」

風太の肩をがしつと抱きながら、俺たちの顔に風太のそれも寄せた。

「5歳って、もしかして初恋？」

目を丸くする風太に、何故か楽しそうな道也が首肯する。

「この女癖の悪い虎狼が本当に好きだったのは、初恋の女の子だったらしいぞ。

去る者追わず、来る者拒まずのプレイボーイが、実は誰よりも純粹だったなんて、不思議な話だよな？」

否定出来ないのは辛いけど、もう少し言い方があるんじゃないのか？

「その子、可愛いなの？」

風太は俺に質問するでなく、何故か道也に訊いてくる。

「うん、すっげー可愛い。」

天然で純粹で、虎狼より遙かに一途なんだよ。

5歳から浮気もせず、ずっと虎狼だけを好きだったらしいぜ？」

まるで自分のことのように誇らしげに語る道也の話の内容に驚いた。

月華は 本当にずっと俺だけを好きでいてくれたのか？

……それは俺も初耳だぞ？

「それは……宿世には勿体ないんじゃない？」

「かもなー」。

でも、そんなだけとことん想って貰えないと、こいつは満足しないから」

道也がそう答えると、

「3人で何の話してたの？」

梓とみちるが教室に入ってきた。

「おはよ、2人とも」

「おっす、さっき振り」

「お早う」

風太、道也、俺の順に挨拶をすると、道也の彼女である梓がきつめだけど整った顔を破顔させた。

「おめでとー、彼女出来たんだね。」

あたし、宿世君はずっと彼女を作らないって想ってたのに、いつの間について感じだったよ」

「ほんと。すごい可愛くてびっくりしちゃった」

梓の言葉を繋いで、みちるも頷く。

「虎狼のヤツ、あつと言う間に口説き落としたんだ。」

こいつが女を口説いてるの初めて見たよ」

「……道也」

驚きを隠さない梓とみちるは、同じような信じられないものを見たような驚愕を顔に滲ませている。

「嘘っ、宿世君が口説いたの？」

「もう、すっげー甘いの。」

女に不自由したことのないこいつが自分の意思で女を口説く瞬間が見られるとは想ってなかったよ」

梓と道也はとんでもないことを話出している。

「みちるは見たんでしょ？」

「どんな女の子だったの？」

少し心配そうな顔で風太がみちるに問いかける。

「すごい可愛いいい子だったよ。」

宿世君が好きになるのも頷けるくらい、本当に可愛かった」

「そっか。」

仲良くなれそう？」

「うん、絶対仲良くなれると想う！」

ね？梓」

風太の一番訊きたかったであろう質問に笑顔で答えると、隣の梓にみちるは話を振った。

「うん、すぐに仲良くなれるよ。
月華、いい子だったもん」

もう呼び捨てで呼び合うくらいに、打ち解けているらしい。

これなら大丈夫か？

一抹の不安を抱えながら考えていると、朝のSHRの開始を告げるチャイムが、広い校内に鳴り響いた。

綺麗に消されていた黒板には、大きな文字で2人の名前が書かれた。

『四聖月之丞』

『四聖月華』

多少の身長差、髪の毛の長さ、そして性別の差はあるけれど、2人の容姿は酷似していた。

「転校生を紹介する」

英田が文字を書き、くるりと教壇に向き直るまで。

教室の中のクラスメイトの視線は無遠慮なまでに、可愛いと形容して差し支えない転校生たちに注がれていた。

あまり他人に興味がない風太の様子をちらりと探ると、眼鏡の奥の瞳が大きく見開かれている。

月華は、可愛いだろ？

意味不明の優越感がふと浮かんでは、消えていった。

月華が視線をきよろきよろと落ち着かなく動かす。

俺と視線が絡むと、花開くように微笑む。

その魅力的な笑顔に、俺の胸はとくんとくんといつもより大きな心音を奏でた。

ふいに外された視線の先には、梓とみちるがいて、嬉しそうに弧を描く口元に触れたいと手を伸ばしたくなった。

出来るはずもないのに片時も傍から離したくないなんて。

誰にも感じたことがない独占欲が、むくむくと夏場の入道雲のように成長を続ける。

2人は自己紹介を終え、それぞれの挨拶に温かい拍手と、歓声が上げられた。

ほっとした表情をした月華の隣で、兄である月之丞は片方だけ口角をあげ、クラスを一望した。

それから、さながら挑戦者のように、俺に視線を留める。

なんだ？

視力は特別良くもないが、悪くもない。

俺は少し眉を寄せて月之丞を見返した。

「あ、あと。おれ、超シスコンで、月華を泣かした奴は容赦しないんで。それも覚えておいてね」

宣戦布告 ではないだろうが、兄としての忠告だった。

泣かせるつもりは、泣かせても月華が俺を拒まない限り、離すつもりはない。

俺は強い決意をこめて、月之丞を見続けた。

英田の厚意なのか、何なのか。

月華は俺の隣に、月之丞は月華の前の席になった。

彼女は俺が隣と聞いた瞬間に、本当に嬉しそうな顔をする。

春を待ちわびた桜が咲いたような可愛らしい笑顔に、教室中の野郎の視線が釘付けになったのを、見逃す俺ではなかった。

あんま見るな。

本人に自覚はなさそうだが、穢れをしない子供のような純真無垢な笑顔は人目を惹きつける。

俺の隣に来た月華は、パラパラと用意されていた教科書に目を通していった。

生徒会長、学級委員として、可笑しくない程度に。

椅子に座った彼女に声を掛ける。

「宜しくね、四聖さん」

弾かれたボールのように、彼女は俺の声に顔を上げた。

造られた俺の顔を見て、悲しそうに顔が歪む。

それでも懸命に笑顔を作ろうとするが、さっきまでの微笑みと似るはずもなく、それは失敗に終わっていた。

「うん、こちらこそ」

そう答えた月華はすぐに俺から目を逸らし、俯いた。

机の下で握られた両手は小刻みに震えている。

ごめん、月華。

痛む心を仮面に隠しながら、俺はまた黒板を向いた。

淡々とメトロノームのような規則正しさで、数学の教師は黒板に数字を書いていく。

そのカツカツと音を鳴らしながら増えていく数字の羅列を、黙々とノートに連ねていった。

公式の説明すら今は全く頭に入らない。

既に予習を済ませ、理解しているということもあるが、それよりも今の俺には気になることがある。

隣に座る月華の顔が段々と曇り、唇を噛んでいる。

数学の授業が進むに連れ、俯く角度は深くなり、とうとう机に伏せた。

転校生、ということもあるからか、教師はちらりとこちらを見る

が注意しようとはしない。

月華？

名前を呼びそうになる衝動をぐくりと息を呑むことで堪えた。

とんとん

と、肩を叩かれ隣に座る道也に視線を配ると、顎で行けと合図をされる。

『オレが何とか誤魔化してやるから』

口パクでそう言われ、俺は小さく頷いた。

「先生、四聖さんが具合悪そうなんで、保健室に連れていきます」

立ち上がりそう言うと、クラスの視線は俺に集中する。

俺たちより前に座る奴らも何事かと後ろを向いた。

こっち視んなよ。

視線を月華に向けた男たちに殺気を含ませた眼で、ぎろりと睨むと数名は前に向き直った。

「大丈夫？」

月華の耳元で囁くと、涙で滲むブラウンの瞳が俺を見つめた。

良かった、まだ泣いてない。

心中嘆息して、教師の許可を得ると、月華の手をつないだ。

ぎゅっと強く握り締められた手を解いて、包み込む。

「保健室に案内するね」

俺を凝視して石のように固まる月華に話し掛けると、返事をしない彼女を立たせ、足早に教室を出た。

「え？」

あの……虎狼？」

不安をふんだんに含んだ声が俺を呼んだ。

早く 安心させてやりたい。

月華のことを好きだと伝えたい。

逸る気持ちを抑え切れず床を蹴る足に力が入る。

満足に閉めなかった教室のドアの向こうから、
案の定月華には聞かせたくなかった女子の声が響く。

不満を訴える耳障りな甲高い声に、道也の嗜める声が応えていた。

「
虎狼？」

後方と俺を交互に見る月華の視線に気が付きながらも、何も言わず目的地へと急いだ。

音もなく開閉する扉をスライドさせると、消毒液の独特な匂いが香った。

保険医は不在で、蛍光灯は全て消えている。

大きな窓から太陽の光を取り入れているためと、下手に在室を悟られないため、手を伸ばした電気へのスイッチはそのままにしておくことにした。

脚を掬い、月華の身体を抱き上げると、驚いて声を上げた。

珍しくベッドは全て空いていた。

昨日は学校が休みだったため、しっかり休んだ生徒達の体調は万全ということか。

俺は、並ぶベッドの真ん中へ月華を下ろすと、大きな窓に設置されたカーテンを引いた。

夏の日差しが遮断され、少し視界が薄暗くなる。

念のために。

ベッドを取り囲むようになっていたカーテンも引いて、保健室に入った瞬間に誰かに見られないようにした。

月華の横に座ると、ベッドが微かな悲鳴を上げた。

俯く彼女の髪を撫で、顔を上げてくれるその時を待つ。

何かを探るようにゆっくり顔を上げたその瞳には、まだ涙が滲んでいた。

「月華……」

潤む瞳に誘われるように、愛しい名前を囁き、顔を寄せる。

微かに震える桜色の唇に触れようとした瞬間に、拒絶の言葉が放たれた。

「やだ」

「月華？」

たった一言のはつきりとした拒否に目の奥が暗む。

暗くなった視界の真ん中を陣取る彼女は、真新しい制服のスカートを握り締め、擦れた声で言葉を紡いだ。

「何で 月華って呼んでくれないの？」

「月華」

最早 泣き声に近い声。

今にも嗚咽を含みそうなその声に、胸の奥が音をたてて傷んだ。

「あたしが…… 虎狼と釣り合わないのは わかってるけど……」

釣り合わない？

それは　綺麗な月華に比べて、随分と汚れてしまった俺の科白だよ。

涙を溢し始めたその瞳が、俺を見つめる。

「でもっ　あたしのことが好きじゃないなら、最初から」

「月華！」

月華の身体を掻き抱き、胸元へ押し付けた。

月華を好きじゃない、なんて冗談でも思わない。

こんなに　今でもこうして焦がれるくらいに、大切に堪らないのに。

「俺だって呼びたい」

何度も空に向かって呼んだ返答のなかった、その言葉。

今、漸く体たいに至って、俺に伝えてくれるというのに、呼びたくない訳がない。

「釣り合わないなんて思ったことないよ」

1つ、嘘をつく。

俺は 綺麗な月華には釣り合わない。

でも、もう離したくない。

一緒に汚してしまうとわかっていても、穢れない月華を穢してしまふと思っても。

どこまでも一緒に堕ちて欲しいんだ。

「俺は月華が 好きだよ」

月華にとっては鎖のような言葉。

こんな言葉でがんじがらめにしてしまふ、弱い俺を許して欲しい。

「 呼んで欲しい。」

ちゃんと……月華って呼んで？」

俺の制服を握って、彼女はねだる。

ぎゅっと音が聞こえてきそうなほど、強く握られた拳は僅かに震え、月華の不安が痛いほど伝わる。

話さないとか。

「俺の話。」

梓とみちるに聞いた？」

覚悟を揺るがさないために、彼女の顔を覗き込んだ。

潤む両目からは、透明な液体が滲んで、瞬きをしたならば、いくつもの雫石が落下をするだろう。

今、月華を泣かせているのは、他の誰でもない俺で。

もう不用意に泣かせないよう、月華の泣き顔を胸に刻み付けた。

「うん……。」

ファンクラブがあるんでしょ？」

首肯し、鼻をぐすつとすすりながら、見つめるその瞳の中に、歪いびつな俺の顔がうつる。

「そんなもんじゃないよ」

ファンクラブ。

なんて名ばかりの、ただの欲望の塊。

俺個人に魅力があるわけではなく、欲望の先にあるのは金と地位だ。

下らない。

少なくともここにいる生徒達は、世間一般の人々よりも収入がある人間のはずなのに。

もっともつとと、欲を貪る神経に虫酸が走る。

そして、それより気持ちが悪いのは、それを何とも思わなかった歪んだ当時の俺の心と、あいつらの捻れ曲がった心根。

「…俺と仲良くした女の子が、標的になるんだ」

俺に好意を寄せてくれたみちるがそうだったように、1番大切な月華にさえ悪意が向けられると思うと、とても我慢が効きそうになり。

月華の首筋に頭を乗せ、次に来るだろう質問を待った。

「標的？」

「…どんなに気持ちのない彼女でも、標的にされるのは嫌になってきて…。」

だから、彼女はもう作らないつもりだった」

最初は、特に何とも思わずにいた、苛めのような行動。

道也の人間らしい感情に触れるたび、太陽のような笑顔に永久凍土かと思われた感情が溶かされていった。

封印していた感情。

悲しいも、痛いも、苦しいも、リアルに感じるようにはなっただけ
ねど。

楽しいも、嬉しいも、ストレートに胸に響くようになった。

『好き』も、手の届く範囲にまで近づいた。

今、肩肘を張らずに思いを伝えられるのは、道也の功績がでかい。

そして、感情を感じられるようになった俺に、彼女たちの行為は
目に余るようになる。

温もりだけ欲しかった性欲の吐き出し口も、気持ち安定すれば
必要はなくなつた。

可能な限り関係を持った女を切り、余計な波風は立てないように、
心掛けた。

次に抱くとしたら、月華だけ。

再会のあてもない自分と、己の汚さから探すことも出来ない葛藤
はあったものの、その勝手な夢物語は、随分と俺を救ってくれた。

「なのに、あつという間に月華に落とされちゃった。すげえ意思が弱い」

また1つ、重い気持ちを誤魔化すための嘘をつく。

大きすぎる気持ちを悟られないように、
重荷にならないように。

好き、という感情を持ったのは、誰でもない彼女にだけで。

封印していた思いは、薄氷を踏み潰すくらいにいと簡単に、蘇る。

いや、もしかして、もう一度一目惚れをしたのかもしれない。

「虎狼」

だから、こそ。

何度も好きになる、特別な存在だからこそ。

「傷付けたくないんだ。」

ちゃんと話しておけばよかったね…。もう泣かせちゃった」

月華の西洋人形のように丸く、大きな瞳からは、宝石みたいな雫石が溢れる。

唇を寄せて、吸い取ってしまいたくなる、月華の涙。

「本当は、月華は俺のだって言いたい。

月之丞にだって、絶対泣かせないってあの時、言いたかった」

あの約束をきちんとしていたなら、反古になってしまっただけはいるけれど。

それでも、こんな思いをさせたくはなかった。

俺が弱いせいで、言葉が足りないせいで。

いつも、

いつも月華だけが傷つく。

わかっているくせに全てを曝け出せない自分に、

まだ 勇気のない自分に、言葉では表現出来ないような嫌気が差す。

勇気って、何だろう。

月華を傷つけないように、何も伝えないこと？

いや、それは違うな。

俺が、このまま月華を手放して自分勝手に感傷に浸ること？

それでは、いつもと何ら代わり映えはしない。

月華を　信じること？

涙を流す月華に視線を留まらせた。

問いの答えは、分からない。

分からないけど　。

月華をこれ以上、俺の勝手なエゴで泣かせたくなかった。

それでも。

自分の弱さを素直に曝け出すほどの勇氣は　まだない。

自分の情けなさに、消えてしまような嫌悪感が駆け巡る。

そんな俺の葛藤など知らない月華は、甘えるように、俺に身体を預けてきた。

生きている重さと体温が、薄い制服ごしにしっかりと伝わる。

胸元に慣れた飼い猫のように顔を擦り寄せる、月華の身体を抱き締めた。

俺を拒絶するそぶりすらないその仕草に、下らない葛藤が一瞬に

して霞に変わる。

確かな呼吸音、身体に響く鼓動の振動。

このまま、ずっと時が止まればいいのに。

淡い期待は叶うことなく、平等に時は刻み続けていた。

「月華…」

「何？」

眠ったかのように、静かに動かない月華に声を掛けると、大きな瞳を開いて俺を見上げた。

吸い込まれるような透明な瞳に、俺の顔が一杯に映る。

「このまましばらくここで休んでて？」

「どっしょって？」

「どっしょって？」

その泣いたことがモロばれの顔で、教室に戻る気か？

月華の目元を軽くなぞると、くすぐったいのか真丸の目をそっと細めた。

「……月華が俺だけの為に泣いた顔を誰にも見せたくない……。
独り占めしたいし、目も兎みたいに赤いし」

触れた目元は、他の箇所より熱を持つ。

「冷やしておいた方がいいかも」

ポケットを探り、ハンカチを取り出した。

備え付けられた洗面台へ赴き、水で濡らして固く絞る。

ベッドの上にちょこんと座り、俺を待つ月華の姿が形容しがたいほどに可愛く思えた。

「キスしていい？」

ハンカチを月華に渡す直前に問いかける。

「え？」

疑問符を上げた彼女の許可も取らぬまま、その瞼に口付ける。

両手で小さな身体を包み、布で拭う前の涙の跡に舌を這わせた。

驚いた月華が俺を押し返すが、そのまま抱く腕に力を込める。

引いていた顎を上げさせ、甘美な唇に自らを寄せた。

「…しょっぱい」

月華の小さな声が無音の保健室の中に響く。

確かに、塩味。

「でも俺には美味しいかも」

愛しい月華が、俺のことだけを想って流した涙。

それだけで、特別な気がした。

「もぉ…やだぁ」

何度も軽い音をたててキスを繰り返していると、月華が照れくさ

そつに微笑みながら囁いた。

闇夜に月が瞬くような、淡く美しく、世界を照らすような。

俺を、安心させてくれる微笑みを。

「やっと笑った…」

安堵の息を漏らすと腕の中で彼女は頷く。

「ずっと笑っていて？」

「どうして？」

少し首を傾げる月華に、額がくっつくほど顔を寄せた。

「笑った顔が一番可愛い。笑ってる月華が好きだよ」

月華の頬が桜色に紅潮を始めた。

「バカ」

不貞腐れたように低く呟いて、月華は俺から顔を逸らした。

夕焼けに染まった景色ほどに色付いたその表情を見られたくないらしい。

でも、その照れた顔が見たい　　つてのが、俺の本音で。

月華の頬に手を添えて、俺の方に向き直させた。

「うん、知ってる。」

でも月華にだけだよ？」

月華だけにしか、こんなことは言わないよ。

涙の伝った箇所にも再びキスをした。

「もお…くすぐったいってば」

キスを重ねる度に、怒ったような不機嫌な顔が、解けていく。

くすぐすと小さく笑い出すその様子は、とても可憐で俺の心を温かくする。

「もっと笑って？」

柔らかな弧を描いたその桜色の口元に、再び唇を合わせた。

小鳥がお互いを啄ばむように、軽く。

それでも何度も何度も、回数を重ねる。

「…笑った顔が一番、可愛い。ずっと俺の隣で笑ってて」

心からの願いを囁いて、深くその温かさを貪る。

途中、制服をぎゅっと握られ、力の抜けていく月華の身体を両手で包むように支えた。

潤んだ瞳に理性が揺さ振られる。

ヤバイ。

これ以上ここに居たら、俺何をしでかすか分からない。

誰もいない保健室。

後ろにはベッド。

最高で最悪なシユチエーションだ。

「じゃあ、戻るから。」

ハンカチで目を冷やして、寝て待つてて？迎えにくるまでここに
いて？」

「うん」

月華が布団に入り、シーツで半分顔を隠した。

その姿も、何とも言えずに可愛い。

前髪をさらつと彼女の額から払い、そつと口付けた。

後ろ髪を引かれる思いで、踵を返して保健室を後にした。

*

第8話

「戻りました」

少しガヤガヤと煩い教室のドアを開けると、各々が立ったり、友達のところへ移動していた。

ん？何やってんだ？

一応教師の元に顔を見せてから席に戻ると、自分の机の上には教科書とノート、そしてテストの答案用紙が置かれている。

ざわめきの理由はこれか。

ぱらっとな案用紙を捲れば、そこには百点と数字が記載されていた。

「おお、虎狼！満点じゃん」

いつの間に。

月之丞と道也が後方から俺の答案を覗き込む。

「たまたま だよ」

2人を追い払おうとした隙に、月之丞が俺の手から用紙を取り上げた。

おい！何してんだよ。

「チヨイ問題のレベルを見せてくれよ」

どうやら点数に全く興味はないらしい。

ふんふん、と真つ白なノートに問題だけを写し、スラスラと解き始めるのを、俺と道也は呆然と眺めた。

こいつ、実はすげえ頭いいんじゃないか？

「おい、虎狼」

問題をどんどん紐解いていく月之丞の姿を観察していた俺の肩を、道也の大きな手が叩いた。

「何？」

「月華ちゃんはどっだった？」

あ、そうか。

道也は俺の為に動いてくれたんだっけか。

「ああ、大丈夫。」

今、保健室に誰もいないからそのまま休ませてきた」

さっきまでの月華との一時を思い出すだけで、顔がほんわかと弛む。

「幸せな顔しちゃってまあ」

少し呆れたような、それでも嬉しそうな道也の声に笑い返した。

幸せなのは 否定しようがないからな。

「道也、お前の点数は何点だったんだ？」

赤点は免れたのか？」

うちでの赤点は45点以下。

約半分は理解出来ていないと取れない数字だった。

「46点!」

誇らしげに胸を張り、腰に手を当てふんぞり返る。

……褒められる点数か?

ま、赤点じゃないだけいいか。

満面の笑顔を覗かせる道也に髪をかき上げながら、苦笑を零した。

去年は38点で　綺麗に赤点。補習にも付き合わされたからな。

まだ他の教科は戻って来てないけど、幸先のいいスタートではある。

「できたっ」

明るい声がざわつく教室の中に響いた。

月之丞が書き写した問題、全てに、案外綺麗な数字が並び、答えが導き出されている。

解くの早くないか?

俺のテストをひっくり返し、自己採点を始めた。

「お、一個だけ間違ってたけど。
後は完璧だっ」

このスピードで、この難解（だとは思わないけど、そうは言われている）な問題を解くとは。

やっぱりこいつ、結構な秀才なんじゃ？

「こんくらいならあんまり勉強しなくても大丈夫そうだな」

暢気な声に、周囲は困惑気味な顔をこちらに向ける。

皆徹夜までして、懸命に勉強した教科をそんな風に言われると、いい気分はしないらしい。

それは思っても口にはいけない言葉だろ、月之丞。

俺は軽く月之丞の頭を叩き、小さくそう呟きながら軽率さを誡めた。

「ドンマイ」

何がドンマイだよ。

にかにかと笑いながら俺を見上げた月之丞に嘆息した。

「ま、このレベルじゃ月華の赤点は必至だな。

あいつ、典型的な文系だから、道也より危ないぞ」

同情したような、可哀相な子を遠くで眺めるような酷な視線を俺に投げ掛けた。

「月華だったらいくらでも付き合っけど」

分からないと困ったように眉を寄せる顔や、半分泣きそうな表情を想像して、その愛らしさに頬を弛めた。

ヤバイ、月華だったら、そんな顔すらそそられそつだ。

「勉強になると鬼虎狼になるくせに、無理じゃね？」

毎回、俺にスパルタに扱かれている道也は、思い切り顔をしかめた。

しかめすぎて、顔中に変な皺が寄る。

何だ。毎回教えてやっている俺にその言い種は。

そのまま道也の顔を瞬間接着剤で固定してやりたい衝動に駆られる。

「お前と月華の俺の中の位置付けを一緒にすんなよ？」

月華の方が、かなり高いからな」

念のため、そう言つと

「うそっ?!」

道也がムンクの叫びに似た姿へと変貌した。

嘘も何も 本当の話だよ。

月華を保健室に迎えに行き、関係者以外立ち入り禁止の、木々に囲まれた広場に座る。

じいちゃんが手塩に掛けた木が植わったこの一帯は、許可が無ければ立ち入ることが出来ない。

何でも根が浅い木もあるらしく、踏み荒らされたくないらしい。

「美味しそう」
「うまそう」

芝生の上にランチマットを敷いて、6人が輪になる。

物珍しそうにキョロキョロと周りを見る月華の前にお手製の弁当（もはや重箱と言っても過言はないかもしれない）と、風太が持ってきてくれる昨日の料亭での残りの材料を使った昼食が並ぶ。

風太の家は老舗料亭だから、見てるだけで勉強になるんだよな、料理の。

6人にしては多いんじゃないかって量だけど、どうも道也が満足するまでの量を考慮すると、これくらいじゃないと足りない。

ま、気持ちよく食べてくれるから、そんなに苦にはならないんだけどな。

「フータの弁当もうまいなあ」

道也は俺たちの弁当を前にご満悦だった。

いい気なもんだよな、ほんと。

木々にいい具合に冷やされた心地いい風が、月華の柔らかな髪を

攫う。

月華の可愛い横顔に見惚れると、見上げた瞳とぶつかった。

月華はにっこりと笑窪を作り微笑む。

少し照れ臭くなった俺は話題を反らした。

「そいえば…月之丞はどこ行ったの？」

「それが、よくわかんないんだよね」

おにぎりを食べながら月華はちょこんと首を傾け呟いた。

「月之丞は、部室に行ってる」

答えたのは道也だった。

「部活、空手部。昨日入部したんだよ。オレが案内したんだ」

「そうなんだ」

ぱちくりと瞬きをしながら月華は首肯だけした。

「……そしたら、月之丞のヤツさあ」

余程面白かったのだろう。

道はしゃべりながらも、笑うことを堪えることが出来ず、肩を小刻みに震わせている。

「一目ぼれしちゃって」

「え？」

月華と俺の声が同時に出た。

あの、月之丞が一目惚れ？

「どんなコなの？」

女は恋バナが好き、ということか。

風太と話していたはずの満ちるが、こちらに身を乗り出す。

「普通の」

真顔で道也は即答した。

普通って、おい。

要は、お前の好みじゃないって言いたいんだろ？
このド面食いが。

「普通って…」

呆れ顔でみちるが道也を見た。

言葉のボキャブラリーのなさに、軽い同情も含まれている気がする、のは俺だけだろうか。

「本当だって。

特に可愛いって感じじゃないんだけど。
型がすげえ綺麗だ、とか言ってるさ」

カタが綺麗？

肩？露出でもしてたのか？

俺は首を少し捻ったが、月華にはその一言ですっかり理解が出来たらしい。

納得したように、小さく首肯している。

部活　カタ。

空手の型ってことか？

詳しくない俺は、何がどうそんなに綺麗なものなのか分からないが、きつと月之丞にとっては特別な思いいれがあるのかもしれない。

「ソッコー今日一緒にご飯食べる約束取り付けてた」

そのときの状況を思い出しているのか、道也の顔には笑みが貼り付く。

ま、こいつの場合、やたら妄想するから。

想像してるだけ、なのかもしれないけどな　。

「お兄ちゃんが…。珍しいなあ」

月之丞が女に声を掛けることが、だろうか。

確かに月之丞って、何となく色恋は二の次、という感じがする。

勝手な俺のイメージだけなのだが。

おにぎりを片手に何かを考えている月華の口元に、白いご飯粒が

くつついていた。

ぷっ、ガキみたい。

一瞬笑いそうになるが、何故かそんな姿すら可愛さを増す材料に
しかならない。

「月華、ついてる」

「え？」

自分では全く気が付いていなかったのだろう。

俺の声に月華は瞬きを数回繰り返した。

手を伸ばし、昨日触れた桜色の唇に触れる。

通常の皮膚より柔らかな弾力をもったそれは、ただ手で触れただけなのに、俺の心拍数を簡単に上昇させた。

掠めた指先で目的の米粒を取ると、月華は恥かしそうに頬を染めた。

「ありがとう」

「昔から月華は何かを考えながらご飯食べてると、どっかにこぼすんだよなあ」

子供の頃はそれでよくおばさんに叱られていた。

「今は、ごぼしたりしてないよ」

今は、だろ？

心の中で苦笑しながら、月華の唇すぐそばに触れた。

「つけてたじゃん、こじこじ。」

そんなお子様なところも可愛いんだけどさ」

「イジワル」

上目遣いで睨みながら、月華の温かな手が俺の指を軽く握る。

手の平から伝わる体温に何故か充足を覚え、口元が綻んだ。

「おお、虎狼がアマママだよ」

お前に甘かったらそっちの方が怖いだろ。

道也の発言に、月華から視線を奴に移した。

「へえ、宿世君て月華とだどこんなに柔らかくなるんだね」

そう言った梓に、まあな、と頷く前に。

照れているらしい月華が頬を膨らませた。

「何よ、自分達だって、手を重ねてるじゃんか。」

その声に道也と梓の手の平に視線を送る。

梓の手の上に重なる道也の大きな手の平。

「オレらはいいの」

珍しいものを見た。

俺は少し眼を細めた。

昼食を終え並んで教室へと戻る最中、月華が立ち止まりキョロキョロと周りを見渡した。

「何かカメラの音しなかった？」

「カメラ？」

隣にいた俺は勿論、前を歩いていた道也も歩みを止めて振り返る。

もう校舎は目前で、生徒が増えているせいかざわざわと雑音が増えていた。

さっきまでの木々の静謐さは微塵もない。

不思議そうにする月華に穏やかな声が答える。

「虎狼の隠し撮りじゃない？」

風太が何でもなさそうに、平然と言い放つ。

虎狼の隠し撮り？と月華は口の中でもごもごと呟く。

意味がよく分からない彼女に、更に余計なことを吹き込んだ。

「宿世の隠し撮りショット、結構な高値で売れるらしいよ」

思い出させるなよ、嫌な事実を。

「た、大変だね」

月華は風太から俺に視線を寄越した。

コメントしづららしく、困ったような口元からはそれ以上の言葉は紡がれない。

「偶像ですから」

苦笑いしながら呟いた。

好き好んでなっている訳ではない。

「道也も人気あるよね」

風太は道也にもそう言った。

月華の微妙な不安感を感じ取ったのかも知れない。

話の論点をどこかにずらそうとしてくれていた。

「そういう風太もだろ？」

道也は片眉を意地悪そうに上げた。

中性的な容姿の風太も校内での人気は高い。

しかし、基本料亭の跡取り息子のくせに人見知りな風太には、それは苦痛でしかないようだ。

「月之丞も綺麗な顔してつから、その内騒がれるようになるんだろ
うなあ」

その最たるものはお前だろ。道也？

噂をすれば影？

「えー、なんでえ」

玄関で靴を履き替える俺たちの耳に飛び込んできたのは、月之丞の声だった。

「い」の声は「

月華はそう呟いてキョロキョロと兄の姿を探す。

月華がウサギだったら、耳がぴんと立ったな、きつと。

「信じらんない!!」

女の怒鳴り声。

何かを殴りつける異質な音が、一瞬玄関を無音にさせた。

なんだ？

「信じてよ」

「絶対信じないっ」

月之丞の笑っているだろう声と、切羽詰った女の甲高い声。

あいつ、一体何をしたんだ？

眉を潜めて玄関から廊下へと急いだ。

すでにその現場にいる月華の心配そうな声が戻ったざわめきの中から聞こえる。

「お兄ちゃん？」

「あ、月華」

「だ、大丈夫？」

「うん、こんくらい慣れてるから」

殴られることに慣れるつても嫌なもんだな。

「あの人、昨日の人だろ？」

「道也。」

うん、そう」

俺より先に身軽な道也が月之丞に話しかけていた。

弁当（もとい重箱）を持っているせいか、どうも他の奴らよりも動きは遅くなってしまう。

「何したの？お前」

ようやく皆に追いついて、したかった質問を投げ掛けた。

月之丞の頬は赤みを差している。

これは腫れそうだな。

「なあんもしてないよ」

軽い調子で笑った月之丞は頭の上で手の平を組んで乗せた。

それから、ニシシといたずらっ子みたいに笑う。

「真っ赤になっちゃって、かあわいい」

「……」

月華は心配そうな顔をしながら、月之丞に手を伸ばした。

顔に冷えぴたを貼った月之丞と道也と梓、風太とみちるが部活へと消えて行った。

運動部、文化部と聖徳ではどちらも力を注いでいるためか、帰宅部は他の学校に比べると少ない。

アルバイト禁止というのも理由の1つにはなっていそうだが。

俺は皆を見送る月華に声を掛けた。

「四聖さん」

帰ろうとしたところだったのか、中途半端な立ち方でこちらを振り替える。

「はい？」

苦笑しながら月華は俺に視線を寄越した。

「また明日」

「うん、今日はありがとう。バイバイ」

月華に手を軽く振り、教室を出た。

振り返って大きく手を振りたいガキくさい衝動を堪えながら、生徒会へと足を向ける。

さて、一仕事するか。

*

第9話

最上階の奥に理事長室と校長の部屋がある。

じいちゃんは俺が高等部に入学する頃に、自分の執務室をこの校舎に移した。

それまでは大学の学部増設もあり、そちらにすることが多かったのだが、今はこちらがメインだ。

そのじいちゃんの部屋の数メートル手前、階段の近くに生徒会室はある。

役員室と書かれた表札のある扉を開くと、そこには5つの机と、作業するための空間が広がる。

広さ的には20畳強といったところか。

机は奥のものが一番大きく、そこが生徒会長用の俺の机。

じいちゃんが俺の生徒会長就任時に買い替えてくれた為、まだ真新しい感じがする。

副会長の弥生が

「まだ全然使えたのにもつたいない！
本当に贅沢よねっ」

と頬を不満げに膨らませ、俺を睨んだことを今でも覚えている。

ま、そうだよな。

でも、俺が頼んだ訳でもないし。

前使っていた机は、生徒会長専用室で使っているんだからいいじゃないか。

生徒会長専用室も俺の為にじいちゃんが作ってくれていたものだけだ。

因みにまだ入ったことは数えるくらいしかない。

「お疲れー」

「あ、会長。

お疲れ様なんだよ」

俺の声にいち早く反応した書記の河西ゆずるが、月華に匹敵する童顔をパソコンの画面から上げた。

にへら、と笑う顔には緊張感の欠片も感じられない。

顔たちと同様に、言動もどこか子供なのだが 仕事は出来る。

河西はネクタイを弛めながら、にっこりと破顔した。

力の抜け切った笑顔が地顔なのだ　と俺は思っている。

それにしても、いつもより笑顔度が高い。

にっこり、より、にまにまに見えてきた。

「会長、ご機嫌だね。」

こんな柔らかい会長初めて見たよ」

ゆずるは笑顔のまま言う。

ご機嫌？

柔らかい？

「　そう？」

自覚がない俺はそう返すことしか出来ない。

確かに今日はいろいろとあったけど、月華と気持ちを通じ合わせる
ることが出来た。

「恋してるって顔だね」

鋭い。

一瞬月華のことを口走りそうになったが、人の口に戸は立たない。いくら生徒会メンバーと言えど、まだ口を滑らす訳にもいかない。口をつぐんでいると、ぷっと我慢していたらしい笑い声が漏れた。副会長の弥生涼子が肩を震わせ、今にも机を叩いて笑い転げそうなほど声無き笑いを零している。

パントマイムをしてるのか、お前は。

眼鏡を外し、目尻に浮いたらしい涙を拭う黒髪の彼女をねめつけた。

「素直に笑えよ」

その笑い方はかえって気持ち悪い。

促してやると、轟音というかただの騒音というか。とにかく馬鹿でかい笑い声はその場に響く。

「かつ、会長が、恋っ？」

「バカも休み休み言いなさいよっ」

昔の俺の素行を知っている彼女は、あまりに似合わないらしい単

語につけまくっているのだ。

俺のイメージはそこまで払拭出来ていないのか。

自分で蒔いた種。自業自得だとは言えど、ちょっと傷ついたぞ、その反応。

「うるさい。」

俺が誰と恋愛しようとか俺の勝手だ。

それより、佐藤」

俺は驚愕の表情をわざとらしく顔面に貼りつけた2人を流して、机の上の資料を眺めていた佐藤雄人を呼んだ。

黒髪で細いフレームの眼鏡を掛けた彼は、とても知的に見え、見えるだけでなく現に3年の学年首席だった。

聖徳では殆どがストレートに大学に進学するため、運動部は流石に引退をするが、3年時でも生徒会役員を辞退する生徒は少ない。

スムーズな進学に必要なのは内申点。生徒会などの仕事はやらなによりやった方が有利にはなる。

ま、ここにいるのはそんな心配のない高学力の奴等ばかりなのだが。

「何、会長？」

数字が並ぶ資料から顔を上げ、涼やかな声で応じる。

俺が一番の信頼を寄せる唯一まともな生徒会員。

「その資料は？」

「去年の聖徳祭の感想集。

何日間聖徳祭を行うかで予算がかなり変わってくるし、何を題材にするかでも随分と差が出る。

今年は苦勞を前倒しにしてちょっとは樂をしようよ」「

総合的に掛かる時間は一緒でも、早目早目に動いた方が気分も体力も樂だ。

と言いたいのだろう。

それは俺も賛成だった。

ただでさえ

生徒会の仕事は山積みで、教師がほぼ介入しない行事などは全ての責任を負わなければいけない。

出来ない、足りないで済まされないのであれば、時間的余裕はないよりはあった方が遙かにいい。

「でも、会長」

「何？」

「2人が言うように、本当に嬉しそうだよ？
今度こそまともに恋してるんだね」

佐藤は眼鏡の奥の瞳を細めて笑う。

最後の一言が余計な気もするが、俺は口元に人差し指を立て

「彼女の話はトップシークレットだからな」

立たないはずの戸を立てた。

「どこのお嬢様なの？」

椅子に座った俺に珈琲を運びながら、弥生は興味津々に瞳を輝かせた。

パソコンを立ち上げ、パスワードを入力していた俺は、眉を寄せ彼女を睨む。

「仕事しろよ」

「どうせ会長のことだから、どこかの令嬢で美人で色気の塊の年上なんでしょう？」

「うちの大学生？」

「聞いていない。」

こうなったらテコでも動かないことは知っているので、大袈裟に嘆息しながら、当たり前障りのない質問に答える。

「普通の会社員の娘。」

美人ではないし、色気はないし、年上でも大学生でもない。要は同年」

美人、というよりは美少女、か？

色気云々は全くない。

月華の魅力は愛玩動物みたいな可愛さな気もするから、無くてもいいし。

色を含むのは俺と2人きりのときだけで十分だ。

午前中の彼女の潤んだ瞳を思い出し、弛む口元を手で隠しながら弥生を見る。

反対に彼女の顔はどんどんと険しくなった。

「 なっ！」

後ろ楯がないのに会長と付き合ったら、苛められるわよ！」

わかってんの？

と弥生は音をたてて、カップを机に置いた。

中の珈琲がチャポンと跳ねる。

そんなこと言われるまでもない。

「 知ってるよ。」

だから尚更他言無用だ。

絶対誰にも言っつなよ？」

睨むように弥生に念押しした後、後方に座る2人にも視線を遣る。

2人も神秘的な顔をして小さく頷いた。

*

第10話

1つ、失念していたことがあった。

俺の目から見た月華が、誰よりも可愛いように。

他の男の目に映る月華も、同じように映ることを。

いつもの時間に登校し、教室に入ると、月華たちはもう登校していた。

梓とみちるに囲まれて、可愛い笑顔を見せている月華の姿を目に捉えて、温かい気持ちになる。

「お…」

お早う、と声を掛けようと喉を開こうとする瞬間に、

「おはよ、四聖さん」

月華の前にクラスメイトの 葛葉が立ち塞がる。

「おはよ、葛葉君」

月華も梓に向けていた笑顔そのまま、葛葉に挨拶を返した。

いつの間に？

声を掛けるタイミングを失った俺は、その場に立ち尽くすハメになる。

「葛葉あ、月華にだけ？あたし達にあいさつは？」

「ああ、おはよ。目に入らなかった」

みちるの睨みを受け流して、葛葉は肩を竦める。

その態度一つみても、葛葉が月華に好意を抱いていることが、一目瞭然だった。

そんな葛葉を笑顔で迎えている月華は、いくら鈍いからとはいえ、その気持ちくらいには気が付いているんだよね？

なのに、どうして笑っているんだ？

「宿世君、何そんなところで突っ立ってるの？」

俺に気が付いた梓が、呆れた声を上げた。

真つ暗になった視界に再び飛び込んで来たのは、呆れた梓とみちの顔と、葛葉に向けていたのよりもずっと嬉しそうな月華の笑顔。

「ごめん、葛葉。」

そこ俺の席だから、ちょっと退いてくれる？」

俺の椅子に座ろうとしていた葛葉を、冷たい声で離れさせる。

「あ、ごめん」

焦ったように立ち上がる彼は、俺の席から月之丞の席に移動した。

「おはよ、四聖さん」

「おはよう」

月華は、ほんの少し笑顔を曇らせながらも、昨日の苦笑いよりは明るい表情を俺に向けた。

「 寮には慣れた？」

「 うん、おかげさまで」

こんな話をしたいんじゃない。

それでも、『月華』と呼べない今の俺に、彼女を独占する権利は無かった。

「ね、四聖さん」

月之丞の席は月華の前。

椅子の背に、両手を置いてまたぐように座る葛葉と月華は、必然的に向かい合う形になる。

隣、とは言っても机が離れている俺と月華の今の距離よりも、ずっと2人の距離は近い。

身を乗り出すように月華に話し掛ける葛葉に、微かな殺意を感じる。

月華に必要以上に近付くんじゃねーよ……。

舌打ちしたい衝動を、拳を握ることで飲み込んだ。

俺の表情の変化に気が付いたのか、梓が視界の隅で少し身を引いたが、そんなこと今は関係ない。

月華は警戒心というものが無いのか、葛葉にいつもの柔らかな表

情を向けていた。

「今日、おれとお昼食べない？」

「お昼？」

葛葉の提案に、月華は驚いたように目を丸くする。

は？

イキナリ本題か？

「昨日、誘おうって思ったら、保健室に行って戻って来なかったしな。」

結局昨日は池谷たちとご飯食べてたでしょう？

だから、今日はその約束をする前に、おれが先約をいれようって思ってたんだよね」

葛葉はそう言って、男にしては大きく丸い瞳で梓を見た。

「池谷、今日は四聖さんを借りてもいい？」

「うわっ、葛葉やるっ」

「俺も一緒に食べたい！」

軽い野次が飛ぶ。

それに許可を出すのは梓ではない、月華だ。

忌々しい発言の数々にそう言おうとする前に、

ドンッ

と鞆を机に叩き付ける音が、日の光が差す明るい教室の中に響いた。

教室の中の音が一切無くなる。

クラス中のヤツらが、全ての会話を止めて、こちらに意識を傾けた。

音の犯人の、月之丞は。

冷酷とも言える温度を、そのブラウンの瞳に宿し、自分の席を陣取る葛葉を睨み付ける。

「そこ、おれの席なんだけど。どいてくれない？」

凍りつくような声に、葛葉は椅子から立ち上がる。

開放された椅子を机の中に戻し、葛葉の前に立った月之丞は鋭い瞳で彼を睨みつけた。

「誰に許可を得て、人の妹を誘ってる訳？」

身長は葛葉の方が少しだけ高い。

しかし、睨みつけている月之丞の殺気に似たオーラが、蛇に睨まれた蛙を否応なしに連想させた。

普段可愛らしい雰囲気醸し出しているせいか、はっきり言って怖い。

「ご、ごめん。四聖君。」

でも、おれは軽い気持ちで月華ちゃんを誘ってるんじゃないわ

「

「はあ？」

軽くない気持ちって何なの？」

ぐいっと月之丞は葛葉のネクタイを自分に引き寄せた。

「うちの箱入り妹に、手を出そうとしてる訳だ？」

綺麗な顔を限界まで葛葉に寄せ、威嚇する。

ただでさえ、そのギャップが怖いというのに。

何だかもう、顔のいいチンピラを観ているみたいだ。

葛葉は、怯えながらも月之丞を睨み付けた。

月之丞のことを空手の有段者とは知らないのかもしれないが、この雰囲気の違いに動じながらも彼を見返す葛葉に、「本気」を感じる。

口を閉ざしても引かない葛葉に、月之丞は肉食獣のような低い唸り声を漏らした。

「殴りたいの？」

開いていた手の平を少し上げて、ぎりっと拳を作る。

決して大きくないのだが、その手はどんな鉄よりも固く痛そうな印象をクラス中に植え付けた。

「ストップ」

「月之丞、やめとけ」

今にも振り下ろそうとしたそれを止めたのは俺と道也だった。

いつの間にか教室に入ってきていた道也は、月之丞の拳を後ろから大きな手で包み込んでいて、俺は立ち上がり2人を軽く睨む。

「月之丞、喧嘩なんかしたら停学になるだろう?。」

道也の声に月之丞を左右に首を振る。

「ならないね」

どっからその自信が出てくるんだろう。

そう半ば呆れながらも、道也の言葉を繋ぐ。

「クラス委員として、その喧嘩は見逃せないよ」

そう言っつて、2人から視線を月華にやると、椅子に座ったままの月華は不安そうな瞳で俺を仰視していた。

何か言いたそうな唇を赤くなるまで噛み締め、揺れる瞳で俺を見ている。

「四聖さん、嫌なら断った方が」

どさくさに紛れて、葛葉は月華のことを名前で呼んでいた。

それに小さな怒りを覚えながらも、彼女を名前で呼べない自分自身に腹が立つ。

俺の言葉を遮るように、道也が月華に顔を寄せて囁いた。

「月華ちゃん、一回位こんなに思ってくれてる葛葉とお昼一緒にあげてよ。」

オレからもお願いするよ」

その囁きが耳に入った俺も月華同様絶句する。

な、何言ってるんだ！

「は？

何寝惚けてんの？道也」

月之丞は切れているせいか、道也にも突っかかり始めた。

道也はそんな月之丞の肩を抱き寄せ、ちよつと来いと教室から出ようとする。

「ちょっとオレ、こいつの頭の熱冷ましてくるわ。
じゃあ、月華ちゃん。
後は宜しく頼むわ」

「宜しく頼むって、おれは認めねーしつ。
離せよ、道也」

クラスの視線が2人の背中を追い、ドアが閉められると、月華へとその好奇の目が向けられた。

「頼むって 道也君？」

震える月華の声が遮断された廊下へと注がれたが、廊下に消えた道也が返事をする事はない。

「あの馬鹿男、一体何を考えてるのよっ」

拳に手の平を当てて、パシパシと梓がいい音を立てて、道也に向けるはずだった怒りを解消している。

「月華、無理しなくたっていいんだからね？
あんな変な男のいう事なんて聞かなくていいよー！」

人の彼氏を変な男、と言つのもどうかとは思つが。

当の彼女も半ば般若のような顔をしているので、気に留めはしないだろう。

「月華ちゃん」

そんな中でもクラスの眼差しは、葛葉に好意的で。

特に男子の目は、功労者である葛葉の味方だった。

懇願するような葛葉の声に、不安げに眉を潜めた月華の瞳が数秒こちらに注がれるが、俺は何も言つことが出来ないでいた。

その反応に酷く傷ついたような顔を見せた彼女は、俯いてから静かに顔を上げる。

「うん、分かった」

「月華?!」

頷く月華を梓とみちるが慌てた声で呼ぶ。

「やったな!葛葉」

「おめでとー!!」

やたら明るい叫び声が、俺の気に酷く障った。

「……」

突き刺さるような視線を感じる。

授業中だというのに、月華は黒板を見ることなく俺の横顔にその眼差しをくれていた。

あれから、何をどう説得されたのか。

さっぱりした顔で月之丞と道也は教室に戻ってきた。

さっきまでの月之丞と別人のように穏やかな反応に、葛葉は酷く面食らっていたが、

「楽しんで来い、月華」

との科白に、当の月華が一番驚いた顔をしていた。

「冗談じゃない！

と、心では思うものの、何も言うことが出来ない俺は、ただ我慢

するために歯を食いしばる。

こんな明るい昼間から何かされるとは思わないが、月華が他の男と2人きりになるといふ事実には、自分の中で処理できないような嫉妬が湧きあがってきていた。

それでも、一歩前に踏み出すことが出来ずにいる。

「嫌なら断りなよ」

前を向いて黒板を見据えたまま、口だけでそう言ってみる。

数秒後に月華に目を遣ると、

「そんなこと出来るわけないでしょ」

不機嫌そうな言葉が返ってきた。

きつと月華は俺に止めて欲しかったのだらう。

それでなくても、転校生という立場は好奇の目に晒されるといふのに、俺は庇ってやることすら出来なかった。

臆病になっている自分がいる。

どうすればいいのか、分からない。

多い被さる暗雲のような重い過去。

そして、その奥の暗黒を知って月華が離れていくかもしれない恐怖。

心の中は嵐のように、様々な気持ちが入り混じり吹き荒んでいた。

昼休み。

意気揚々と嬉しそうな葛葉の後ろを月華は俯き加減に付いて行った。

その寂しそうな背中を目で追いながら、教室から出た事を確認すると、弁当を個人ロッカーから出し、椅子に座ったままの道也に突きつけた。

「先食ってる」

「おう、今日はお前がないから教室で食ってるな」

あの場所は俺がいるからこそ文句は言われないが、元は木々の保

存のために立ち入り禁止区域だ。

道也に頷いて、

「最初から止めればいいのに。」

月華ちゃん、泣きそうだったぞ?」

「うるさいっ」

そんなことはお前に言われなくたって分かっている。

でも、どうすればいいのか判断が付かなかったんだ。

「ほら、さっさと告白して良かっただろ?」

あんだけ可愛いんだ、攫われるのもあつという間だったぜ?」

これを思い知らせるためにこんなことをしたのか、こいつは。

「優しいから押しに弱いし、な?」

しっかりと捕まえとけ」

頑張れと小さく呟いた道也に背を向けて、慌てると悟られないようにと注意しながらも、駆けるように教室を出た。

学校内を走り回って、ようやく校庭の木陰でベンチに座っている2人を発見する。

こんな人気のないところに、男と来るなよ、月華！

警戒心のなさを責めながら、2人に見付からない程度に距離と縮めていく。

後ろの木陰の、ぎりぎり声が聞こえる場所まで来ると、地面に這うようにして身を潜めた。

俺にこんな盗み聞きみたいなことをさせるのは、世界広しと言えども、月華くらいだ。

これでは道也を責められない。

格好わりい。

「四聖さんも、宿世が気になる？」

風に乗るようにして聞こえてきたのは、葛葉の声だった。

「え？」

月華の驚いたような声も聞こえる。

俺の話題？

自嘲気味な葛葉の言葉がその後から続く。

「朝から、切なそうな顔であいつを見てたから……」

「そ、そんなことないよ」

「あいつはおれと違って、すげえ格好いいもんね」

「何言ってるの！」

葛葉君だって格好いいよ」

月華、冗談でも俺の前で他の男を褒めるなよ。

俺がこんなところにいるなんて微塵も思っていないだろう。月華の反応に、舌打ちしたい気分になってきた。

「でも、宿世は辞めたほうがいいよ。

絶対 月華ちゃんが傷付くから」

葛葉の言葉に身体が強張った。

体の末端部分から徐々に、血の気が引くのを感じる。

葛葉、お前　　月華に何を吹き込むつもりだ？

暑さが原因でない汗が、身体中から噴出すような、不快感が全身を襲う。

カタカタと小刻みに震え出した身体を、これ以上震えないように両手で包んだ。

蝉が煩く鳴いているはずなのに、その音すら耳に届かない。

聞こえるのは、葛葉のどこか冷めた静かな声音と　　月華の息を呑む音だけ。

落ち着け　　、落ち着け　　。

念じるように自分の心に言い聞かす。

自分を抱く腕に力を込め、両の腕を痛いくらいに手の平で握り締めた。

「あいつは、酷いやツだから……。」

今では、凄いマジメな優等生してるけど、昔凄い荒れてて荒んだ目をしてた……。

いつも違う女を連れてて、権力振りかざして……平気で人を傷つけていた」

1つとして否定出来ない俺の過去。

俺の口から月華に語る前に、葛葉は零すようにポツリポツリと話し始めた。

心を覆う暗雲が、闇となって俺に襲いかかってきた。

「やめてっ」

月華の声が頭の奥から響いてくる。

それが本人が言った言葉だと分かるのに、数秒の時間を要した。

「っ、騙されないでよ、あいつは……」

「騙されてなんてないもんっ。」

「騙されてたって、関係ないっ」

「月華ちゃん？」

嗚咽を含んだ月華に、葛葉は怯んでその顔を凝視する。

「……虎狼が」

月華は涙を零しながら、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

「虎狼の昔なんて 知らない。」

でも、虎狼があたしたちと 離れて、いい思いしなかったのなんて、今の虎狼の顔を、見てればわかる……」

ポタポタと制服のスカートに雫が落ちる音が鮮明に聞こえてきた。

「虎狼のっ、辛さも知らないくせに、何にも知らない貴方がそんなこと言わないで！」

確かにあたしは、虎狼が好きで、虎狼にとつたら遊びかも知れないけど。。

でも、あたしの思いまでそんな風に言うことないでしょう?」

月華。。

我慢出来ずに、俺は月華へと駆け出していた。

鼻腔を擽る月華の匂い。

確かな体温。。

響いてくる鼓動と、驚いたことで一瞬だけ止まった呼吸。

背中から思い切り抱き締めて、その小さな身体を包み込むと、

「虎狼お」

顔も見えていないはずなのに、月華の俺を呼ぶ声が耳に響いた。

「もう泣かなくていいよ、月華」

抱き締める腕に、月華の振るえる手が置かれる。

ああ、こんなにも不安にさせていたんだ。

こんなにも俺を想ってくれていたんだ。

俺だけを、想ってくれていたんだね。

「また、泣かせちゃった。」

俺、何回月之丞に殴られるんだろう」

自嘲を含んだ笑みを、月華の耳元で零す。

月華が俺に振り向いた。

その澄んだ瞳には、沢山の涙が滲んでいて。

俺を想って零したその雫を全て吸い取りたくなるほど、愛しかった。

「バレたら 困るんじゃないの？」

「うん、 困る」

震える声に頷く。

「月華が 傷付くから」

「 あたしが？」

月華の問いに答えないうまま、柔らかな頬に唇を寄せた。

軽いキスをしてから、涙の筋がいくつもついたその頬に自らの頬をつける。

「好きだよ」

月華にしか聞こえないように囁けば、吹き零れたように涙が後から後から流れ出して、涙腺が決壊したように止まらなくなってしまう。

ベンチを跨いで月華の隣に座り、そのまま胸に引き寄せる。

ポケットからハンカチを出して、月華に差し出すと、彼女は両手でそれを受け取って顔に押し付けた。

しゃくりあげる月華の髪を撫でながら、何も言わずに俺を睨む葛葉を静かに見つめた。

「なあ、葛葉」

俺の声に、睨む眼差しに力が増す。

その視線を正面から受け止めながら、気持ちを葛葉に伝えていく。

「俺たち、付き合ってるんだ。」

少なくとも俺は、今回ばかりは真剣なんだ。」

「また、月華ちゃんを騙して。」

また、という言葉が引つかかったが、首を振って否定する。

「違う」

そう、騙してなんかいない。

「あの頃の俺を知るお前には、信じて貰えないかも知れないけど…」

「すげえ好きなんだ、昔から。」

「月華だけが、好きなんだ。」

月華が俺の腕の中で、赤くなった瞳のままの顔を上げた。

ずっと鼻水を啜る仕草すら愛しく映る。

「お前は、月華のコトが、本当に好きなんだよな。」

「いや、昔から好きだったよな？葛葉……じゃなくて、正木」

正木？

と月華がその苗字に反応を示した。

それから口の中で、ヤツのフルネームを反芻する。

「正木浩輔　って、めがねのまさくん？」

保育園で一緒だった、あの？

と呟いた月華の涙は驚き過ぎて止まったようだった。

「凄い変わったね？」

そりゃあ、整形したからね。

確か親が美容整形の医者で、事故で変形した顔を治す際に手を加えたんだと、記憶している。

「気が付いてたのか？」

「うん、何となく。」

月華を好きだったって思い出したのは、今だけど。

多分、月華の手前だから月之丞も言わなかっただろうけど、もしかしたらあいつも分かってたかもね」

月華がああの時の『まさくん』だと知ったら、どんな感情を持つかわからない。

きつともつと深く傷つけていたかもしれない、と月之丞は考えたかもしれない。

それなら、月華には知られない方がいい。

月華に甘い月之丞はそう思うだろうし、コイツの傷だってきつと期待するよりは浅くて済む。

「お兄ちゃんも？」

「あいつ、勘で生きてる生き物だろ？」

「あたし、全然分からなかった」

月華を見る眼差しが酷く寂しそうな葛葉は、小さく呟いた。

「だって月華ちゃんは、昔から宿世しか見てなかったじゃないか」

「おれは 教室に入ってきた瞬間に月華ちゃんだって分かったのに。」

月華ちゃんは最後まで分かってくれなかったね」

「うっ、うっ　ごめんなさい」

申し訳なさそうに月華は葛葉に頭を下げた。

「おれ、中等部からここに入ってきた。」

すっかり変わってしまった宿世を見て驚いたんだ。

でも、別に宿世のすることなんて関係ないって思ってた、すつとね」

「…」

月華は葛葉の独白にただ聞き入る。

「でも、宿世が……。」

あの時のことを何にも知らない月華ちゃんをまた他の女と同じように傷つけるかもって思ったら、じっとしてられなかった」

腕の中の月華が、葛葉から俺に視線を移した。

柔らかな肢体を抱く力を強めて、誓うように言った。

「傷つけないよ、絶対。」

約束する

絶対何があっても、月華は離さない。

「お前、むかつく。」

いつつもそうやって後から月華ちゃんを攫ってくんだ。

保育園の時だって、先に好きになったのはおれの方だったのに

「

「まさくん……」

「　　」
「ごめん」

謝った俺に、葛葉は目を見開いてから、小さく笑った。

「もう、いいよ。」

月華ちゃんも、ずっとお前しか見てないみたいだし。
それに……」

暗かった葛葉の瞳に、朝日を浴びたような光が差す。

「お前がおれのこと分かってたって知って、
少しだけ嬉しかったから」

照れくさそうにそう言って、慌てたように弁当をしまい、ベンチから立ち上がった。

「それでも泣かせたり傷つけたら後ろから奪ってやるからな。
覚悟しとけよ?」

「絶対月華は離さないよ」

葛葉は、微かに眉を上げて

「先に戻るわ」

と俺たちに背を向けた。

*

第11話(前書き)

数日間、時間が空いてしまいました。

(´・`・´)しょんぼり。

第11話

ベンチから隠れていた木陰に移動して、木の幹に身体を預けた。

胸にまだ目の赤い月華を抱き締めて、首筋に顔を埋める。

月華の手のひらが優しく俺の髪を撫で、その感覚が堪らなく気持ち良かった。

「月華？」

「うん？」

顔を伏せたまま静かに名前を呼ぶと、撫でる手付きと同じくらいの優しさで返事してくれる。

外はうだるような暑さだというのに、俺の体温を拒絶する素振りもない彼女の身体をさらに抱き締めた。

蝉の鳴き声も先程よりは強く聞こえてくる。

自分の物を感じる感覚がだんだんと正常になることに安堵しながら、

「今日の夜、俺の家に来ない？」

彼女を誘った。

確かに犯した過ちならば、他人に話されるより、自分で話したい。

たとえ 幻滅されたとしても、過去を積み重ねての俺だから。

「虎狼の お家？」

俺の顔を覗きこんできた彼女に首肯した。

「ちゃんと 話すから」

「 うん」

彼女の返事を聞きながら、5限の始まる予鈴がなるまで彼女を離さずにいた。

こんな日でも生徒会はある。

生徒会室に足を踏み入れると、ニヤニヤとした表情の弥生が俺を待っていた。

嫌な予感がする。

「見たわよ」

「何を？」

挨拶もない弥生の不躰な科白にため息混じりの返事を返すと、彼女は俺に歩み寄り囁いた。

「三角関係」

「三角関係？」

まだ弥生しか生徒会室にいらなくて良かった。

他のメンバーがいたら、間違いなく質問攻めになっていたところだった。

三角関係でいざいざがあったことに違いはないが、白を切り通してみる。

「何のこと？」

「校庭、昼休み、泣いている女の子、必死の会長」

「……」

指を折りながら今日の騒動に関わる単語を並べ始めた。

その様を眉を寄せて睨んでいると、さも楽しそうに口角を吊り上げる。

「今日、屋上で趣味のバードウォッチングしてたら、たまたま見つけちゃった」

確かに緑が多いせいで、広大な敷地には様々な鳥が飛来するが、いらん趣味だな。

今度からそこに覗きを増やしたらどうだ？

「……そんなに覗まないでよ。」

たまたま見たことない美少女がいるって夢中になってたら、会長が乱入しただけなんだから」

「 …… バードウォッチングじゃなかったのか? 」

「 美少女を見るのも趣味よ? 」

目の保養に」

長い髪を掻き上げ、微笑む弥生のいけない裏の顔を見た思いがした。

「 …… 美味しそうな女の子だったわね 」

舌舐めずりした弥生に月華を会わせないようにしよう。

そう決心したのは言うまでもない 。

「 そんなことより、文化部系の予算案は出来てるのか? 」

月華に会わせるとの押し問答から話の矛先を変えたくて、自分の席に戻りながら話題をすり替えた。

話を逸らしたわね、とブツブツと呟きながらも、マジメな弥生は厚い紙の束を俺に差し出す。

「計算は会計の2人が確認してくれたから、間違っではないと思うわ」

「ありがとう」

紙を捲り、数字の羅列をパラパラと眺める。

俺は3度の飯より数字が好きだと豪語する、2人の会計よりも数字が得意ではない。

湧き上がる嫌気を堪えながら、今年の聖徳祭には大体どのくらいの費用が必要なのかを頭の中で組み立てた。

今回の聖徳祭は去年より盛大に行いたい。

これから生徒会メンバーで会議をして、文化系だけでも纏めなければいけない。

次回の部長会議の時にはこの成否を判断し、職員会議に出さないと予算が降りないのだ。

「じゃあ、次は運動部系の予算を纏めてくれるか？」

2日後には上げて欲しいんだけど。 ……土日以降月曜日までに上がってればいいかな。

月曜以降に部長会議をする予定だから」

「畏まりました。

それで、いつ彼女を紹介してくれるの？」

「しつこい。
絶対しない」

その内覗きに行くから、と嘆息して弥生は自分の席に戻った。

違う意味で悪寒を覚えた生徒会を早めに終わらせ、買い物をして家の近くに差し掛かると、門の前に私服姿の月華が立っていた。

何だかさっぱりしてるから、既に風呂でも済ませてきたのかもしれない。

僅かに暮れ始めている西の空に向かって歩きながら、少し歩調を速めた。

いかにも緊張してます、といった表情は、何故か俺の中にある緊張を解いていく。

そんな彼女に辿り着いて声を掛ける。

「月華、早かったね」

「あ、虎狼。お帰りなさい！
あたしも今来たところなんだよ」

緊張してチャイムが押せなかったと、肩を竦めて小さく舌を出す。

俺はそんなことよりも、月華が何気なく言った『お帰りなさい』
が嬉しくて、その柔らかな頬に軽いキスを落とす。

「ただいま、月華」

照れる彼女の手を引いて、玄関へと導いた。

迎えてくれる言葉なんて、今まで縁遠かった。

ここ何年も、俺を中に吸い込まれるように導いてくれるそんな温
かな言葉は聞いたことがない。

数年振りに聞いた挨拶。

それが月華から聞けるなんて、思いもしなかった。

普通の人にとっては当たり前なその挨拶をすんなりと与えてくれ
るその優しさに、月華への愛しさが募る。

この温かさを手放したくなくて、躊躇する気持ちも芽生えたけれ
ど。

ずっとこれが続くように。

俺を大切に思ってくれている、月華を信じてみよう。

重厚なはずのドアの閉まる音が、何だか軽く聞こえた。

「あのね、ケーキ買って来たんだよ」

リビングに入るなり、彼女は白い箱を差し出した。

箱の横には以前俺と行ったケーキ屋のロゴが入っている。

「気を使わなくて良かったのに」

「だって、虎狼と食べたかったんだもん」

部屋に鞆を置きにいく気にもならなかった俺は、食卓の椅子を引いて鞆を邪魔にならないように収めながら、テーブルの上に箱を置いた彼女を見た。

Tシャツにチノパンという、先日とは打って変わったカジュアルな格好をした月華は、俺の前まで歩いてきた。

「冷蔵庫に入れてもいい？」

「ご飯終わったらデザートに食べよ?」

「うん、その真ん中にいれといてくれればいいよ」

冷蔵庫にケーキを入れた彼女は、きよろきよろとリビングを見渡した。

「虎狼の家族の人数を聞くの忘れたから、ロールケーキにしてきたけど、大丈夫だった?」

「え、うん。」

「家族は一緒に住んでないけど?」

えっと呟いて、目を丸くする彼女に話してないことを思い出した。

誰もいないことが当たり前になっていたけど、月華は俺が親に迎えにこられたことを知っている。

今までは夕方には帰っていたし、一昨日の休校日も平日で、働いていれば普通は家族は家にいない時間だった。

「家族がいないって?」

「親父はNYにいるよ。」

「俺よりも月華の両親の方が距離は近いかな」

世界に進出してゐる企業の総帥として、親父の拠点は日本ではなかった。

じいちゃんの時代はそれでも日本から出ていなかったけど、世代が代われれば世界の情勢も変わっている。

「こんなに大きなお家に一人なの？」

月華の肩を抱き寄せながら頷くと、俺の胸元に顔を寄せて、下から見上げてきた。

「一人ぼっちは寂しくなかった？」

「中学に上がる直前までは、……お手伝いさんがいてくれたし、そんなに寂しいと思うこともなかったよ」

「今は？」

今？

腕の中の月華の額に自分の額を付ける。

心配そうな瞳を見つめ返ししながら、その優しさに心が温かくなる。

きつと、自分に置き換えて考えてるんだろうな。

月華程、1人という環境に慣れていない人間も少なそうだけど、その痛みを感じ取ろうとする優しさに頬が弛む。

「寂しかったけど、今はこうして月華がいてくれるから、大丈夫だよ」

そう言つと、月華の頬がピンクに染め上がる。

「うん、傍にいますよ」

小さく頷いた月華の頬に口付けすると、俺に巻かれた腕に少し力が入った。

何だかんだと材料を買ってはみたものの、食事を作る気にはなれず、今日届いた新聞に入っていた広告を広げた。

食材を冷蔵庫に入れたついでに、ダイニングのテーブルの上で食べるものを考えていたのだ。

「月華、食事まだだよね？」

「ピザでいい？」

リビングのソファに座っている月華に声を掛けると、こくこくと頷く。(うちはダイニングとリビングが繋がっている)

何だか顔が輝いて見えるのは気のせいだろうか。

「あたし、ピザ好き」

お茶と一緒にチラシを持って行くと、覗き込んだ瞳がキラキラと輝く。

そうか、それは良かった。

月華が食べたそうに目で追っているものを選んで注文することにした。

特に好き嫌いのない俺は、月華が喜ぶ顔が見ればなんでもいい。

そう思って、写真を指差し注文するものを確認すると

「どうして食べたいものがわかったの？」

まるで超能力？とも言いたげな尊敬の眼差しが返ってきた。

ホント、可愛いやつ。

「超能力でも何でもなし。
月華を見てるだけだよ？」

苦笑いしながらそう答えると

「ずっと、見てて？」

月華が仔犬を思わせる瞳で俺を見上げてきた。

月華が俺を嫌わないでいてくれるのなら、ずっと傍にいるよ。

彼女の艶やかな髪を撫で、電話をするために立ち上がった。

ピザを注文し終わるとキッチンに立って、サラダだけ作ることにした。

手伝おうとしてくれる月華に、皿やグラスなどを運ぶのを頼んで、1人黙々と作業をする。

「ダイニングテーブルじゃなくて、そっちのソファアのガラスのテーブルの上に置いて？」

向かい合わせにテーブルに皿を置いていた月華に声を掛けると、彼女は不思議そうな顔をしながらも頷いた。

出来るならば、離れた距離で話をするよりも、温もりを感じられるくらいの距離で話をしたかった。

近距離だけに拒絶されたときのその辛さは計り知れないだろうけど、それでも月華のその感情全てを見逃したくない。

サラダを作り終え、テーブルに並べた頃には、ピザが届いた。

彼女をソファアではなく、その下の絨毯に座るように促す。

月華と肩が触れるくらいの距離に座ってから、ピザの蓋を開けた。

「わぁ、いい匂いつ。

美味しそう！」

満面の笑顔の月華が、嬉しそうに胸の前で両手を合わせる。

「どうぞ、何もないけど召し上がれ」

月華のグラスと一緒に頼んでいたドリンクを注ぐと、

「虎狼も一緒に食べよ？」

はいっ、と皿に載せたピザが差し出された。

いい匂いが空腹中枢を刺激して、胃が動くような感覚を覚える。

昼も抜いた状態で空腹なはずだった俺の腹は、芳しい匂いでその働きを取り戻したようだった。

「そっいえば、お腹空いたかも」

ポツリと失念していたことを呟けば、月華は俺の胸に少し頭を寄せた。

俺がピザを口に運ぶのを確認すると、月華も安心したように微笑んでグラスに注いだオレンジジュースを飲んだ。

何も食べてないのを知っていたのかもしれない。

それからいただきますと手を合わせて、食べ始めた。

「美味しいね」

満面の笑みで俺に笑い掛ける。

とりあえず頷いて見せると、ますます笑顔が嬉しそうに輝いた。

「月華、食べるの好きだよな」

「好きな人と一緒に食べるご飯は、一番美味しいんだよ。
虎狼は楽しくないの？」

ピザを両手で持った彼女は、どこか不安そうに首を傾けた。

月華に取り分けてもらったピースを全て飲み込んでから、自分の身体を彼女に向けた。

俺のどこか真剣な雰囲気にも呑まれたのか、食べ掛けの欠片を皿に戻し俺を見上げる。

口の端についたピザソースを拭ってやりながら、まだ湯気をたてるピザの箱を閉じた。

熱々を食べさせてやりたいし、作ってくれた人にも失礼に当たるけれど、どうも …… 味音痴になりそうなほど緊張をしているらしい。

あんなに話すことを躊躇っていたはずなのに、吐き出して楽になっ
てしまいたくて ……。

「 ……話を聞いてくれる? 」

時計の音さえ響くりビングで、月華の息を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

無言のまま首肯する彼女に尋ねた。

「 何から聞きたい? 」

話したいこと、話さなければいけないことは沢山あった。

でも、実際に月華を目の前になると何て言っているのか、何から伝えればいいのか、頭が真っ白になって判断が付かなくなる。

「 聞きたいこと、一杯あるよ! 」

楓先輩のことだってよく分からないまんまだし、葛葉君の言っていたことだって聞きたいし 「

そこまで捲し立てるように言った後、言葉を止めて、窺うように俺の顔を見つめた。

「でも、虎狼が大丈夫になるまで待つよ。無理しないでも、いいんだよ?」

優しい言葉、優しい月華。

待って傷つくことが増えるのは、誰でもない。月華なのに。

こんなときまで、俺中心で考えてくれるんだね。

「俺は……聞いて欲しい。」

嫌な思いするかもしれないけど、聞いてくれる?」

「うん、聴く。」

月華は顔を上げ、真正面から俺を見た。

どこから話そうか。

思索しながら、今の事態を作り上げた中等部あたりの話からすることにした。

「とりあえず、中等部の頃から話そうか。」

俺の意識は数年前の、暗い過去へと遡る。

目に焼きついたように思い出せるその残像に震えそうになる手の平を、爪を立てるくらいに握り締めながら、紡ぐ言葉を探した。

それでも、感情的にならないように、出来るだけ淡々と情景を声に変える。

「中等に上がる前に、

逆レイプされたんだよね」

「逆レイプ？」

耳馴染みのない言葉だったからか、月華は少しだけ首をかしげた。

それからすぐその意味を理解したのか、口元を手で覆う。

「それって」

「そう、犯罪。

相手は、さつき話した信頼してた お手伝いさん。

媚薬みたいなクスリを飲まされて、さ。

当時はそんなものが本当に存在するなんて知らなくて、驚いたもんだっただけど」

燃えるように熱くなった身体も、何も考えられなくなった思考回路も、それでも重ねた温もりも、また全て覚えている。

思い出すだけで、虫唾が走るような、何ともいえない不快な感覚に襲われる。

それでも、確かに感じた生まれて初めての快樂は、俺を奈落の底へ突き落とす。

屈辱と後悔に入り混じった快樂は、一生忘れられないのではないか、と思わせるほど、俺の奥深くに染み込んだ。

「もう、頭がおかしくなりそうだった。

親父に言って、辞めさせただけ……」

一度言葉を切って、俯いていた顔を月華に戻す。

案の定、月華はもう泣きそうな顔をしていた。

「……こんな話、聞きたくない？」

力なく笑う俺に、ぶんぶんと首を振ることで否定を示す。

月華の優しさに甘えて、吐き出したい過去をもう一度紡ぎ出した。

「自分が、身体が、全て真っ黒に汚れた気がして　。」

もう自暴自棄みたいになった。

それでも、1度覚えた快樂が、纏わり付いたみたいに忘れられなくて、嘘でも重ねられた温かさを捨てられなくて

肩書きについてくる、中身のない女を乞われるままに抱いて

それが当たり前になっていた。

「他校の奴らとつるんで、気にいらなきゃ物を壊して、人に暴力を振るった。

でも、理事長の孫だって分かってる俺に、教師は何も言わなかった」

遠巻きに見ている冷たい目。

事なかれ主義と保身、無関心。

「俺が何をしても、何も言われない。

じいちゃんですら、何も言わなかった。

気が狂いそうだったよ、…母さんみたいに」

母親、という2文字と同時に浮かび上がってくる、記憶の始まりの虐待。

泣き叫ぶことすら許されなかった暗い過去は、今でもとぐるを巻

く蛇のように、絡み付いて離れることはない。

あの頃の景色は、思春期という多感だったあの頃と同じように、全て色彩を喪失し、灰色に染まっていた。

時期は違っけれど、同じ箇所を抉るような2つの記憶は、今でも俺を悪夢となつて襲い続ける。

それは 俺から、人を信じる心を奪っていった。

「楓はそのときの、彼女っていうか、セフレの1人。

飽きたら切つて、また言い寄ってくるヤツを適当に選んで、その繰り返し。

くだらない恋愛ごっこ にもなっていないな、ごっこもどきをしていたんだ」

ただ、俺が性欲を満たすための女達。

くだらない見返りを求めて開かれる身体を、まるで玩具のように扱った。

一瞬の快樂だけ与えてくれればそれでいい。

お返しに、相応の快樂だけ残してやる。

「なのに、俺と関係を持った女が、いらぬ嫉妬を受けていじ

めの対象になっていく。

俺のせいで 皆おかしくなっていったんだ」

自分よがりの快楽に、欲と感情がごちゃ混ぜになっていく様は、本当に異様な光景で。

殺伐とした毎日が、薄紙を重ねるように脆く積み重なっていった。

生きることすら、意味を見出せなくなっていき。

息の詰まるような現実と、
穢れてしまった自分を恨んでは

小さな幻想のような月華を想い、あがくことすら出来ない泥沼の自分を嘆いては、吐くことより苦しい嗚咽を漏らしていた。

「 誰が ……」

月華の声が、俺の会話の空白域に溶け込む。

白い手の平が、俺の手の甲に重なった。

「 誰が虎狼を救ったの？」

出会ったときには、もう、笑ってたよね？」

月華の手の平に、自分の指を絡める。

彼女の柔らかな手の平が、強く強く俺の手を握り締めた。

もう零れそうな涙を必死に堪えながら、月華は茶色い瞳を俺に向けてたまま、離そうとはしなかった。

「道也が…」

「道也君？」

月華の反芻に頷いて、続ける。

「道也が、中等部の途中で 特待生として転校してきたんだ」

始めは気に入らなかった、屈託のない笑顔。

確かに誰かに愛され、大切にされてきたその笑顔を受け入れることは出来なくて。

それでもまるで全てを照らすような太陽のような笑顔は、俺を暗闇から救い出してくれた。

「あいつ、俺のことを知らなかったせいもあるんだけど。
俺を普通に扱ったんだ」

「…普通？」

「そう、普通」

同じ視線で、俺を見た。

「始めは、すっげえむかついたし、喧嘩も一杯したけど。
大っ嫌いだったはずなのに」

いつの間にか、すんなりと心に染み込んでいた、その温かな存在。

「あいつだけは、俺のためだけに泣いてくれた」

繋いでいない方の手を伸ばして月華の頬に触れる。

俺の手は、月華に拒絶されることなく、その流れ始めた涙を拭う
ことが出来た。

俺のためだけに、泣いてくれるのは 道也だけじゃない。

愛しい月華を抱き寄せると、俺の胸の中で綺麗な涙を流す。

「それから、自暴自棄になることも無くなって、女とも一切の関係を切って。

荒れることも無くなった。

でも、道也以外信用はまだ出来なくて、見掛け穏やかになった俺に寄って来る奴らと距離を置いた」

葛葉は、荒れたころの俺のこともよく知っている。

あんな扱いを月華にもするんじゃないかって、心配になっていたのだろう。

今思えば、本当に最低な男だった。

それでも、道也という親友を得た俺は、自分でも驚くほど安定した。

月華の震える肩に顎を乗せ、ポツリと苦笑混じりに呟いた。

「また、泣かせちゃった」

止まらない涙。

やまない嗚咽。

腕の中の月華は、俺のカッターシャツを握り締めたまま、小さく

小さく呟いた。

「虎狼に会ってから、毎日、泣いてる。
こんなに、泣き虫じゃ、無かったのに……」

嘘。

俺の記憶の中の月華はよく泣いてたよ。

でも、半分は俺を想ったの涙だったよね？

今でもこうして寄り添ってくれることに、安堵の溜息が漏れた。

月華の背中を撫でながら、テーブルを見て謝る。

「ごめん、ピザ冷めちゃったね」

小さく何度も頭を振る月華の髪をそつと撫でた。

「ううん、大丈夫」

ぐすつと鼻を噉って、泣き腫らした顔を上げる。

なんて、愛しい。

「聞いてくれてありがとう」

「話してくれて、ありがとう」

言いながら顔を歪ます。

どうやら笑うことに失敗したらしい。

俺は彼女の顎を持ち上げて、その桃色の唇に口付けをした。

なかなか泣き止まない月華の背中を軽く叩きながら、俺に預けてくる体重以上の安心を味わっていた。

溶けるような月華の温もりは、俺の冷え切った肉体に染み込んでいくようで、心地いい。

過去を吐き出したことで、月華を受け入れ切れなかった俺の心が、彼女の全てを受け入れ出したのだと気がついた。

愛しい、という気持ちが洪水のようにあふれ出してくる。

あのときの道也のように、月華もまた俺を受け入れてくれた。

同じように、泣いてくれた。

話した後も、こうして俺から距離を置こうとしない優しさが、言葉に出来ないくらいに嬉しい。

「ほら、いい加減泣き止んで?」

「む、無理い ……」

ますますぎゅつと抱き締めてくるところが、堪らなく可愛い。

月華を好きになって、

またこうして出会えて本当に良かった。

少しだけ、また、救われた。

*

第12話(前書き)

新年明けましておめでとございませう。

今年も宜しくお願いいたします。(* . . . ()) . . . * . . .

・
(遅い

第12話

「しくじった」

速攻で風呂から上がってきた俺は、呆然と呟いた。

僅か10分前にお客様用歯ブラシを渡したはずの月華が、気持ち良さそうにソファで寝ている。

あれからしばらくして眠そうに目を擦りだした月華。

このままだと寮に戻っても歯磨きもしないで眠りそうだと、全く余計な老婆心を起こした俺は、洗面所から歯ブラシと歯みがき粉を持ってきて、彼女に手渡した。

昔から眠気に極端に弱い月華を立たせ、シンクの前に連れていき、プラスチックのコップに水を注いだ。

「月華、歯を磨いて待ってて。」

速攻風呂入ってから送っていくから」

「うん」

眠そうに首肯する月華が歯ブラシを口に含んだ姿を確認してから、二階へ着替えを取りに行き、未だかつてないスピードで風呂に入っ

た。

月華ではないが、俺も何だか疲弊していて、送り届けてからでは、ビンビンに張り詰めていた気が抜けてしまつて風呂に入る余裕がなさそうだった。

この季節に風呂に入らないなんてあり得ない。

しかも今日は校庭を走り回ったり、冷や汗を存分にかいたり、風呂は間違いないく欠かせない日だ。

そのため我が儘ではあるが、少しだけ彼女に待っていて貰うつもりだったのに。

髪も乾かさずリビングに戻った俺を待っていたのは、ソファーに寝転んで寝息を立てる月華と、水が空っぽになったカップと使用された形跡のある歯ブラシだった。

どうしよう。

迷った俺は何故か、自分の歯ブラシを持ってきて寝息を立てる月華の前で歯を磨く。

もしかしたら、何かの拍子に起きてくれるかもしれない。

そんな甘い期待は、俺の歯磨きが終わり、髪を乾かしリビングに戻る迄に叶うことはなかった。

「月華、起きて?」

テーブルの位置を少しずらし、月華の前に座り込んだ。

警戒心なんて微塵も感じさせないその可愛い寝顔を見ていると、このまま寝せてやりたくなってくる。

いや、ダメだ。起こさなくては。

まだ9時半、高校生の活動許可範囲内だ。

「月華、ほら、起きなつて」

「ん……………」

弾力のある頬を突くと、俺の指を柔らかな手の平が払う……………ではなく握る。

その子供のような体温と、思いもしなかった動作に心臓が鳴った。

って、可愛すぎだろ、反応が。

思わず頬に手の平を乗せると、俺の手の甲に自分の手を乗せ、まるで猫みたいに擦り寄る。

「……………おぶつていくかな」

このままでは俺の理性が危ない。

無理やり起き上がらせると、うーんと呟きながら瞳を開いた。

良かった、起きた。

と安心したのも束の間、俺を見てにっこりと笑ったかと思うと、

「虎狼、好きい」

いきなり抱きついてキスをしてきた。

想像もしていなかった行動とのしかかってきた体重に、思わず後方に倒れこむと、僅かに動かしていたテーブルに肩を強打した。

「いつ?!」

月華からの突発的なキスに喜んでいいのか、肩を強打したことに悲しんでいいのか、全く分からない。

とりあえず。

俺の胸で再び寝息をたてている月華が寝呆けていたことだけは、良くわかった。

…当分起きそうもない。

月華を抱き上げ、リビングのエアコンと電気を消した。

筋肉が弛んでいつもより重く感じる彼女を落とさないようにと注意しながら、階段を用心深く登る。

腕でドアノブを下ろしドアを押し開け、自分のベッドに月華を寝かせた。

電気も付けないまま、僅かに差す月明かりだけを頼りに、照らされる彼女の顔を眺める。

「無邪気な顔しちゃって …」

嘆息混じりに呟いて、エアコンを操作しながら、何となく隣に寝転び、2人の身体にタオルケットを掛けてみる。

月華の頭の下に左腕を差し入れて、その温かな肢体を右手で引き寄せた。

「 …」

俺、一緒に寝るつもりなんだ。

今更ながら、自分の行動に伴わずにいた意思を再確認してしまう。
女を家に誘ったのも、まして部屋に入れたのも、こうして一緒に眠るのも初めてで。

全て月華なら何の抵抗もないことが、少しだけ自分でも可笑しかった。

シャンプーの花の香りがする髪にキスを落とすと、それがわかったように俺に擦り寄る。

本当、どこまで可愛いんだか。

枕元にある時計で時間を確認するとまだ10時前で、まるで小学生の就寝時間だな、と苦笑した。

それでも枕に頭を落とし、確かな疲労感に目を閉じる。

静かな吐息と懐かしい温もりに包まれながら、

「 ……おやすみ、月華」

ゆっくりと意識を手放した。

）

「……」

折角手放した意識が携帯のメロディに拠って呼び起こされる。

月華を起こさないように、そつとベッドから起き上がって、机の上においておいた携帯の相手を確認する。

「叔母さん？」

叔母はこの学校の寮の管理責任者だ。

広大な敷地にある無数の寮にはそれぞれ寮母がいて、その中の責任者をしている。

大きな家があるというのに、今では娘も手を離れたという理由から、小さな寮母室に寝泊りしていた。

その叔母からこんな時間に連絡なんて珍しいな。

そう思いながら電話に出る。

「もしもし？」

『あ、虎狼！ごめんね、寝てた？』

「んー、寝てたけど大丈夫。

それより珍しいね、電話くれるなんて。どうしたの？」

自分の机の椅子を引いて、起きたばかりの重い身体を預けた。

中途半端に眠ったせいかな、身体が変にだるい。

時間は確認していないが、11時は過ぎたのではないだろうか。

『それが、女の子が1人まだ戻って来なくって』

「女の子？」

叔母さんは俺の女遊びの酷かった時期を知っている。

まさか俺が一緒だと思ってるんじゃないだろうな。

と不信感を抱きながら、ベッドを見ると……確かに戻ってこない女の子が1人、俺のベッドで寝息を立てていた。

まさか。

『四聖月華ちゃんて、あなたのクラスじゃなかった？
ね、生徒会長？』

予感は的中だ。

「あ、ごめん。」

今 俺の部屋で寝てる」

すっかり連絡するのを忘れていた。

10時までには月華を寮に帰すつもりだったし、俺もそこまで頭が回らなかったのだ。

『…寝てる？』

あなたの部屋で？』

「疲れて安眠中って、手は出してないけどね」

余計な誤解を招かないように、言われる前に釘を刺す。

…その内そうなるだろうなという（希望的）展望と、そうなりたいという男として至極健全な願望を胸に収めながら。

しかし、叔母が驚いたのはその箇所ではなかった。

『…虎狼の部屋で?』

「俺の部屋で間違いはないけど、どうして?」

『ホテルじゃなくて?』

「…どうして月華をホテルに連れてくの?」

意味が分からん。

受話器の向こうで呆然としている彼女の真意がイマイチ理解出来なくて、嘆息混じりに言葉を返した。

ついさっきまでそのことに驚いていたのは自分自身だということをすっかりと棚にあげたままで。

『月華ちゃんってやっぱりあの月華ちゃんなのね。』

あんたが部屋に連れ込むくらいだもん、そりゃそうよね』

…1人で何か納得してるし。

『昔から大好きだったけど、結局今も彼女が一番なのね。随分と女の子らしく、可愛くなってたものね』

「……………」

そして1人結論を導き出している。

全くその通りだったので言葉を挟まずにおいた。

月華が昔から特別なことも、彼女が好きなことも否定するつもりは毛頭ない。

幼い頃から拒絶される辛さを味わっている俺にとって、彼女が与えてくれた愛情は何より大切なものだったし、それを素直に受け入れることは当然なことだと思っていた。

何より自分から拒絶して、二度とその温かな彼女を失いたくはなかった。

『とにかく、無事で安心したわ。』

一度入寮の時に挨拶はしたけど、ちゃんと彼女として紹介しなさいよ』

まるで野次馬根性というか、叔母さん根性丸出しのその声音に、「紹介したくない」と言いそうになったのはしばらく誰にも言わないでおこう。

ところで、いつ彼女が『俺がずっと好きだった』月華だって分かったのだろう。

お休みと挨拶をして、携帯を閉じながら首を捻った。

「……ん」

小さな寝言と共にクイーンサイズのベッドで眠る月華が寝返りをうつ。

掛けていたタオルケットを胸に抱き締め始めた辺り、寝相も良くはなさそうだな。

苦笑しながらスプリングを利かせないように静かに月華を壁側に移動させ、さつきと同じように左腕を枕にさせ抱き締める。

胸元に大事そうに抱いたタオルケットを取り上げると、抱くものがなくて寂しくなったのか、俺に抱きついてきた。

彼女の手が俺の脇腹辺りのシャツの生地を握り締める。

タオルケットをお互いの身体に掛けながら、疑問が頭を通過する。

…本当に寝てるのだろうか。さつきから反応が可愛すぎるんだけど。

そつと顔を覗き込むも、やっぱり熟睡は変わらないみたいだ。

さつきの電話で起こしていない、との安心も束の間。

お互い抱き合う形になることで、ぴったりと隙間なく密着する柔

らかな身体が、更に距離を縮めた月華の香りが。
俺の脆い理性を積木を崩すように危なっかしく揺さぶり始める。

「……」

シュチュエーションを思う。

誰もいない家、自分のベッド、腕の中には愛しい彼女。

駄目だ、寝よう……。

暗闇に慣れた視界には、僅かばかりの月明かりにはつきりと映る
彼女。

今手を出したら、絶対嫌われる。鬼畜になるなよ、俺。

深呼吸して、自分に言い聞かせながら今度こそ深い眠りについた。

「うん……」

心地いい重さから開放されて寝返りを打つ。

軽くなった左腕を軽く擦りながら、覚醒を始めた頭で考えた。

……心地いい重さって何だ？

寝起きは良い方なので、起きた頭は段々と回り出して、昨夜のこ
とを思い出した。

「あたし……何でこんなところで寝てるの？」

疑問符をたつぷりと含みながらも、茫然と呟く月華の声がした。

……そりゃあ、不思議に思っても仕方ない。俺が勝手に運んでき
たのだから。

それから不意に月華の手が肩に置かれ、頬に柔らかな感触があっ
た。

もしかして、キスされた？

「月華？」

目を開いて首を後方に動かすと可愛い笑顔が視界に映る。

「おはよう、朝だよ」

そうだね。

でも、まだ起きたくはないな……。

「まだ寝る」

月華の手を引いてその身体を抱き締める。

彼女はすっぽりと、再び俺の腕の中に納まった。

「え？寝惚けてる？まだ眠い？」

寝惚けてもいないし、眠くもないよ。

でも、月華が勘違いしてくれているならそうしておこうかな。

あたふたと焦った様子を見せる月華を抱く腕に力をいれた。

今日は土曜日だし、このままもう少しだけこの『起きた瞬間から月華が居る幸せ』を味わっていたい。

この手を離したら、帰ってしまうかもしれない。

帰すくらいだったら、もう少しだけ月華を感じていたい。

「ちょっと……虎狼？」

戸惑った彼女の声を無視して、そつと本音を囁く。

「月華の抱き心地、気持ちいい」

柔らかな身体、懐かしい体温。

そして

「月華の匂い……安心する。

これも ……俺の」

記憶に残る月華の変わらない匂い。

彼女の首筋を顔を埋めて、鼻で髪を掻き分け、そこにキスを落としました。

ますます近くなった匂いに嬉しさが込み上げ、味わうように首を舐めた。

「ひゃあっ」

驚いたような声に笑みが込み上げる。

初々しい、全てに慣れていない彼女の反応が本当に嬉しい。

全部俺が初めて、なんだ。

「感じる？」

顔を上げて、呼吸の音さえ感じられる月華の顔を覗いた。

「……ばかあ」

顔、トマトみたいに真っ赤。

「月華、可愛い」

「やあ、離してっ。エッチ」

「絶対やだ」

腕の中で口を尖らせる月華を更に抱き締めて、その気持ちよさに瞳を閉じた。

……あれから本当に寝てしまったらしい。

明るい日差しを感じて瞼を開くと、あどけない月華の寝顔が目の前にあった。

もう少しでおでこがくつつきそうな至近距離。

恋人同士の距離。

顔に掛った髪をそつと除けて、さらさらと後ろに撫でていると、大きな茶色の瞳が姿を見せた。

「おはよ、月華」

「……ほえ？」

……それは挨拶じゃないよ、月華。

しばらく呆然とした表情を浮かべていたが、思いついたように声を上げた。

「虎狼、おはよ」

やっと俺を認識したらしい。

そういえば、寝つきは驚くほど良かったけど 寝起きは昔から
最高に悪かったよな。

月華の背中を何度か撫でてから、

「起きようか」

と促すと、1度首肯して起き上がった。

それから申し訳なさそうに俺に頭を下げる。

「昨日、寝ちやってごめんね」

「ううん、大丈夫」

風呂のために引き止めてしまったのだから、俺の責任だ。月華は
何も悪くない。

「寮 …… 大丈夫かなあ？」

不安げに呟いて、ゆっくりと彼女は顔を上げて俺を見つめた。

怒られるの嫌だな、とバカ素直に顔に書いてある。

「大丈夫、昨日説明しておいたから」

「説明？」

「虎狼が？」

不思議そうに首を傾げる。

それはそうか。月華は俺と叔母さんの関係を知らないんだ。

苦笑しながら、彼女に説明した。

「寮母の責任者は俺の叔母だから問題ないよ。

因みに叔母の寮の寮長は俺の従姉弟」

「そうなんだ」

「だから心配ない。安心していいから」

心底ホツとした月華の頬をそつと撫でる。

笑顔になった彼女に安堵しながら、次にあつたら絶対に冷やかされるであろうことを想像して、少しだけブルーになった。

月華が俺の右手の人指し指を柔らかく握った。

その手をゆっくり解いて、手の平を合わせ指を絡ませてみる。

月華の左手をそつと握ると、彼女の俺の手を握る力も強くなった。

恥かしそうに笑いながら、俯き加減で呟くように言う。

「……虎狼の隣で眠るの、久しぶりだね」

「うん」

月華、俺は頑張つて耐えたんだよ……。

なんてことは口に出せるはずもなく、ただ頷いた。

俺の苦労なんて微塵もしらない彼女は、頬をピンクに染めながら再び言葉を紡ぐ。

「虎狼のね……匂いが懐かしかった」

「……匂い？」

匂いが 懐かしい？

それはもしかして 。

「うん。虎狼の匂いを憶えてるなんておかしいって思うかもしれないんだけど、ね。」

あ、でも！今の虎狼がつけてる香水の香りも爽やかで好きだよ」

焦ったように付け足した言葉は右から左に通り過ぎていった。

俺の耳から離れないのは最初のフレーズ。

……俺の匂いも変わっていない？

常に付きまとっていた女の匂いも取れたのだろうか。

それより何より 月華も俺の匂いを憶えていてくれたのか？

驚きながら月華を見つめると、顔をさっきより真っ赤にして、シツを握り締めながら俯いていた。

ドクドクと心拍数が勝手に上がっていく。

月華の全てを憶えていたのは俺だけじゃなかった。

月華も俺のことを、こんなにも忘れないでいてくれたんだ。

俺の中で何かが弾けた。

それは我慢していた欲望だったのか、本能だったのか。

今にして思えばどちらも同じものだったけれど、まるで渡り鳥が上昇気流に乗るように、気持ちが高揚し出していた。

「もっ……、月華可愛すぎ」

本能が言葉となつて彼女に伝わったときには、既に月華を胸に抱え込んで、貪るようなキスを与えていた。

月華をベッドへ押し倒し、今まで施したことがないようなキスをする。

強く唇を押し当てたり、吸うようにして刺激を与えたり。

今まで月華にした、子供のように幼いものとは違う、荒々しいキスを降らせる。

「く……るしっ」

酸素を求めて月華が口を開く。

その隙間を唇を、舌でこじ開けて、口内に侵入を果たし、彼女の舌に絡めた。

「……んんっ……！」

少し苦しそうな声が漏れるが、気にする余裕もなく、欲しいままにキスを繰り返す。

彼女とする口付けはどこまでも甘く気持ち良い。

可愛らしいリップ音ではなく、過激な水音が室内に響く。

弱弱しい力で俺を拒絶しようとする胸元に両手が当たるが、離さないという意思を込めて片手で彼女の背中に手を回し、空いてる手で後頭部を抱えた。

距離を縮めるように、強く俺に寄せる。

満足するほどキスを重ねるうちに、彼女の手が肩に添えられる。

そのまま唇を離し、口元から流れるお互いの唾液を舐めとった。

苦しかったのか、荒い呼吸が漏れる月華の紅く染まった唇を惜しむように舐めて、舌を首筋に這わした。

月華を味わうように舐めたり、薄く跡を付けながらキスを繰り返す、彼女を抱いていた手を解き、服の上から胸に運んだ。

柔らかな感触を右手に感じた。

思い出の彼女の中にはなかったその弾力に、欲望という名の勝手な興奮は風船のようにいと簡単に膨れ上がる。

しかし。

その瞬間、ゴクリと息を呑む音と、月華の身体が強張ったのを感じ、正気に戻る。

お、俺……何を！

慌てて月華の胸から手を離し、首筋から唇を遠ざけた。

自分がしでかした失態に慙愧ちんきの念が後から後から湯水のように込み上げてきて、思わず顔を彼女から背けてしまった。

目を逸らしたところで、やらかした不始末の責任からは逃れることが出来るはずもない。

兎に角、謝らないと。

焦りからか、汗ばんだ手を握り締めてから。

ややあって、物言わぬ壁から視線を彼女に戻した。

月華は何故か、目一杯に涙を浮かべ、唇を噛み締めてこちらを見つめていた。

「月華、じ……」

「ごめん、と謝罪の言葉を言う前に、

「虎狼つ、ごめんなさいっ！」

彼女の声が俺を遮る。

……ごめんなさい？

どうして月華が謝るの？

月華は、何も悪くないのに。

悪いのは、全て我慢し切れなかった 自分だというのに……。

瞳目どうもくして注視すると、月華の日焼けを知らないような白い腕が伸びて、腕に絡み付いてきた。

そして、空気の子分子の中にも消え入りそうなか細い声で、彼女は囁いた。

その声と同じくらいの振動を思わせる微量さで、俺の腕に触れている月華の腕は、震えていた。

「嫌いにならないで」

一瞬、俺の頭の中は真っ白になった。

月華を嫌いになる？

混乱した頭では、涙で滲む月華の身体を包み込むことすら出来な
かった。

*

第12話（後書き）

最後に少し追記しました。（2 / 16）

すみません（．．．）入れ忘れてしまいました……。

大変申し訳ないです。

第13話(前書き)

12話、最後追加してすみませんでした。

一ヶ月ぶりの更新です。

こんなアホアホ作者ですいません(´・`・´)
(

第13話

「…………はあ…………」

重く深く、色に例えるならきつと黒い、何度目かも分からない溜息が漏れた。

もう馬鹿なことをしでかして自分の部屋にもいられなくて、誰も居ない無音のリビングで午前中からずっと頭を抱え込んでいる。

何をやらかしてるんだ、俺は。

欲望の赴くままに月華をベッドへと押し倒し、キスを繰り返して、胸まで触ってしまい、正気に戻ったまでは良かったが。

朝の長閑な雰囲気なんぞはどこかに吹っ飛ばされて、あれから俺たちの間には、何ともいえない空気が流れていた。

寮に戻るね、とそそくさと気まずそうな月華は家を出て行き、引き止める勇氣もなくそれを見送ったまま、今に至る。

その笑顔はどこか困惑を含んでいて、俺の後悔に拍車を掛けた。

起きたばっかりの月華を襲うとか　ありえないよな。

キスさえも慣れていないというのに、本人の了承も得ないままなんてことにならなくて良かった。

って、流石に最後までは止められただろうけど、本当に未遂で良かった……。。

「でも、離したくなかったな」

折角の土曜日なのに、隣には月華がない。

昨日の夜には確かにそこにいた温かな温もりと思い出し、伸ばした手は空を掴んだ。

月曜日には、何も無かったように笑ってくれるだろうか。

俺の隣に居てくれるだろうか。

不安だけが、雪のように降り積もっていく。

このままでは遭難しそうなほど、薄暗い気持ちで押し潰されそうだった。

やばい、落ちそう……。

1人は慣れているはずなのに、居た堪れなくなって、デニムから携帯を取り出していた。

『もしもーし?』

7コール程待つと、場違いに明るい声が受話器から聞こえた。

電話の向こうからは、部活をしているだろう生徒と思われる声が多数響いていた。

それだけで休日だということに活気あるグラウンドの情景が頭に浮かんでくる。

全国でも強豪のうちの陸上部がそろそろ部活を休みにすることもないことを知りつつ掛けたのだが、やはり悪かったかな？との気持ちも頭をもたげた。

「もしもし、道也？」

時間は14時を少し過ぎた程度。

昼休みもとうに終わったのだからこの時間に関わらず、道也は電話に出てくれた。

「ごめん。今、部活中？」

「んー、部活中だけど大丈夫だ。

顧問に虎狼からだって言ったら、出て構わないって許可貰ったから」

「そっか」

理事長の孫だから、という特別扱いは好きでは無かったが、今日
はなんだか助かった、という気さえした。

「なあ……、部活終わったら家来ないか？」

『虎狼の家？』

オレは構わないけど、梓と約束してるから梓と一緒にでもいい？』

梓は家に来たことがない。

俺が自分のプライベートな空間にあまり人を呼びたくないことを
知っている道也は、声を潜めて確認してきた。

きつと声が聞こえる範囲内に梓がいるのだろう。

梓が一緒でも構わない旨を伝えると、快い返事が返ってきた。

『オツケ、じゃあ、虎狼の家で飯を食う感じで行けばいいんだな？』

「うん、それでいいよ。」

何かリクエストはある？」

『肉が食べたいな』

「じゃあ、バーベキューでもすっか」

『お、いいね！』

月華ちゃんも呼べば？

梓がいるなら呼びやすいだろ？』

数時間前まで月華がここにいた、と知らない道也は呑気にそう言った。

……月華を、呼ぶ……かあ。

答に困ったことが分かったらしい道也は、訝しげな声を出した。

『月華ちゃんと何かあった？』

「ちょっと校舎の影まで歩いてくれる？」

『？』

『いいけど』

言ってしまったら絶対叫ぶ以上の反応をすると分かっているのだから、俺は人気がない場所を移動することを指示する。

部長という立場なのに、その場から離してしまうことは申し訳ないと思っただが、今を逃して梓が同席してる空間ではとても話せそうもない。

走ったのか、地面を蹴る音がかすかに聞こえ、生徒の声も遠くなる。

保留機能を使わない電話の向こうの音から、意識は勝手に校舎を思い出させた。

『お待たせ。』

んで、どうした？』

「 月華を襲った……」

『 はあ？』

案の定、大きな声が受話器から響いてきた。

すぐ傍で鐘が響くようにわんわんと怒鳴られて、耳が悲鳴をあげそうになる。

思わず携帯を顔から引き離し、道也の怒声が聞こえないことを確認してから、電話を耳元に戻す。

『 一体どうして？』

「 昨日、夜月華が家に泊まったんだ 」

昨夜月華に過去の話をしたこと、それから彼女が眠ってしまっ

たこと、一緒のベッドで寝たことを伝える。

「お前、ずっと好きだった子が無防備に寝てるのに、よく襲わなかったな。

晴天の霹靂を見た思いだ　　！！」

「ただ弱いな、俺の理性は。

突っ込みたくなかったが、手が早かったのも、理性の押さえが利かずに月華を怖がらせてしまったのも紛れもない事実で　　。

俺は道也の言葉に反抗することも出来ずに、黙っていることにした。

「それで、相談もしたいから……、ちょっと来て欲しいと思っ
て」

「梓はいない方がいいか？」

「いや、先約なんだから？」

梓には悪いけど、一緒に平気だから。
いざとなったら、怒られるかもしれないけど協力して欲しいし」

もし、避けられるようなことがあれば　　の話ではあるが。

協力者は1人でも多い方がありがたい。

『オーケー、分かった。』

多分7時前には行けると思うから』

「それまでに食えるように準備しておくな。」

電話はいらなからそのまま呼び鈴ならして」

『サンキュ、頼むな』

お礼を言いたいののはこっちだ。

梓にも謝らないといけないな。

そのことを含め、道也に礼を言おうと口を開いた瞬間

ピンポーン

と来客を告げるチャイムが鳴った。

「あ、ごめん、誰か来た」

『あ、虎狼。一個だけ』

「何？」

ソファから立ち上がり、玄関に向かいながら訊ねる。

『素直に、な？』

きちんと気持ちを話した方がいいぞ。

取り繕わなくなつて、彼女はちゃんと分かってくれるから。

おかしな格好つけは命取りだって肝に銘じておけよ』

？

何だいきなり。

今ここに月華が来る訳でもあるまいし。

これからどうしたらいいのかを、夜話そつと思っていたのに。

さっきまでの動揺で思考回路が正常に働いていない俺は、よくわからないまま頷いた。

「どういうこと？」

ま、でも話は。

うん、分かった」

『素直な虎狼もたまにはいいなあ。

じゃあ、また後でな！』

最後に余計な一言を付け加えて、電話は切られた。 本当に今の

は何だったんだ？

携帯の終話画面を見つめながら、インターフォンの受話器を取った。

「はい、どちらさまですか？」

『…月華です』

映し出された映像を見なかったことを、少しだけ後悔した。

想像もしなかった声と名前に、心臓が止まるかと思った。

そして道也の野生の勘は、月華の来訪を予感させていたんだ、と。

今更気が付いた。

今朝と変わらないカジュアルな格好をした、彼女を家に招きいれた。

昨日より少し大きめの鞆を持った月華をソファに座らせて、キッチンに足を向けようとすると、手をぎゅっと握られた。

月華の小さな手が、俺の指に絡みつく。

「虎狼、お茶より先にちよっと話を聞いて？」

いつの間にか、俺の手を握る手は2本に増えている。

まさか、別れを切り出されるのだろうか？

俺は 素直にそれを受け入れられるのだろうか。

いや、そんなの出来る訳がない。

昔の俺なら……。

いや月華以外なら、どんな女に何を言われようと問題はない。

寧ろ、昨日みたいな態度を取られたら、吐き捨てるように言い放つただろう。

「お前、いらない」

と。

今更ながら、傷付いたような顔を見せる女の顔を思い出してしま
う。

因果応報。俺も同じ思いをすることになるのだろうか。

真剣な眼差しに動揺しながらも、言われた通り彼女の隣に腰を下
ろす。

が、隙間を空けず座ることが憚られて、俺は温もりを感じられない距離を取っていた。

俺が座ったことを確認すると、1度ぎゅっと唇を噛んでから、月華は話し出した。

「あのね」

いつもは心地良い可愛い声の続きに、死刑宣告を受けるような気持ちで固唾を飲んで耳を傾けた。

「今日も一緒に居ても……いい？」

「…へ？」

月華から零れた言葉は、意外すぎるものだった。

間抜け声を挙げた俺は、直視出来ずにいた彼女の顔を正面から見つめる。

月華は少し頬を赤らめて、握っている俺の手に視線を下ろした。

俺もその視線を追って、絡まりあっている自分の彼女の手を仰視する。

「あのね、最後までは……まだ怖いけど。
嫌だった……訳じゃないの。」

「虎狼が呆れちゃうくらい、時間が掛かるかもしれないけど、
ちよつとずつ大丈夫になるから……」

「言いながら、上げたその瞳は、緊張しているせいか潤み始めてい
る。」

「やっぱり……虎狼じゃないと、ヤだから」

そこで月華はペコリと頭を下げた。

「これからも、宜しくお願いしますっ」

嫌われた訳じゃなかった。

怖いって思いながらも、こうして歩み寄ってくれてる。

この数時間の間に何があったのは分からないけど、月華に嫌わ
れていない、という事実だけで充分だった。

うつうつと揺れる、子犬のような円らな瞳を呆然と見つめている
と、不安そうに俯く。

「 やっぱり、こんなお子様みたいなの、やだ? 」

「 嫌な訳ない! 」

俺は呆然とした中にも、泉のように湧き上がってくる気持ちのまま、一気に距離を縮めて月華を抱き締めた。

小さく悲鳴をあげた彼女に顔を擦り寄らせて、気持ちを伝える。

「 お子様でもなんでも、月華なら構わないよ。

俺の方こそ、いきなり怖がらせてごめん…… 」

月華は腕の中で、何度も首を横に振る。

その懸命さが何だか可愛くて、安堵と一緒に少しだけ余裕が出てきた。

「 ゆっくり、慣れていって? 」

俺も月華を抱きたい 」

月華の頬が途端に真っ赤な色を付ける。

それはどんとんと温度を上げていって、俺が唇を寄せている耳ま

で朱色は進行してきた。

甘い言葉に照れている月華も可愛い……。

「 やっぱり、嫌？」

恥かしくてそむける顔を覗きこむ。

「 ヤじゃ ないっ！
虎狼が いい……」

懸命に否定する月華の瞳は必死で、その上擦ったような声に心が温かくなる。

何て甘美な科白なんだろう。

月華が、『俺』を求めてくれている。

それだけでさっきまでの暗雲は嘘のように晴れて、快晴のようになっってしまった。

俺の心を晴らすのも、曇らせるのも月華だけだ。

それはきつと、月華にとっても一緒だって 自惚れてもいいよね？

月華を抱いていた腕を緩め、まだ顔を染めたままの彼女と見詰め合う。

「俺の方こそ、宜しくお願いします」

軽く頭を下げ、上げた瞬間には

「はいっ」

可愛い笑顔と僅かに滲んだ涙が俺を迎えてくれた。

*

第14話

一目見て、慣れていないと分かる手つきで、一生懸命に野菜を切る月華を見ながら、今日夕食に使う肉を切り終えた。

かぼちゃなどの硬い野菜は危ないからという理由で取り上げて、さつさと薄くスライスしてしまうと、月華に残るのは、比較的料理しやすいものだけになる。

1人では異様に広く感じるキッチンも、月華と並んで作業をすればそんなに大きくも感じない。

たどたどしい手つきで、野菜を悪戦苦闘しながら切るその様子に、ハラハラしながらも、黙って見守る。

親が子供が自転車の練習をしてる姿を見てるような、そんな気持ちに類似してるような気がした。

「出来たっ」

どこか不恰好、でも頑張ったことが伝わる野菜たちをトレイに入れ、包丁をまな板に置いた月華が、額に浮いた汗を拭いた。

手に汗握るような緊張だったらしい。それがちよつと可笑しかった。

月華は不器用な部類に入るかもしれない。

一人で安心して料理させるにはまだまだ時間が掛かりそうだけども。
それでも、涙目になりながらも玉ねぎを切る姿は、どうしようもないくらいに可愛かったし、時間は掛かるものの一応形にはなるよ
うだ。

「手伝ってくれてありがとう」

満足気に自分の切った野菜を眺める月華を、後ろから包みこむように抱き締めた。

滑らかな頬に顔を寄せると、くすつと笑みが零れる音が聞こえた。

その音に顔を覗きこむと、嬉しそうに月華は微笑んでいる。

顎に右手を置き、少し上げさせてそのまま口付けをした。

「道也たち、呼ぶんじゃなかったな」

想像もしていなかった甘い時間に、黒い本音が漏れる。

俺の言葉に彼女は苦笑しながら、

「虎狼が呼んだんでしょ？」

そんなこと言ったら駄目だよ」

「でもこの時間を邪魔されたくない」

窘められても諦められず、不服一杯に呟くと、月華は悪戯っ子ぽく笑った。

「今日泊まるのに？」

「絶対早く帰してやる」

言いながら、またキスをすると

ピンポーン

チャイムが俺を呼んだ。

「……………」

「ほら、来たよ？」

「もう一回」

「へ？」

深く彼女の口内を味わってから、繋がった糸を唇を舐めて切り取った。

「ご馳走様。

嫌だけど出てくる」

耳まで真っ赤になった月華から惜しむ気持ちで手を離して、俺はドアを開け、予想通りの人物をそのまま庭に案内した。

「虎狼が待ってるかと思って慌てて来たのになあ」

部活帰り、グラウンド脇にある運動部専用の簡易シャワーで軽くシャワーだけあびて急いできてくれたらしい親友は、ふうと濡れた髪に指を通した。

道也と梓は部活帰りの制服姿のまま、ここに来てくれたとのことだ。

その優しさは分かる。

分かりすぎるくらいによく分かる のだが。

「ゆっくり着替えてくれれば良かったのに …」

折角の月華との甘い時間を邪魔されたことも事実で。

しかもこんなに早く、こんなにもスムーズに仲直り出来るだなんて思っていなかったので、喜びも一入ひとしおだったのに。

甘い感触を手放したことに、嘆息してしまった。

本音を漏らすと

「さつき、月華ちゃんといい雰囲気だったんだ？」

あんなことがあった直後だったのに、相変わらず手が早いなあ」

鋭い突っ込みが襲ってきた。

庭に案内したときにキッチンの奥で、両手を頬に当てて冷ましている月華の様子が見えたらしい。

どれだけ目がいいのか。

赤面する可愛い月華を他の男に見られてしまったことに、妙な憤りが込み上げてしまう。

「うるさい」

「はいはい、オレが悪かったよ。」

で？月華ちゃん、許してくれたんだ？」

「あぁ」

上手く俺を流しながら道也は目を嬉しそうに細めた。

「良かったな、虎狼」

何の悪意もなく、屈託なく笑顔を向けられた。

素直に頷くと、より満面に笑顔を咲かせた道也は、梓と用意した椅子に座って何やら話に花を咲かせている女性陣に目を遣った。

それにつられて2人を眺める。

梓も美人の部類に入る。

モデルのような体型に、気が強そうだけれど大きな瞳。

長い黒髪はきちんと手入れをされているため、毛先まで艶やかで張りがある。

でも、隣の月華の方がずっと可愛い。

「虎狼、顔緩んでる」

「月華、すっげえ可愛いよな……」

ポロリ、と心の声が漏れた。

道也は肩を竦めてから笑顔を苦笑にかえた。

「本当に好きなんだな」

俺は目の前に置いてある熱を放つバーベキューの網の上にトングで肉と野菜を並べながら、道也にしか聞こえないくらいの声で囁いた。

こういいうとき、聴覚と視覚が秀でた道也は便利だと思う。

「多分もついでなくなったら狂いそうなくらいには好きだ」

「ある意味究極じゃねえか。」

お前がいうと洒落に聞こえないから怖いよな」

ふっと軽い笑みを貼り付けた道也は言う。

洒落なんかじゃない。

紛れもない本音だった。

それからしばらく無言のまま、網に目を遣って肉と野菜に火を通す。

香ばしい匂いが鼻腔を刺激し出すと、情けないような声で、道也が腹へったあ……と呻いた。

「そろそろ焼けたから、2人を呼ぶか？」

俺も腹減ったし」

そう言うのと、途端に顔を輝かせる。単純な奴だ。

喰いたいならさっさと言えばレアでも食わせてやったのに。

「そっだな！」

おーい、梓に月華ちゃん。

もう食えるからこっちおいでよ」

2人は道也の声に顔を上げて、こちらに駆け寄ってきた。

「はい、月華。

沢山食べて」

自然と俺の隣に立つ彼女の持つ皿に、焼けたばかりの食材を置く。

「ありがとう。」

虎狼にばかりさせてごめんね」

「いいよ、月華火傷しそうで危ないから」

見上げてきた彼女の髪を撫でながら言うと、不服そうに口を尖らせる。

きつと不器用だったことは自覚してるのだろう。

むつとはしてるようだが、言い返してはこなかった。

「月華の手に火傷の跡なんて作りたくないし、こういう仕事は男に任せとけばいいから」

空いている月華の片手を取り、甲にキスをすると、夕日以外の感情で彼女の頬が赤く染まった。

明日も朝練だから、と2人は20時を少し回る頃に帰って行った。

仲良く並んだ長身の親友たちを見送ってから、使った道具の片付けをして、月華を家の中に入るように促す。

風呂を温めのお湯に設定して給湯し、キッチンで皿を仕舞ってく
れていた月華に声を掛ける。

「月華、先に風呂に入る？」

背伸びをして食器棚に皿を入れていた彼女は、俺の声に振り返っ
て首を左右に振った。

「虎狼先に入っていていいよ。」

あたしもう少し仕舞う皿残ってるし、まだお腹一杯だから入れ
ないよ」

そういえば、道也に倣ったように先日より食べていた気がする。

あまりに美味そうに食べるので、つい釣られてしまったのだろう。

「そう？」

「じゃあ、先に入るね」

彼女の好意に甘えてリビングのドアの閉め、2階に着替えを取り
に向かった。

着替えを用意し階段を下りると、水音がドア越しに聞こえる。

俺以外の人間がここにいること、それが他の誰でもない月華だということが、とても不思議なことに思える。

勝手に上がる口角を誰にも見られないように手で隠して、そのまま脱衣室に直行した。

着ていた服を洗濯機に放り込み。昨日すっかり洗えなかった分、ゆっくりと疲れと汚れを落とす。

濡れた髪をかきあげながら、浴槽で足を伸ばした。

いつもは設置されているテレビをつけて、漠然と動く映像を眺めるのだが、今日はそんな気さえ起きなかった。

…今日も、月華と寝るんだよな……。

嬉しいような、くすぐったいようなそんな気持ちと一緒に。

今朝の月華の怯えたような顔を思い出すと、ちよつと不安も込み上げる。

でも、あのままいったら……どんな顔で啼いたんだろう？

キスだけであんなに気持ちいいんだから、最後までやったら俺ヤバいんじゃないだろうか……。

「……」

想像してしまった。

啼く月華と、壊れる獣のような自分。

「…のぼせる前に上がるっ」

まだまだ気の早い妄想に頬を叩いて正気を取り戻すと、勢いよく立ち上がった。

髪を乾かしてリビングに戻ると、昨日と同じ光景が広がる。

そう、ソファアの上で可愛い寝顔で、同じように寝息をたてているのだ。

昨日も思ったけど、寝るの早いな……。

慣れない生活に少し疲れてるのかもしれないな。

俺は彼女の寝顔のまん前に昨日のように座り込む。

いきなり抱きついてくるかもしれない月華に備え、肩をぶつけなくて済むように、テーブルを大幅に動かした。

キメ細かい肌を指で滑らすように撫でて、いつも笑窪が出来る柔らかな頬を押した。

「月華、起きて」

深くは眠っていないなかったのか、声と突付く刺激に彼女はすぐ目を覚ました。

それでもぼやんとした顔をしている月華に微笑みかけた。

「お待たせ、月華も入っておいで？」

今日も暑かったし、煙にも巻かれたから汗流したいでしょ？」

緩慢に頷いて横たえていた身体を起こした。

膝立ちになって俺より目線の高い彼女の頬を両手で包むと、月華は小さく笑った。

「うん、入る」

「あ、月華。」

風呂入ったらさ」

「ん？」

頬に添えている俺の手に、自分の手を重ねた月華は首を傾げた。

まだ半分しか覚醒していないらしい彼女は、多くの言葉を語らず

に仕草だけで話をしている。

「髪 洗うよね？」

「うん、洗うよ？」

「シャンプーとか借りていい？」

泊めておいて駄目だという人間がいるのだろうか。

月之丞辺りなら、月華に意地悪で言いそうな気もするけど。

「勿論、使っていいよ。」

「ってそうじゃなくて」

「……じゃなくて？」

「俺が、髪を乾かしたい。」

上がったらドライヤーも一緒に持ってきて？」

洗濯物はそのまま洗える素材だったら洗濯機に入れて貰って構わないから」

頬から髪に手を伸ばした。

「駄目？」

「駄目じゃない」

顔を真っ赤にしながら了承してくれた。

「やった！」

自分でも思いの他嬉しかったらしい。

語尾に音符が付きそうなほど明るい声が出てしまった。

俺の過剰な喜びように彼女はちょっと眉を寄せ、怪訝そうな顔をしている。

悪戯でもすると思ってるのだろうか。

まあ、気にするのはやめよう。

そのまま甘い唇にキスを落として、月華に着替えを持つように促すと、手をつないで風呂場へと案内した。

浴室に入ってシャワーの使い方を教える。

浴槽内の温度は一定を保つようにしてあるから、温度を上下しないのならばそのままでもいいはずだし。

シャンプーなどの説明をする中にも、月華の視線はある一点に注がれていた。

「どうした？」

「虎狼、テレビがついてるよ！」

俺のパジャマの裾を引っ張って、壁の中に埋め込むように設置されたテレビを指差す。

「そりゃあ、ついてるでしょ」

祖父の実家には無かったけれど。

「ついてて当たり前みたいに言うけどね、あたしの家にはなかったよ。」

ね、ね、観てもいい？」

まるで好奇心旺盛な子供のように目をキラキラ輝かせる。

「勿論いいけど。」

月華がいないと寂しいから、あんまり長風呂しないでね？」

背の低い月華の顔を覗きこんで髪を撫でる。

すると、また顔が真っ赤に色づいた。

……反応がいちいち可愛いなあ。

「使い方分かった？」

俺も一緒に入ろうか？」

からかうと上目遣いに俺を潤んだ瞳で見ながら、かぶりを振った。

「冗談だよ。」

ゆっくり入っておいで。

でも逆上せないようにね？」

これ以上苛めると髪も乾かさせてくれなそうなので、そのまま浴室を出て、脱衣室を後にした。

「虎狼、上がったよ？」

しばらくすると、月華がテレビを観ていた俺に遠慮がちに声を掛けてきた。

画面から目を声の方向にやると、半そでに短パン姿の月華がリビングのドア付近に、約束通りにドライヤーを持って立っていた。

こいこいと手の平を動かすと、緊張した面持ちで俺の前に歩いてくる。

濡れた髪の毛の彼女はいつもより艶っぽい気がする。

湯上りで体温が高いせいか、頬が蒸気していて、目が離せない。

「虎狼？」

呼ばれてはっと正気に戻り、俺が居た場所に座らせて、ドライヤーの電源を入れた。

恥かしそうに俯く彼女の滑らかな髪を優しく乾かしていく。

柔らかかそうなのに意外にこしがある髪は痛みを知らず、絡めた指触りが気持ちよかった。

ドライヤーを洗面台に仕舞い、リビングに戻ると、今度は月華に手招きをされた。

「？」

自分の座るソファアの隣を指差すので、言われた通りにそこに腰を下ろす。

言われなくてもここに座るつもりだったので、何か変な感じだった。

「あのね、虎狼」

「ン？」

何故か赤面しながら月華は顎を少し引きながら見上げてきた。

何で紅くなってるんだ？

不思議に思いながら、次の言葉を待っていると、突然の質問に面食らった。

「あたしの、どこが好き？」

どこが好き？

具体的に、と言われるとよく分からない。

可愛い顔？

柔らかな唇？

温かい手？

甘えたような甘い声？
抱き心地のいい身体？

それとも、独りだった俺を好きになってくれた、優しい性格だろうか？

きっとどれも当てはまってて、どれも違うのだろう。

月華だから全部が好きで、月華だから全てが愛しい。

明確な答えは出ているのに、口に出すのは何だか躊躇われて、横に座る月華をちら見すると。

期待に大きく胸を膨らませているらしい、わくわくした顔が思いの外近くにあった。

……何かムシヨウに苛めたい、くらいに可愛い。

無意識なのか、手は俺のパジャマのズボンを摘んでいて、身を乗り出すように俺を見ている。

飼い主に食べ物を期待してる犬みたいだな、何だか。

俺は顔面に笑みを貼り付けて、月華を覗きこむ。

キラキラと期待に膨らんだ瞳の中に俺が映ったことが確認出来るくらいまで顔を寄せてから、甘い声で告げた。

「泣き虫なところ、かな？」

一気に月華の顔が固まって、それを見た俺の顔には作り物でない笑みが込み上げてきた。

「虎狼って ……もしかしてS？」

恐る恐る、といった様子で顔を覗きこんでくる。

その小動物のようなくりくりとした瞳には、当惑の色が広がっていた。

もしかして、って。

「うん、実は」

もしかしなくても、だ。

「き………キャラ違うよ？」

どんなキャラなんだ？俺。

当惑しているらしい彼女の声は、僅かに上擦っていた。

「俺も、ちょっとびっくりしてる」

流石に月華よりは驚いてないけど、ね。

月華を膝の上に抱き上げ、至近距離で向かい合う。

膝の上に乗った重みとその体温さえ、月華のものならば愛しく感じってしまうのは、どうしてなのだろうか。

恥かしそうに伏せる彼女の顔を、強引に持ち上げてこちらを向かせたくなるような衝動に駆られた。

が、そこは我慢することにした。

「俺さ、今朝。

月華を怖がらせて、すっげえ好きな月華に『嫌わないで』って泣かれて。

もう大地にめり込みたいくらいに、ショックだったんだ」

「……ショック？」

月華は不思議そうに俯いていた顔を上げて、失態を思い起こして苦笑する俺を見つめる。

「うん。まだ月華を不安にさせたままなのかなって……。俺が月華を嫌うなんてこと、出来るわけないのに」

「え？」

「……物凄い自己嫌悪でさ。」

俺こそ月華に嫌われたらどうしよう……って。道也に電話までしちゃって、さ。

俺、格好悪いなって」

本当は。

こんなこと、隠しておきたかった。

弱い自分を、自信がない自分を曝け出したくはなかった。

でも、月華が俺の傍で、不安に塗れて穏やかでいられないことの方が、何倍も嫌だった。

俺ばかりが月華という存在で癒されて、彼女の優しさに甘えていただけなのは許せなかった。

月華にとっても、俺の傍が一番安心出来て、安らげる場所であって欲しい。

どこよりも誰よりも彼女にとって、笑顔でいられるところでありたい。

願いながら、俺を救い出してくれた手を取って、包むように握る。

「月華に……幻滅されたくなくってさ。

いつもみたいに……とは、また違うんだけど。

月華にだけは、少しでも良く見られたくて　自分を偽ってた」

喋りながら、だんだんと俺の頭は下へ下へと引っ張られるように、下がっていく。

それでも、ぎゅうと彼女の手が俺の手を握り返してくれた。

それに勇気付けられ、顔を上げる。

月華は泣いていた。

泣きながら、俺の言葉に耳を真剣に傾けてくれた。

月華の全てが、俺を向いていた。

「でも、月華を抱きたいって俺の勝手な気持ちだけで突っ走って怖がらせたのに。」

月華はそれでも『俺がいい』って言うてくれたよね？」

繋がっていない手を伸ばして、赤く染まる頬を伝う雫を拭う。

「それが、本当に嬉しかったんだ。

俺は、俺を無条件で受け入れてくれる、月華の全てが好きだよ」

そう、どんな月華でも。

どこが、とか、なにが、なんてないんだ。

四聖月華が、四聖月華だから　好きだよ。

「これからは」

1度言葉を切って、月華を見る。

俺の告白に顔を真っ赤に染めながら、ぼろぼろと透明な雫を流しながら、最愛の彼女は俺を見つめ返した。

「これからは学校でも月華って呼ぶから」

「え？」

「葛葉にも、実は嫉妬してた。

月華を名前で呼びやがって、しかも2人だけで昼とかありえないし」

「虎狼？」

ぶつぶつと文句を垂れると、瞬きをしながら自分で涙を拭く月華。

「俺、すげー嫉妬やまじち焼きだから、覚悟やまじちしててね？」

「うん」

余裕がなくて格好悪いけど、本当のことだから。

包み隠さず本音を伝える。

うん、と月華は相槌を打ったけど、分かってるのかなあ？

それから、と。

付け加えてから伝える。

「実は 俺のために泣いてくれるのも嬉しい」

「え？」

泣き虫やじゃないの？」

嫌な訳ないだろ？

本当は月之丞の言うように泣かせないようにしたいけど。

気が付いてしまったから。

「月華の中に俺しかいないみたいで」

もっともっと、俺だけを想って欲しい。

自分勝手な願いを込めて、甘美な唇にキスを落としました。

*

第15話（前書き）

文字の感覚がワードパットからの更新なんで狭まってるかもしれません。

今までは携帯サイトからの更新だったんで、そのまま結構空間が空いてたんですけどね。

どっちが読みやすいのだろう？

第15話

「もしもし、お父さん？」

ちゃんと虎狼と付き合ったことを報告をしたい、と言い出した月華は、NYにいるおじさんに国際電話を掛けていた。

家電なんて久しぶりに使うなあ、なんて思いながら、子機に向かって話している彼女の隣でお茶を飲む。

受話音量が大きい為か、電話機が古いためか、は判断が付かなかったが、電話機からは微かにおじさんの優しい声が漏れ聞こえている。

数日振りに大好きな父親と話す愛しい人の顔は、幸せそうに微笑んでいて、それだけで心が温かくなるから不思議だ。

「うん、月華だよ。」

「そっちはどう？」

月華は俺を見ながら、少し子機を持つてる手を俺に寄せた。

どつやら一緒におじさんの声を聞かせようとしているようだった。

電話機までの距離を縮めると、さっきより鮮明な音が耳に届く。

『うん、順調だよ。お母さんも元気にやってる。

月華はどうだ？

『月之丞は相変わらずか？』

「うん、あたしは大丈夫だよ。

お兄ちゃんも勿論相変わらずに元気だし。

あたしの勘だとね、お兄ちゃんにも好きな人が出来そうかも」

……月華に勘なんてあったのか。

なんて失礼なことを思いながら、カラカラとグラスに注いだお茶に沈む氷を回す。

透明な緑の液体の中で、それらは上品に踊っているように見えた。

「あのね、お父さん。

あたし、彼氏が出来たんだよ」

いきなり本題か。

NYとの時差は14時間程度。こちらはもう夜も更けているのだから、向こうは一日の始まりの朝、つまりは出勤前だろう。

朝から溺愛していた娘に、彼氏の存在を告げられるとは……仕方ないこととはいえ俺だったら嫌かもしれない。

『虎狼だろっ?』

間髪入れずにおじさんは言った。

漏れ聞こえてきた音を聞いて、思わずグラスを落としそうになる。

「なんで分かるの?」

月華が不思議そうに首を捻ると、そんな姿もおじさんの目には浮かんでいるのだろう、楽しそうな声が響いた。

自分を落ち着かせるために、お茶を口に運んだ瞬間、

『お父さんと月之丞は、虎狼以外に月華を嫁にやる気はないぞ』

勢いよく飲んでいたものを盛大に噴出してしまった。

気管に液体が入り込み、かなり苦しい。

咳き込んだ俺の背中を、目を丸くして驚いた月華が擦ってくれた。

『虎狼がそこにいるの?』

「うん、今……咳してる」

そんなことまで説明しなくてもいいから。

しかし、早くこんな失態から抜け出したい俺の意に反して、咳はなかなか止まりそうにない。

『じゃあ、その咳が落ち着いたら、俺のもう1人の息子にちよつと代わって?』

そんな中でも、おじさんの声はとても優しかった。

苦しさゆえの条件反射ではない涙が、薄く薄く滲んだ。

「もしもし、お電話替わりました、虎狼です」

月華から受話器を受け取ると、立ち上がってダイニングからキッチン奥へと移動する。

月華とおじさんの会話はつつい彼女の優しさから聞き耳を立ててしまっていたが、何となく男同士の会話を聞かれなくなかった。

なんとも矛盾したことではあるのだけれど。

『虎狼、元気か?』

おじさんの声は月之丞のそれを低くしたようなものだった。

声質は流石親子でよく似ているが、俺に与える印象は雲泥の差がある。

何をしでかすかわからない息子のそれより、遥かに穏やかで安らぎを与えてくれる。

声にも包容力があるって凄いことだよな。

「はい、元気です」

それだけの挨拶も何だかくすぐったくなってしまい、俺は知らぬうちにはにかんでいた。

『月華と付き合ってるんだって?』

「はい」

『月華……大分我が儘だろ?』

「はい」

悪戯っぽい方に、おじさんのにやりとした表情が思い浮かんだ。
今ではすっかりと落ちるにはいるが、考えたくもないが、もしかししたら昔は月之丞のような性格だったのかもしれない。

『そうか……。月華の性格は保育園の頃からまったく変わってないからなあ』

三つ子の魂百までも、だ。

俺だって本質は全く変化などしていない。

おじさんは急に話題を変えた。

『……広い家に、1人は寂しくないか？』

どうして俺が1人で住むには広すぎる家に住んでいることを知っているのだろうか。

淡い疑問を抱きながらも、素直に頷く。

『月華で良ければ、一緒に住んでもいいぞ？』

「え？」

『虎狼と一緒にいたいって望んでくれるのなら、な。どうせ虎狼にしか嫁にやるつもりはないんだから』

おじさんはさらっと娘の将来を決めた。

「ありがとうございます……。」

でも、おじさん？

月華がもし俺以外を選んだらどうするつもりだったんですか？」

『勿論月之丞を駆使してでも、全力で阻止だ。』

一生独身を貫かせる』

……ああ。この人は、本当に月之丞の父親だ。

それでも、月華を嫁にしてくれるのならば、今すぐにも欲しい。

そう思う俺もそろそろ末期かもしれない。

『それと、……避妊だけしてくれればいいから』

「おっ、おじさん？」

とんでもない言葉が出てきた。

驚愕した俺の声は、自分でも呆れるくらいに慌てて裏返っていた。

いや、月華本人にももう伝えたいし、抱くつもりはあるのだけれど。

こつも公認でいいのだろうか……。

ずるずるとキッチンの壁に背を預け、その場に崩れるように座り込む。

『月華さえよければ、俺はかまわない。』

結局本人達の意味だろうか？

でも、妊娠はせめて高校を出てからにしてくれよ。

虎狼と月華の孫なら、早く見たいから。

変な話だけど頑張ってくれよ？』

な、なんつーことを……。

込みあがってくる羞恥で、口元を押さえてしまった。

「は、はい。」

が、頑張ります」

それでもついつい答えてしまう、ある意味実直な俺。

『月華をよろしく頼んだぞ。』

月之丞は……あれは1人で何でも出来るから問題はないと思うが……。

何か起こしたときの尻拭いは、ちょっと手伝ってほしいかもしれない』

「な、何か起こしたとき？」

『あいつも月華が絡むと、何をしでかすかわからないところがあるから』

それは俺もなんだけどな、とおじさんが電話の向こうで溜息交じりに囁いたことはこの際、聞かなかったことにしておこう。

どんな問題を起こしてきたのか分からないが 問題を起こしてきたらうことは、容易に想像は出来るのだが これからは俺が月華をしっかりと守っていけばいいだけの話なのだ。

『それじゃあ、後何かあるか？』

「本当に、俺でいいんですか？」

俺、おじさんたちが思ってるほど……その

綺麗ではないんです。

『虎狼、お前は俺の自慢の息子だよ。』

何も卑下することはないんだ』

最後の言葉を紡ぐ前に、力強い言葉が返ってきた。

『月華をよろしくな』

「はい」

今度はすっかり返事をする事が出来た。

おじさんの温かい言葉が、じんわりと身体に染み入ってくる。

「あ、月華に替わりますか？」

『いや、いいよ。』

もう出勤時間なんだ。

じゃあ、またな』

「はい、仕事頑張ってください」

ありがとう、と言って電話は切れた。

無機質な電子音を聞きながら、終話ボタンを押す。

湧き上がってくるような安堵感と、喜びを噛み締めながら、リビ

ングにある充電器に子機を戻した。

「お父さん、何て？」

俺の噴出したお茶を綺麗にしてくれていた月華に、礼をいいながらソファーに戻ると、興味津々といった顔で訊ねてきた。

「ナイシヨ」

笑いながら言うと、不満そうに頬を膨らませる。

まさかおじさん本人から、同棲とエッチの許可が出たなんて、言えないし。

……行為はともかくとして、同棲の話はいつ切り出そうかな。

あんなことをしてしまった昨日の今日で、仲直りというか、意思の確認が出来たばかりなのだから、この話をするのは少しばかり早計に思えた。

「さ、俺の部屋行くか」

もう寝るにはいい時間だ。

月華を抱き上げ、リビングとテレビの電源を落とす。

すっかり月華を抱き上げることが癖のようになり、月華も当たり前のように俺の首に腕を回す。

「ええ？」

俺の部屋に抵抗があるのか、驚いた声を漏らした。

それ、ちょっと傷つくんだけど。

「……大丈夫、何もしないから」

言いながら、階段の電気をつける。

すると、少し残念そうな表情が窺えた。

ほんと、表情豊かだなあ。思ってることがバレバレ。

「今ちょっと残念で思ったでしょ？
月華のエッチ」

「~~~~~！！」

凶星だったのか、一気に顔が熱を持ったらしい。

真っ赤。

「うわ、赤くなった……」。

じゃあ、ちょっとだけ、しよっか？」

苛めたい本性が顔を出して、俺自身がどんな顔をしているのかも分からないまま、俯く顔を覗きこむ。

「もおっ、虎狼のバカっ！

降ろしてっ」

胸を両手で押してくるのを、更に強い力で抱き締めた。

「絶対やだ」

暴れる彼女を落とさないようにするのは至難の技だったが、何とか階段を上りきって部屋のドアを開けた。

*

第16話(前書き)

R15くらいで。

書き終わってからまだいぶここに掲載していいのか迷いましたが、ちょっと間接的にして、ムーンライトにきちんとした描写を掲載しようかなあと考えています。

第16話

階段を登りきると、「ごくり、と小さく空気を呑む音が聞こえた。

ドアを開けて部屋に入ると、俺に巻きついていて腕が強張る。

電気をつけないまま、廊下と外の街灯から漏れる光を頼りにベッドを探しあて、そつと横たわらせる。

戸惑った表情で俺を見上げ、畳んでおいたタオルケットを抱くようにしてぎゅうと唇を噛んでいた。

蛍光灯の光量を絞り、表情が辛うじて分かるくらいまで暗くしてから、エアコンの温度を設定した。

ベッドの淵に腰掛けると、びくつと月華の方が動いた。

「ぶっ、緊張してるし」

あまりの初々しい反応に、笑みが零れる。

手を伸ばしてその真っ赤に熟れているだろう林檎のような頬に触れると、熱いくらいの体温が伝わってきた。

「き、緊張するもんっ」

口を尖らせる月華。

なけなしの余裕を作って、微笑みかける。

「うん、慣れていこうね」

俺だけの感覚に、慣れていって欲しい。

どうかこの先も、月華に触れられるのは 俺だけでありますよ
うに。

そんな願いを込めて身を屈め寄せた唇は、何の抵抗もなく受け入れられた。

「隣に寝てもいい？」

「……うん、抱っこ」

そう言って手を俺に伸ばしてくる。

彼女とマットレスの間に手を入れ、その柔らかな身体を抱きしめると、耳元で甘い吐息が漏れる。

生きている、音。

すぐ傍にある、狂おしいほどにいとおいしい温もり。

俺に包まれている、月華の変わらない匂い。

抱きしめる力を強めると、腕の中で微かに身じろいだ。

琥珀色の両の瞳が、俺を見据える。

「虎狼……?」

「ん?どうした?」

「ドキドキ……するね」

「うん、そっだね」

たどたどしくも懸命に彼女が言葉を紡ぐ。

ほんと、どこまで可愛いんだろ。

「優しく、してね?」

それは最後の殺し文句だろ?

「最後までしていいの？」

「……!!」

だ、駄目!!……まだ、駄目っ」

やっぱり自覚してないし。

「うん、分かった。

気持ちよくしてげる」

「こ、虎狼のばかあっ」

……何がばか、なんだよ。

キスだけでこんなに心地いい月華となら、身体を合わせたら本当に気持ちいいと思うのに。

俺しか知らない月華にはまだ分からないか。

怖かったら言ってるね?と前置きしてから、背けられた熱い顔を戻し、静かに唇を重ねていく。

反応を見ながら、最初は浅く短く。

緊張で硬くなっていた唇が、熱と愛撫でだんだんと柔らかく甘くなっていく。

薄く開いた唇に舌を忍び込ませると、ぎこちないそぶりで応えてくれた。

行為自体は数え切れないほど重ねたが、キスはどうしても請われるまでしなかった。

嫌悪さえ感じセックスが終わるたび、丁寧に歯を磨き、うがいを何度もした。

潔癖症なのか、と疑われるほど幾度も肌に泡を滑らせた。

なのに、月華と触れ合う皮膚接触はこんなにも特別で。

月華と触れた部分は、洗い流したくないとも思ってしまうほどだ。薄く目を開き、彼女の反応を窺う。長いキスで溢れたお互いの唾液を舐め取り、顔を離す。

「……………虎狼？」

閉じていた瞼が上がり、微かに揺れた瞳が姿を現す。

その瞳で俺の顔を確認すると、照れくさそうに、それでも嬉しそうにはにかんだ。

……………ほんと、どこまで無防備なんだよ。

頬にキスをしてから、首筋に舌を這わせる。

「やん、くすぐりたい」

甘い声が直に脳に響くようで、くらくらと淡い眩暈が迫る。

甘美な痺れに酔いながら、耳元へ唇を寄せ

「月華、可愛い」

囁けばますます嬉しそうに笑う。

どこまで俺に我慢大会をさせるつもりなのだろう。

こんな時に微笑まれたら、自制心という頼りない制御が利かなくなる。

春先に雪解け水で決壊するダムのように、俺の中の自製のキャパはどんどんと限界が迫ってきていた。

欲望に呼応して、荒くなりそうな呼吸を必死で堪える。

このまま自分の下半身が求めるまま、爆発してしまったら、月華が傷つくのは目に見えている。

「ね、月華……」

「んっ、首筋で喋らない……で？」

白い首筋に唇を付けながら囁くと、喘ぐような声で身体を擦じらせた。

柔らかく温かな身体が俺の下で身動き、吐息が耳元をくすぐるように通過した。

……もう限界。

「嫌、だったら言っただけ？」

一言、健気に脳裏にこびり付いた理性が、辛うじて口から飛び出した。

2つの膨らみの片方を、右手でそうっつと包み込みように覆うと、予想だにできなかったことに驚いたのか、彼女の身体が小さく跳ねた。

月華が息と一緒に言葉を飲み込んだのが分かった。

それでも拒絶する気配がないことに安堵を感じながら、

「ホックだけ外すね」

彼女の背中に手を差し入れて、その矯正道具から彼女の胸を解放した。

数年に近いブランクがある、というのに、いとも簡単に外れた金具の懐かしい音が聞こえた。

ステータスだと勘違いしていたその皮肉な経験も、今となってはただのくだらないものだったのだと気がついた。

きつと、どんな慣れない仕草でも、月華は俺を受け入れてくれただろうから。

今更なことを必死でしがみ付いている理性で考えながら、指は本能のままに行動を始める。

薄い生地の上から少しだけ下着を押し上げ、その布だけになった部分に手の平を滑らせた。

いきなり驚かせないように、指を彼女の膨らみに沿わせていく。

今まで経験したことがないだろう未知の感覚、たとえようのない恐怖で強張る口元に、自分の唇を押し付けて気を逸らせる。

硬く閉じていた唇は、何回かのノックで俺をその熱い口内に招き入れてくれた。

応える、ことに慣れていないぎこちなさがまた俺の思考回路を寸断まで持ち込む。

このまま抱けたらどれだけ楽だろう。

既に知っている快感以上のものが得られると知って尚、歯を食いしばらなければならないのは、正直拷問に近い。

内心戸惑っているだろう彼女の意思とは無関係に、次第に撫でていた頂がその存在を主張し始めた。

押し込むように強めの刺激を与えると、

「あっ、虎狼っ」

キスの隙間から甘い声が俺の名前を呼んだ。

確実な興奮がその声から伝わる。

彼女の下腹部に指を差し込めば、もしかしたら俺を受け入れ始めようと準備をし出した頃かもしれない。

自分の中で勝手に始まる今の彼女には早すぎる想像を、目を音がしそうなほど強く強く閉じて振り払った。

その瞬間、今までシーツを握っていた月華の手の平が、俺のシャツを強く掴んだ。

その仕草で正気に戻される。

俺の理性も、だけど。

月華ももう、限界だよな。

貼りついたみたいに離さなかった唇を離すと、ゆっくりと涙目と言って良いほど潤んだ瞳が揺れながら俺を直視した。

誘っているとしたか思えない、その魅惑的な色を含んだ彼女に何とか笑いかけた。

「はい、お仕舞い」

「……え？」

彼女の身体を愛撫していた手を、そっとシャツを握っていた彼女の手を解いて絡ませる。

吸水性のある生地を掴んでいたのに、微かに汗ばんだ彼女の手のひらは、月華の緊張を俺に教えてくれた。

怖いのを我慢して受け入れてくれたんだね。

月華は俺を拒絶しない。

それだけで嬉しさがじわじわと、まるで春の陽射しのように湧き上がってくる。

「大丈夫？」

月華は枕に頭を乗せたまま、ふるふると左右に首を振る。

口を開いて何か言葉を紡ごうとした彼女の口元に人差し指をつけて、その主張を遮った。

彼女の言葉より、今は伝えておかなければいけないことがある。

「月華。」

その顔、絶対俺以外の誰にも見せないでね」

「……顔？」

意味が分からないのか、さっきまでと同じ甘さのトーンで単語を繰り返す。

「そう、誘われてるみたいでやばいから」

「~~~~っ!!」

「ばかあっ」

言わんとすることを理解した月華はそっぽを向いてしまった。

薄暗い中にも彼女の頬が熱を帯びたのが分かり、俺の頬は緩んでしまう。

そのまま彼女の隣に横になり、重さから解放する。

密着していて全身で感じた体温が、離れてしまったことが寂しい。背中に感じる布団の冷たさすら、真夏の今なのに気持ちよく感じられない。

寂しいと思っっているのは月華も一緒だったのか、くるんと俺の方に振り返り、腕を小さく広げて呟いた。

「虎狼、抱っこ」

「うん、おいで」

変わらず甘えてくる彼女を抱き寄せ、髪を梳くように撫でると、安心したように笑顔を作り、ゆっくりと目を閉じた。

すぐに聞こえてきた安定した呼吸音を耳にしながら、痛くないくらいに強さで彼女を抱きしめ、

眠れるかな？

なんて考えたのは無用の産物で。

さっきまで暴れていた欲望は月華の寝顔になりを潜め、あっといっ間に眠りについた。

*

第16話（後書き）

久々の更新はちょっと短めです。

次も少し描写があるんだよなあ……。

苦手な人は飛ばしてくださいませペコリ（。ー）（。ー）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9321i/>

手をつないで

2011年7月19日13時48分発行